

第381図 S A-175 遺構実測図

2層から土師器片80点と須恵器片6点、砾石1点が出土している。出土品の内容から、小鎌冶を想定させる。6世紀後半である。

S A-164 (第361図)

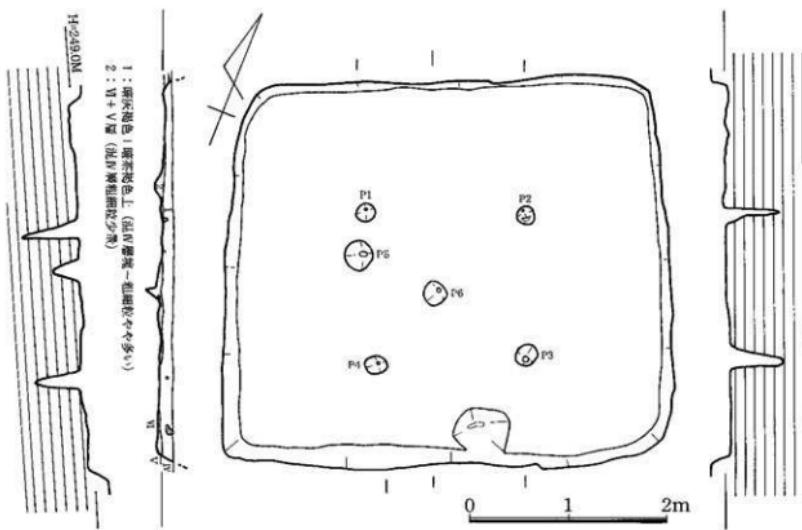
東西3.1~3.2m・南北3.2~3.4mの隅円方形プランで、南東隅に、幅1.7m・奥行き44cmの突出部があり、スロープ状になっていることから、出入口と推定される。覆土は14~24cm遺存し、土層的には5cm程の削失が推定される。主柱穴は不明で、中央には初期の掘り込み炉（B）が、その東には2次炉（A）がある。2次の段階では、北半分に貼り床が施され、12cmの段差がつく。

覆土から、土師器片756点のほか、須恵器片10点、鉄鎌・砥石各1点等が、2層から土師器片33点が出土している。砥石（3791）は、162号住居と165号住居出土片と接合している。6世紀後半である。

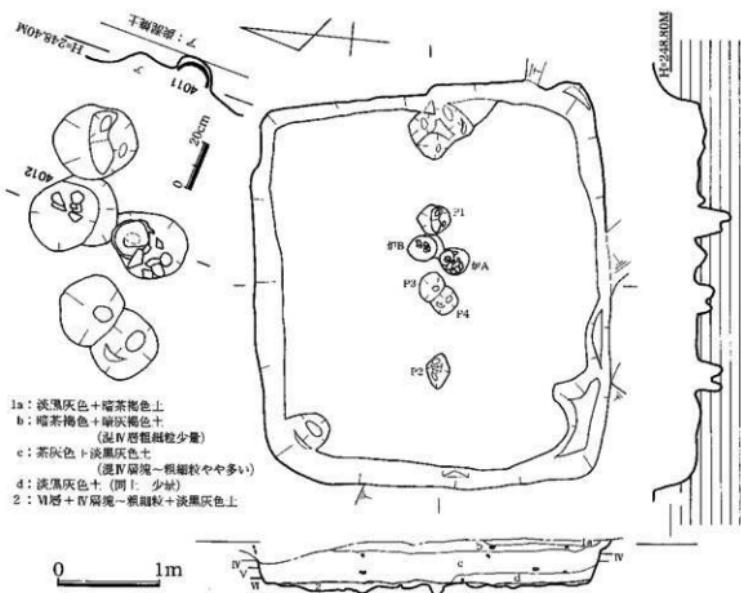
S A-165 (第362回)

164号住居の2.2m西、166号溝に切られ、2軒の住居が重複している。検出時には、切り合いが全く識別できなかったので、掘り下げ途中からA・Bに分け、断面観察で切り合いを確認した。

Aは、東西3.1~3.3m・南北3.1~3.57mの、東辺が長い隅田左形を呈する住居である。覆土は44



第382図 SA-176 遺構実測図



第383図 SA-177 遺構実測図

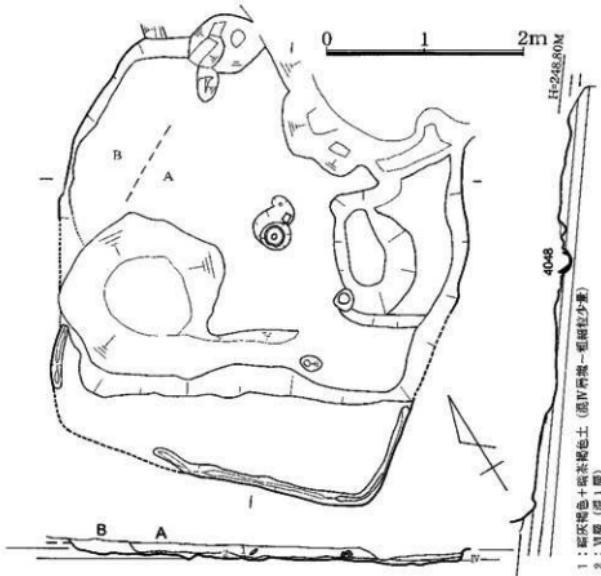
~54cm遺存し、上層的には殆ど削失していない。主柱穴は無く、中央には、口縁部と底部半分を打ち欠いた甕(3812)を使用した土器埋設炉がある。

Bは、東西3.4m・南北2m以上の方形か長方形の住居で、Aの中央付近まであったと推定される。長径29cm・短径25cm・深さ12cmのpitが伴う。機能的には、主柱穴ではなく、掘り込みかもしくは土器埋設炉が想定される。

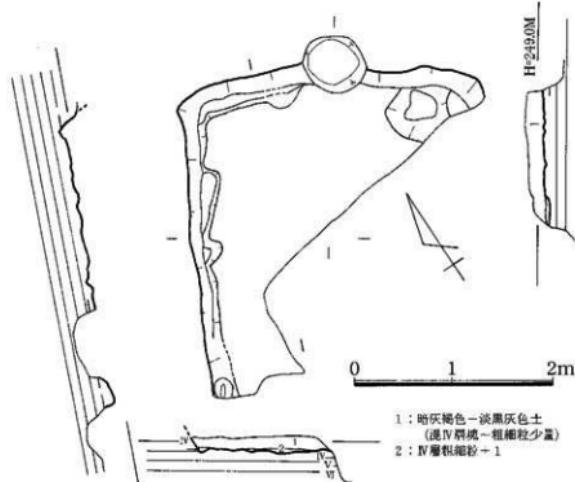
覆土から、土師器片1168点のほか、須恵器片9点、鐵鎌片(3801)、鉱滓小片1点等が、2層から土師器片10点が出土している。3826は、丹塗り高壺の脚を転用した蓋で、壺接合面も丁寧に磨擦している。6世紀後半である。

#### S A-166 (第363図)

削平著しく、主柱穴もないが、口縁部～胴部上半を打ち欠いた甕(3829)を使用した土器埋設炉と、直径70cm前後・深さ10cmの土坑、周辺には若干のIV層混じり土があり、1辺3m前後の住居があつたと推定される。



第384図 S A-178 遺構実測図



第385図 S A-179 遺構実測図

2層から、土師器片20点が出土しているが、図化に耐えない。5世紀後半か。

#### S A-167 (第370図)

148・166号住居の北側の、大きく天地返しを受けた位置で、住居の痕跡を確認した。覆土は4.5×3.5m程に認められ2層も同様の範囲にあり、削失は40cm程と推定される。プランは、不整円形の

間仕切りタイプの可能性がある。

主柱穴は不明瞭で、台石(3830)

を除去すると、口縁部～胴部上半を打ち欠いた壺(3831)を使用した土器埋設炉を検出した。長径2.36m・短径2.05m・深さ10cmの掘り込みは、機能していない。

覆土から、土師器片48点と須恵器片2点が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。

#### S A-168 (第371図)

近現代の168号溝と、古墳時代の片側小口付設土坑(S K-1017)

に切られた、東西3~3.34m・南北2.9~3.0mの、隅円台形を呈する



第386図 S A-168 遷構実測図

住居である。覆土は6~9cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。貼り床は無く、主柱穴と炉も消失している。

覆土から、土師器片59点と須恵器片1点(混入か)が出土しているが、1点のみ図化できた。5世紀代か。

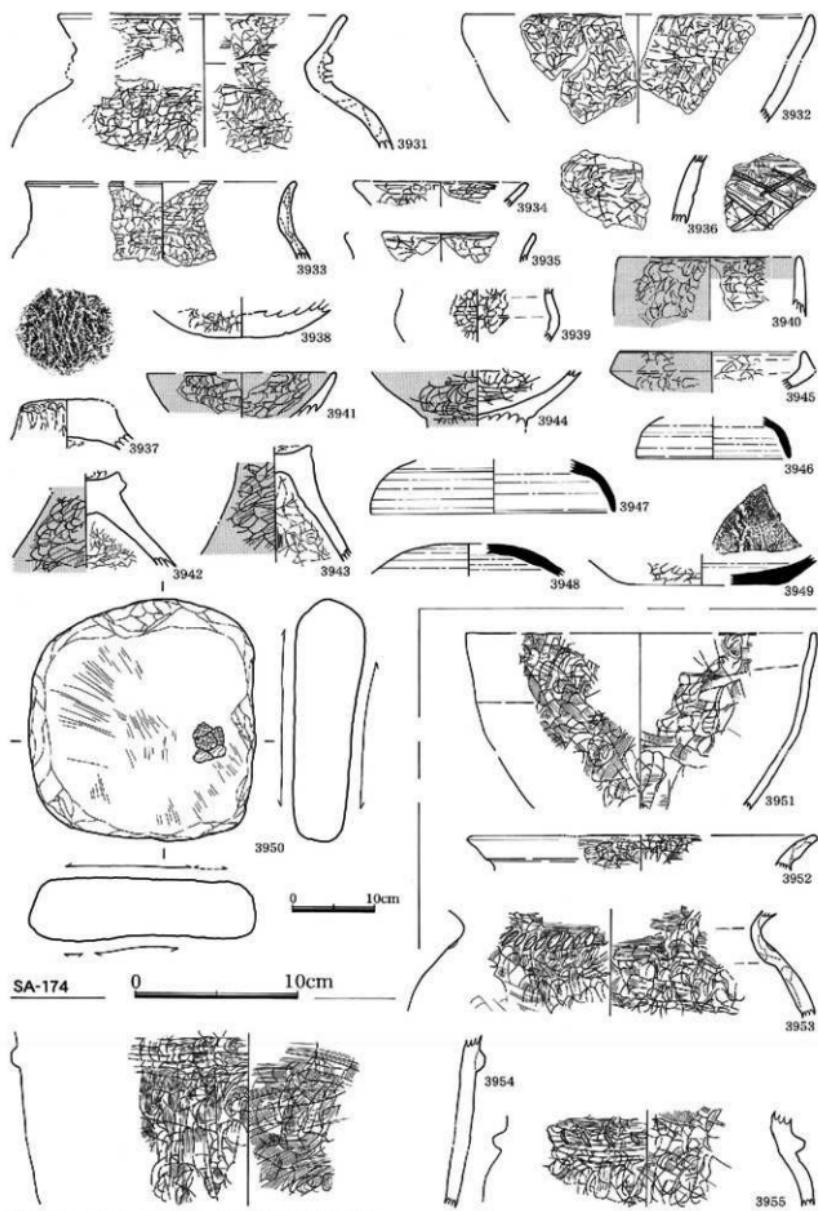
#### S A-169 (第372図)

168・174号溝に切られた、長さ3.6~4.06m・幅3.5~3.63mの、西辺が短い隅円長方形を呈する住居である。覆土は46cm遺存し、南側2/3は5~10cmの削失を受けている。主柱穴は無いが、中央やや南寄りに、口縁部と底端部を打ち欠いた壺(3844)を使用した土器埋設炉がある。南辺中央には深さ18cmの土坑がある。

覆土から、土師器片527点と須恵器片7点が、2層から土師器片数点が出土している。須恵器の壺(3863)は、170号住居出土片と接合している。6世紀後半である。

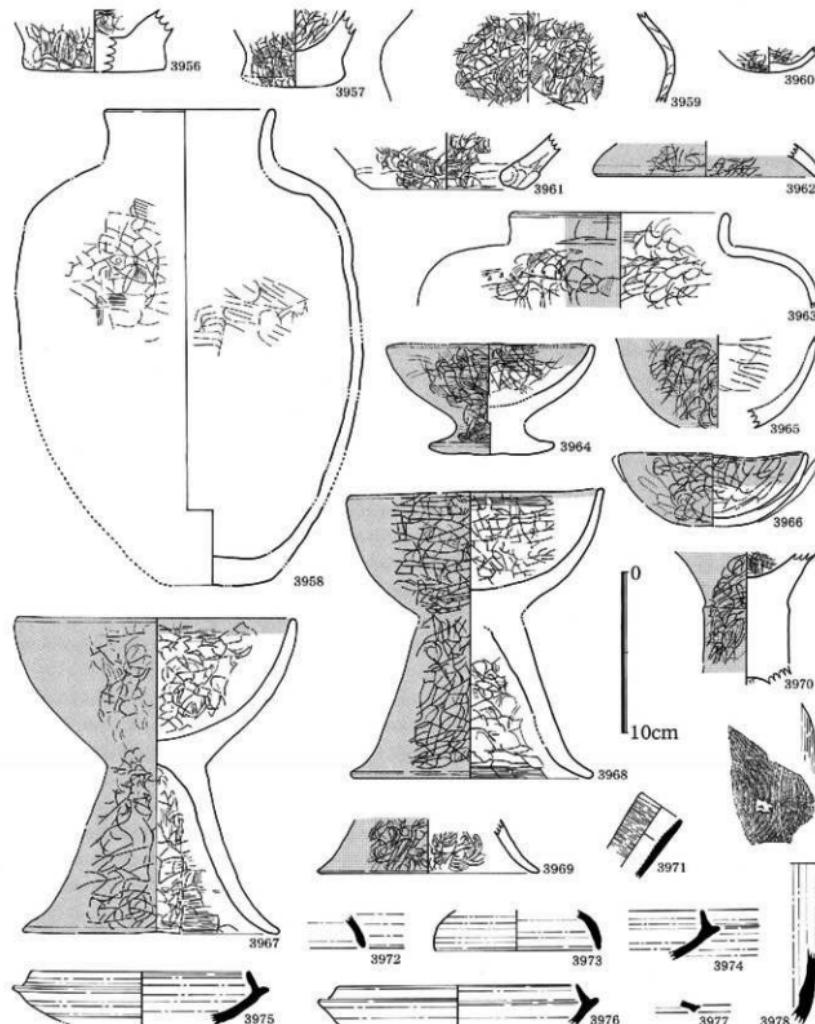
#### S A-170 (第373図)

長さ4.19~4.40m・幅3.6~3.86mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は20~30cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は不明瞭であるが、中央やや北寄りに、口縁部を打

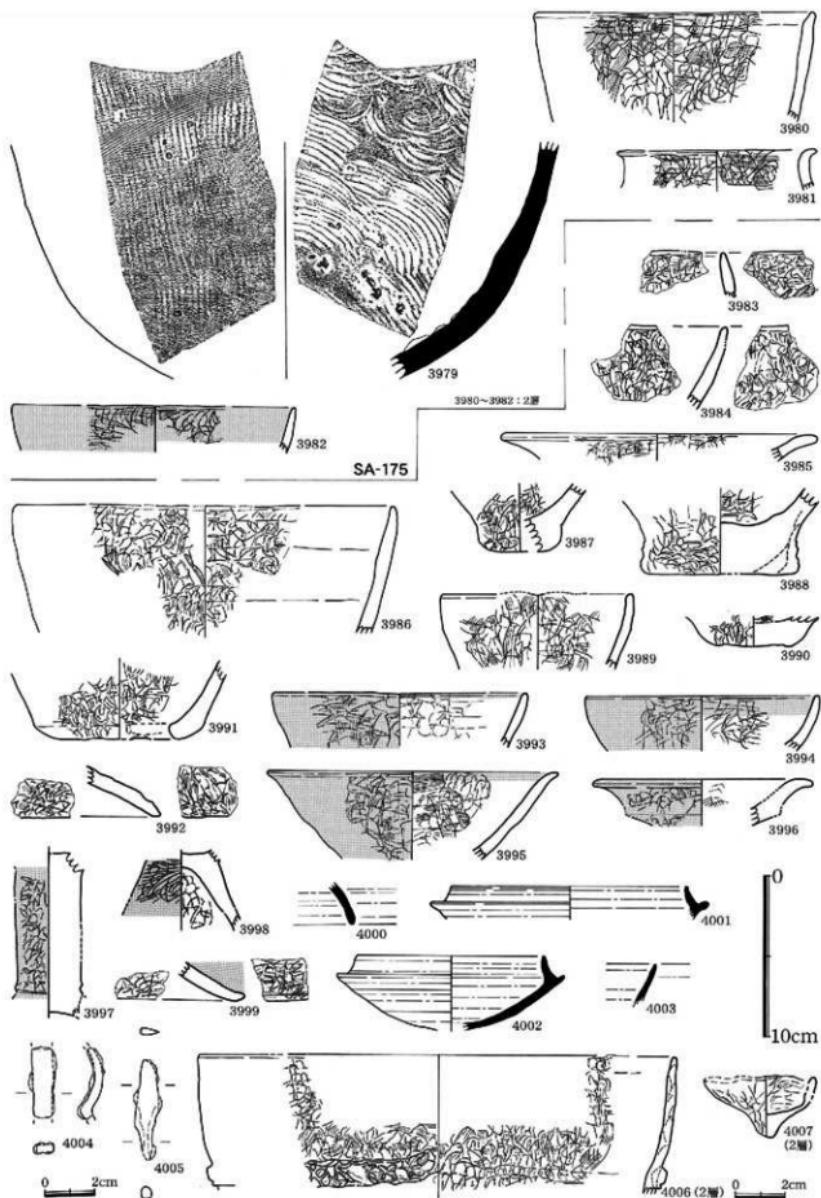


第387図 SA-174-175 出土遺物実測図(1)

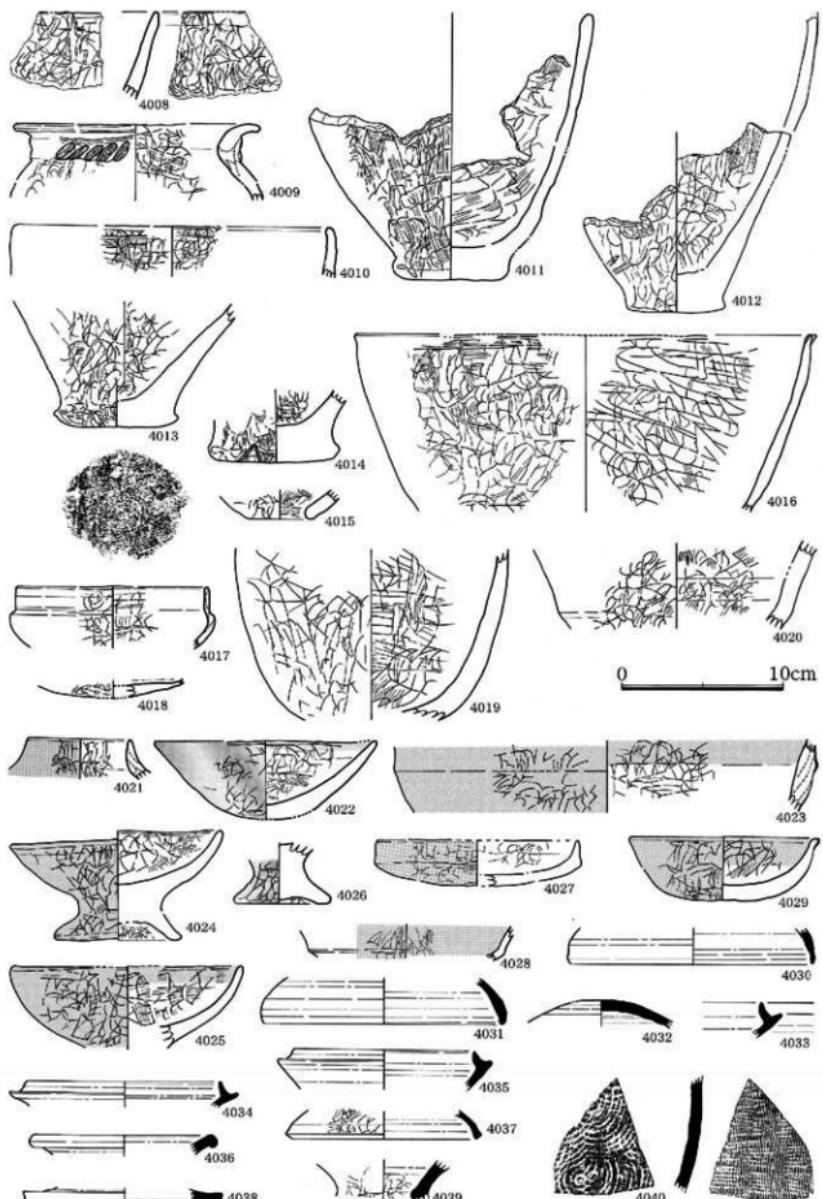
ち欠いた甌（3888）を使用した土器埋設炉（A）が、その南には、口唇部を打ち欠いた甌（3887）を使用した土器埋設炉（B）が、さらには、炉Bに壊された掘り込み炉（工層：C）と上部を埋められたpit（P 1）がある。P 1は、位置的に主柱穴とは言い難く、炉Cと同じ初期のロクロpitの可能性を推定している。2次期はP 1を埋めて炉B、3次期は炉Aへと変遷したと考えたい。



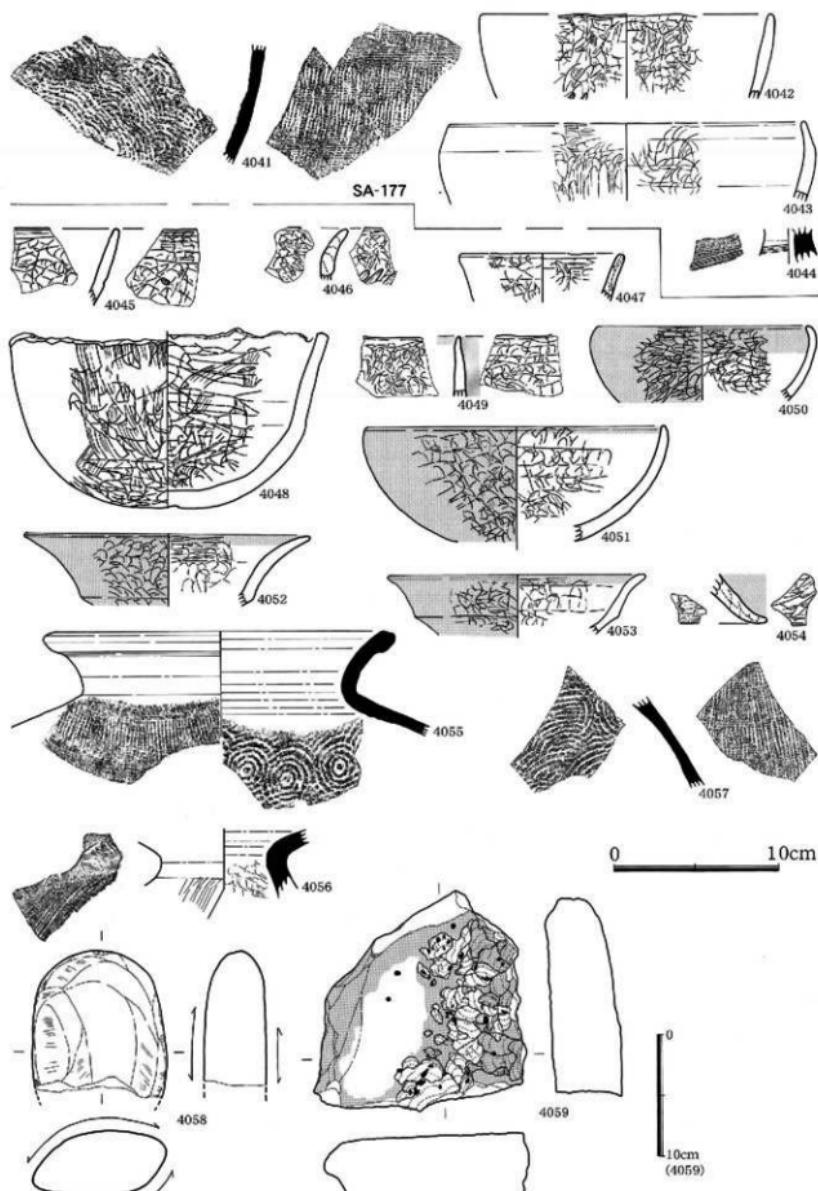
第388図 S A-175 出土遺物実測図(2)



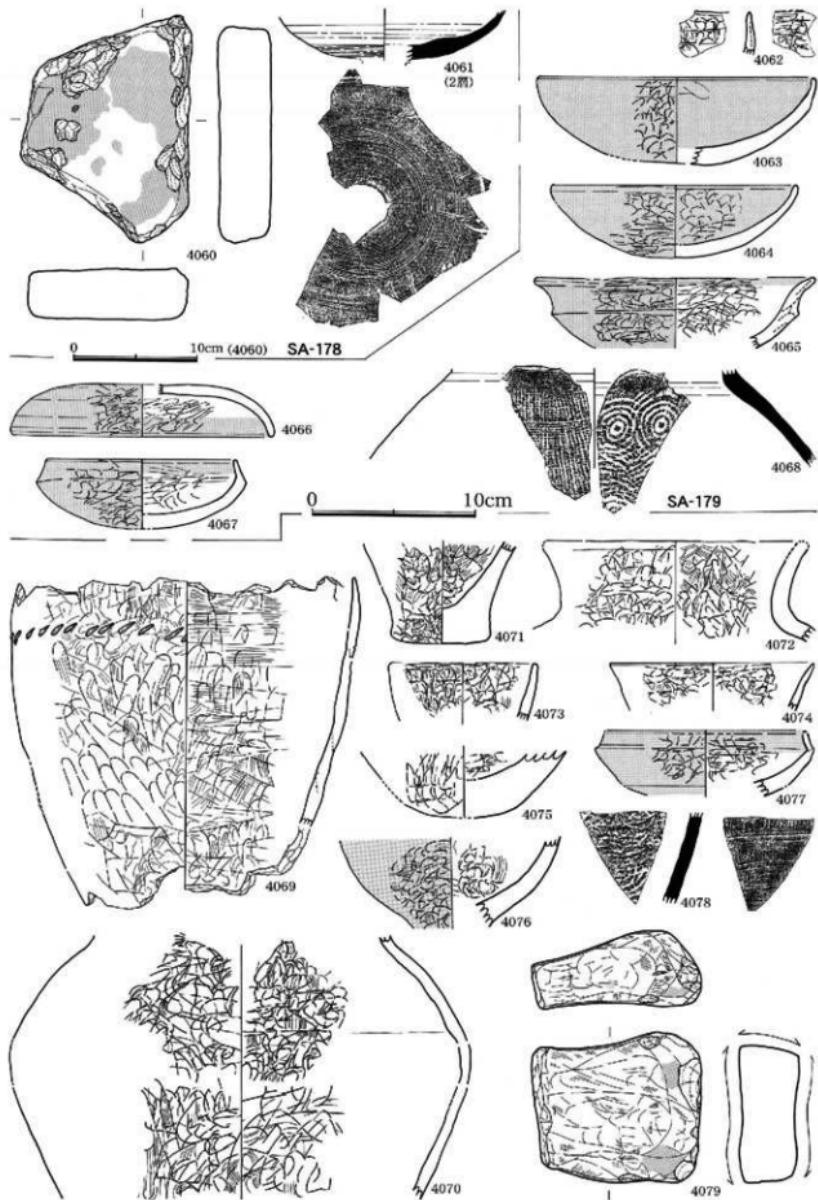
第389図 SA-175 出土遺物実測図(3), SA-176 出土遺物実測図



第390図 S A-177 出土遺物実測図(1)



第391図 SA-177 出土遺物実測図(2), SA-178 出土遺物実測図(1)



第392図 SA-178 出土遺物実測図(2), SA-179・180 出土遺物実測図

覆土から、土師器片314点のほか、須恵器片13点、鉄鋸・石製紡錘車各1点等が、2層から土師器片18点と須恵器片4点が出土している。6世紀後半～7世紀前半である。

#### S A-171 (第377図)

III区の西南部で検出した、208号溝と後世の削平により西南部が消失している。

長さ3.7～4.06m・幅3.7～3.9mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は12～17cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径35～40cm・深さ48cmの1本柱で、長径68cm・短径52cm・深さ10cmの掘り込みが東に接する。

覆土から、土師器片89点のほか、須恵器片7点等が出土している。6世紀後半である。

#### S A-172 (第378図)

III区の北東部で検出した、208号溝と道路跡に切られた、東西3.7～3.99m・南北3.8～3.94mの隅円方形を呈する住居である。覆土は2～17cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は不明であるが、中央やや南東寄りに、小型窯(3919)を使用した土器埋設炉がある。その30cm北西には、直径

28cm・深さ37cmの小pitがあり、位置的にはロクロpit等の主柱穴以外の機能が推定される。

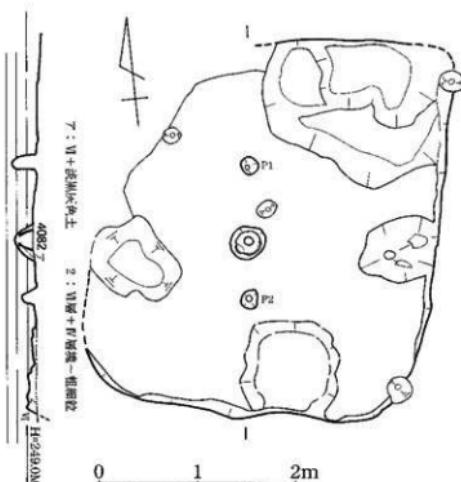
覆土から、土師器片136点と須恵器片3点が、2層から土師器片1点が出土している。丹塗り土器器の鉢(3927)の輪郭は、多角形なのか歪つかのかは不明である。6世紀後半である。

#### S A-173

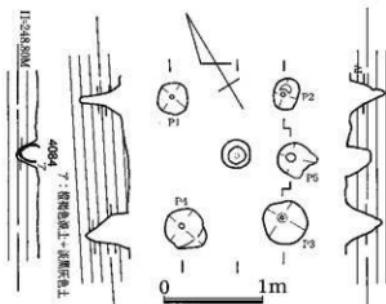
欠番である。

#### S A-174 (第379図)

175号住居を切る、長さ3.02～3.28m・幅2.7～2.82mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は8～12cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径16～18cm・深さ20～26cm



第393図 S A-181 遺構実測図



第394図 S A-183 遺構実測図

の2本柱（P 1・2）で、中央には直径33cm・深さ6cmの掘り込み炉（ア・イ層）がある。

覆土から、土師器片199点のほか、須恵器片5点、台石1点が出土している。6世紀後半である。

#### S A-175 (第381図)

東西4.5~4.83m・南北4.28~4.38mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は5~20cm遺存し、

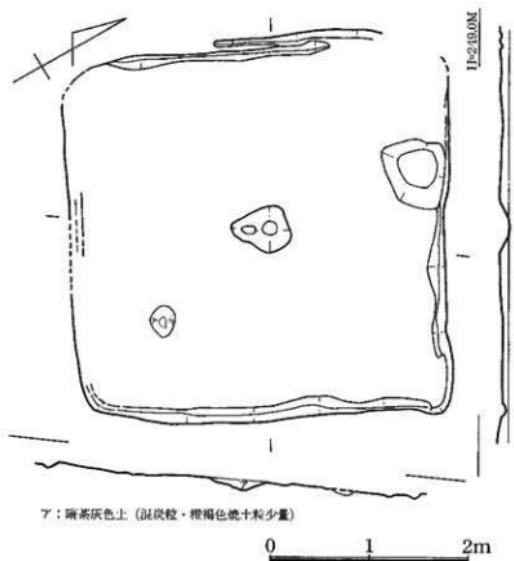
土層的には30~35cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径20~27cm・深さ44~47cmの2本柱（P 1・2）で、中央に長径20cm・短径17cm・深さ12cmの掘り込み炉がある。北側中央には、長径1m・深さ20cmの土坑が伴う。

覆土から、土師器片397点と須恵器片14点が、2層から土師器片37点と須恵器片1点が出土している。6世紀後半である。

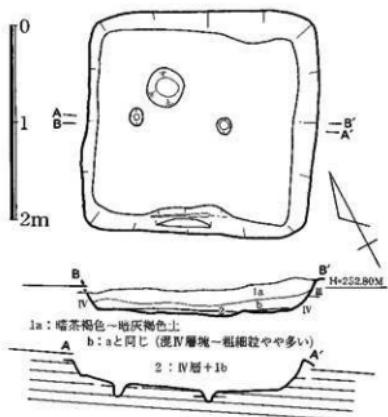
#### S A-176 (第382図)

175号住居と1.5m隔てた東側に位置する、長さ4.1~4.55m・幅3.9~4.04mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は

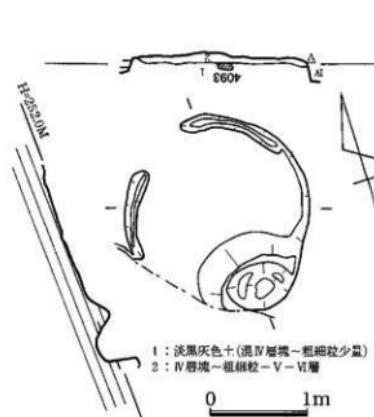
第395図 S A-184 遺構実測図

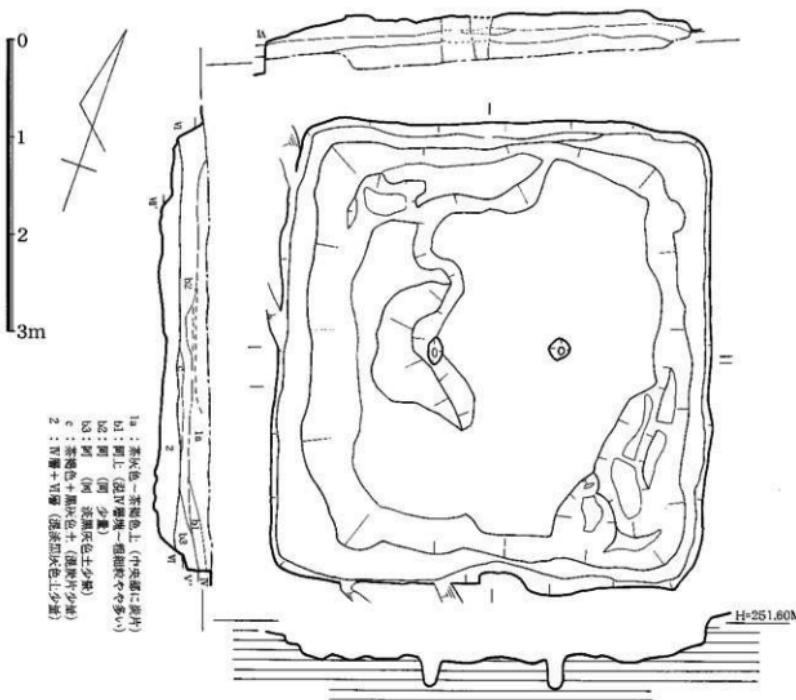


第396図 S A-185 遺構実測図



第397図 S A-186 遺構実測図





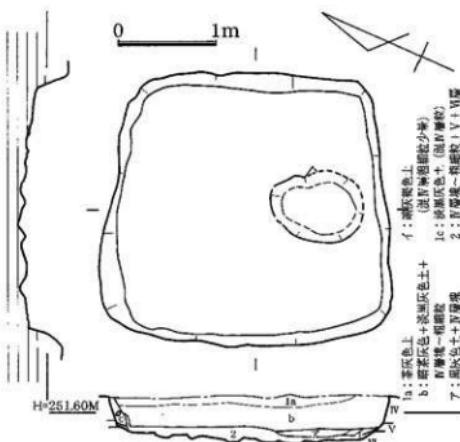
第398図 SA-187 遺構実測図

7~12cm遺存し、土層的には20~30cmの削失が推定される。主柱穴は、直径17~24cm・深さ44~58cmの4本（P 1~4）である。P 6は2層に埋まるが、P 5の機能は不明である。

覆土から、土師器片553点のほか、須恵器片10点、用途不明鉄器（4004）、刀子（4005）等が、2層から土師器片36点が出土している。6世紀後半である。

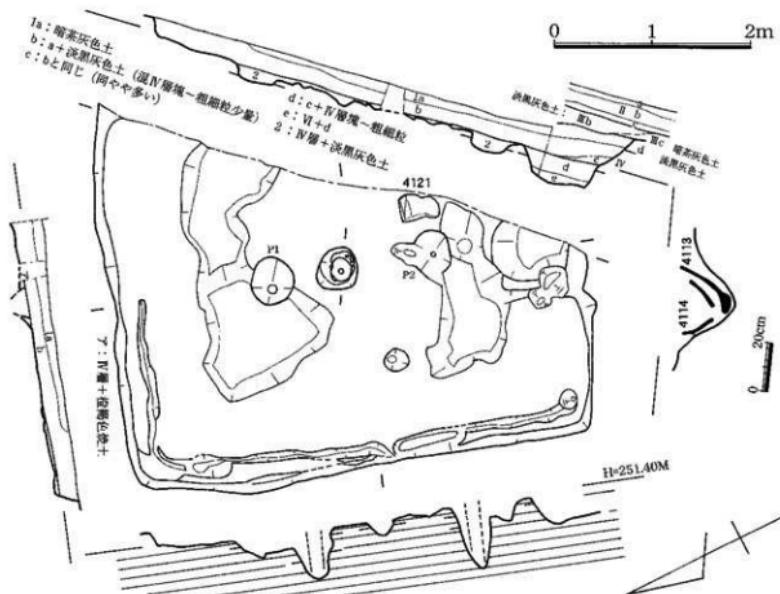
#### SA-177 (第383図)

178・179号住居を切り、169号溝に切られる、東西3.8~4.17m・南北3.4~3.6mの隅円長方形を呈する住居であ

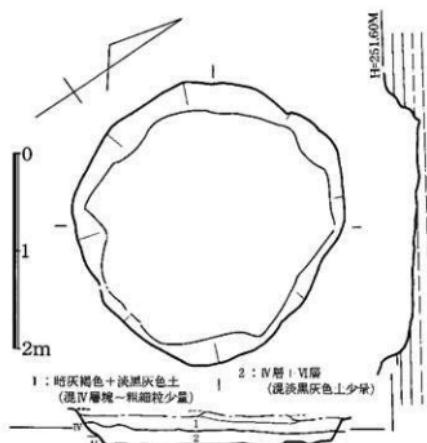


第399図 SA-188 遺構実測図

る。覆土は40~50cm遺存し、土層的には15cm程の削失が想定される。主柱穴は、深さ24~32cmの2本柱（P1・2）で、それぞれ重複しており、内側（柱間1.46m）から外側（柱間1.77m）へ拡幅



第400図 S A-189 遺構実測図



第401図 S A-190 遺構実測図

したと推定される。P3・4は、ロクロpitとしては浅い（深さ15・20cm）ので、中心の柱穴としての機能を考えたい。P1との間に、口縁部—胸部上半を打ち欠いた壺（4011）を使用した土器埋設炉（A）と、古段階の掘り込み炉（B）がある。炉Bは深さ10cmで、炭と焼土のはか壺の底部（4012）が削れた状態で埋まっていた。

覆土から、土師器片640点のほか、須恵器片29点等が、2層から土師器片23点と須恵器片1点が出土している。須恵器の蓋（4031）は、175号住居出土片と接合している。6世紀末～7世紀初頭である。

### S A-178 (第384図)

177号住居に切られ179号住居を切る。検出時は、不明瞭ながらA・Bに分かれるような認識があり、断面観察で確実となった。

Aは、拡幅段階の住居で、長さ4.2~4.3m・幅3.3~3.4m程の隅円長方形を呈する住居である。覆土は5~12cm遺存し、土層的には25cm程の削失が推定される。中央北東寄りには口縁部一胴部上半を打ち欠いた壺(4048)を使用した土器埋設炉がある。

Bは、長さ3.5~4.17m・幅3.7m程の、短辺が胴張る隅円長方形を呈する。主柱穴や炉・貼り床は不明瞭である。

覆土から、土師器片54点のほか、須恵器片4点、すり石1点、鉄床石2点等が、2層から土師器片1点が出土している。4059の鉄床石には、鍛造剥片が付着しており、小鍛冶を想定させる。6世紀後半である。

### S A-179 (第385図)

177・178号住居に切られ、半分程度を残す。長さ3.2m以上・幅3.1mの長方形を呈する住居である。覆土は9~18cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。主柱穴や炉は確認されない。

覆土から、土師器片54点のほか、須恵器片1点が、2層から土師器片1点が出土している。6世紀後半である。

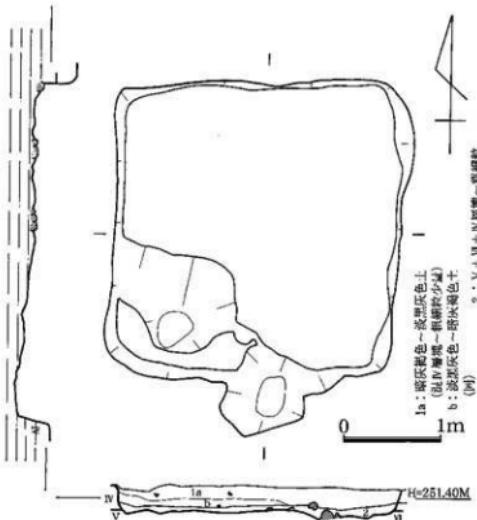
### S A-180 (第386図)

南北2.74~2.84m・東西2.7~2.96mの、北辺が短い隅円方形を呈する住居である。覆土は9~16cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。南辺には壁溝が巡らない。主柱穴は無く、中央やや南寄りに、口縁部と胴部下半~底部を打ち欠いた壺(4069)を使用した土器埋設炉がある。東辺中央付近の土坑状掘り込みは、貼り床が施されて機能していない。

覆土から、土師器片156点のほか、須恵器片2点、砥石1点が出土しているが、図化できたのは少ない。6世紀後半である。

### S A-181 (第393図)

175号住居の北4mに位置し、天地返しによる削失で、痕跡程度を残し、北東部は消失している。東西3.3~3.4m・南北3.94mの隅円方形を呈する住居である。覆土は遺存せず、土層的には40cm程



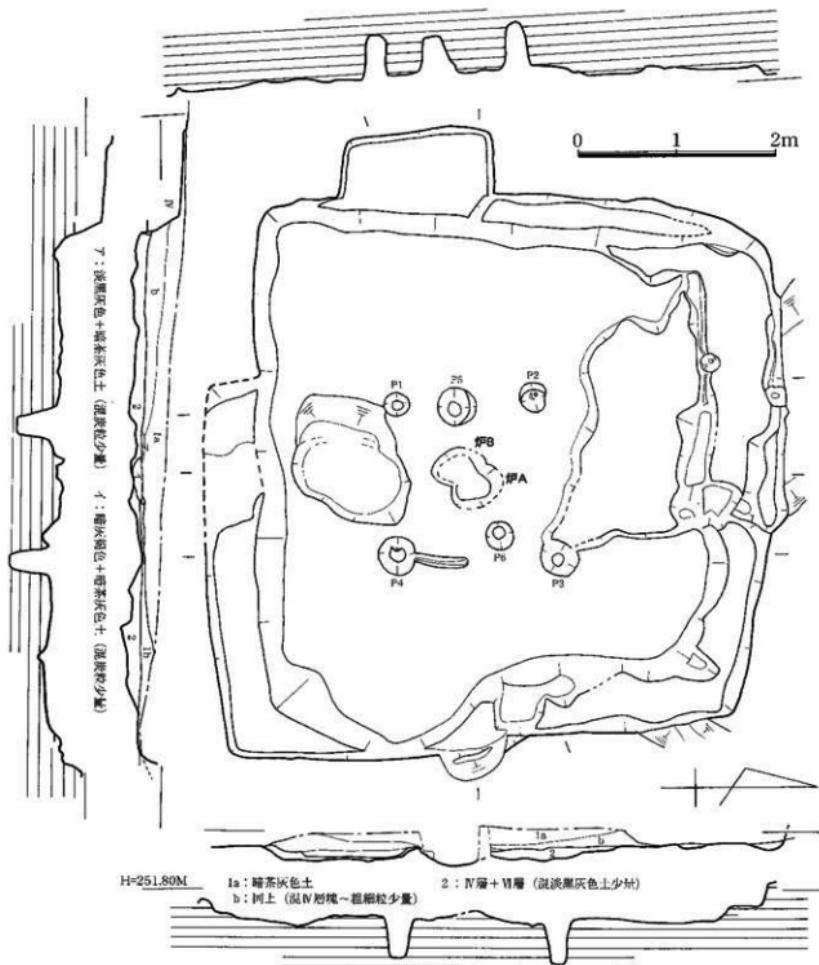
第402図 S A-191 遺構実測図

の削失が推定される。主柱穴は、直径16~19cm・深さ14~23cmの2本柱（P1・2）で、中央やや南寄りに、口縁部と底部を打ち欠いた甕（4082）を使用した土器埋設炉がある。北東隅と東辺中央、南辺中央の土坑状掘り込みは、貼り床が施されて機能していない。

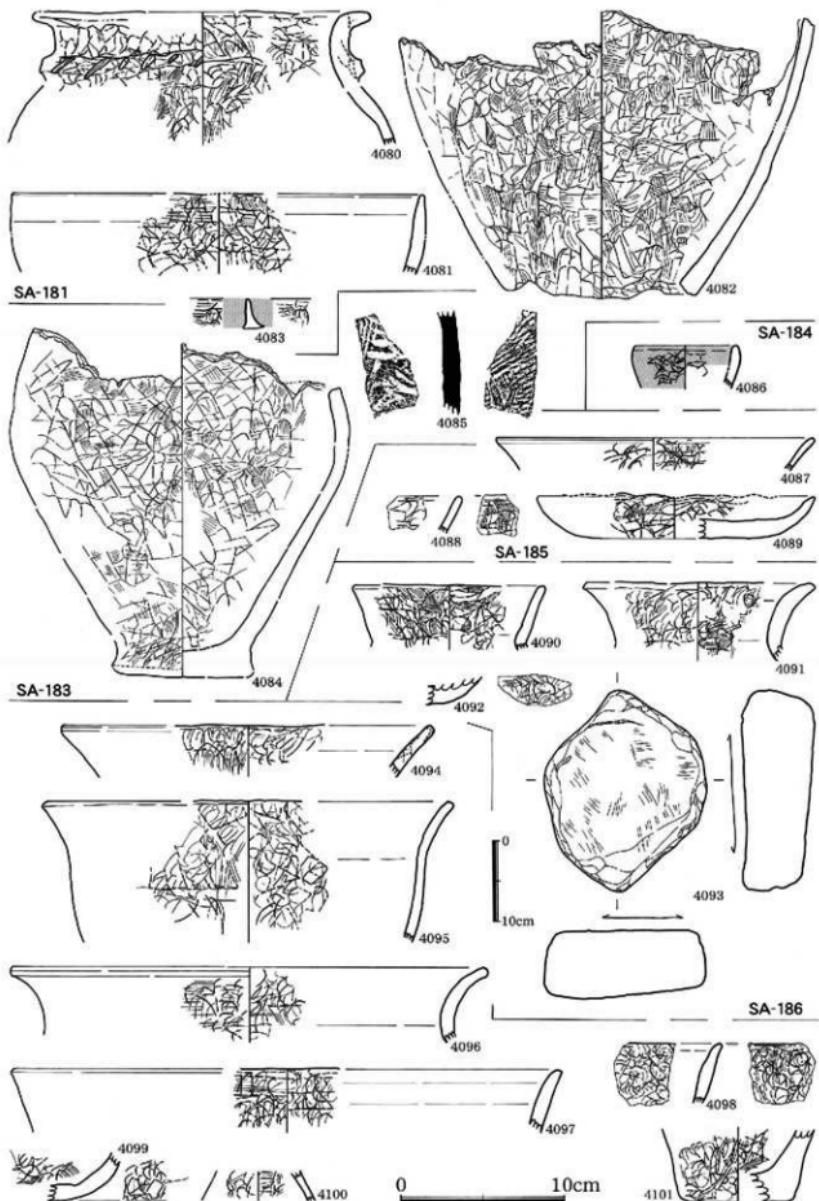
2層から19点の土師器片が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀前半か。

### S A-182

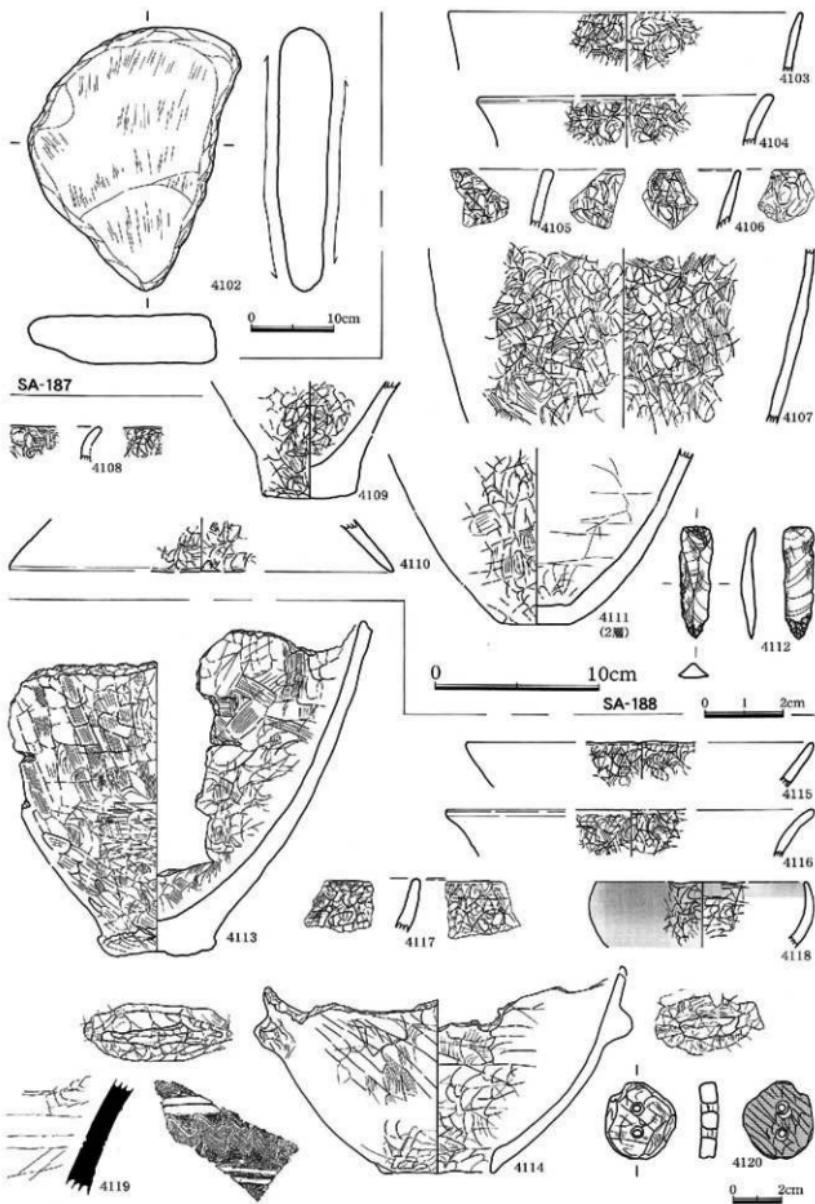
航空測量図の照合により、53号住居と同一であると判断し、182号は欠番になった。



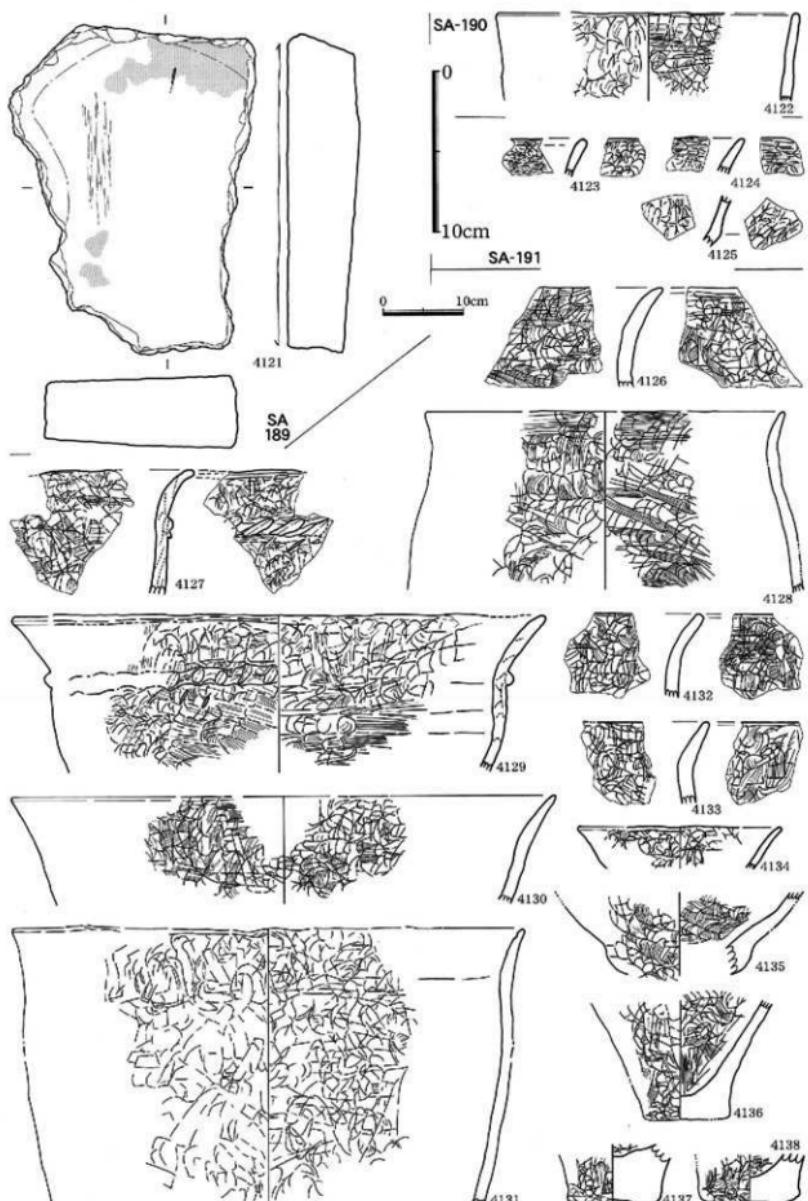
第403図 S A-192 遺構実測図



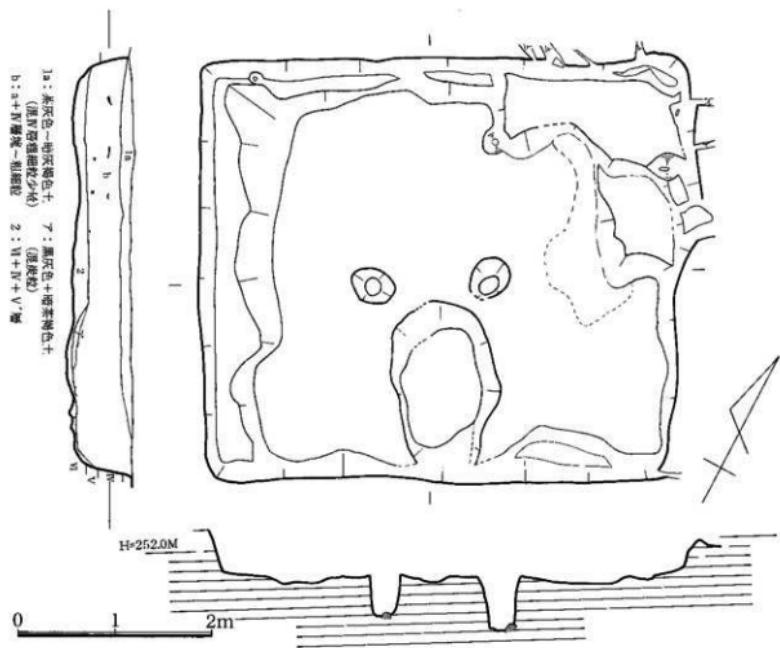
第404図 SA-181・183～187 出土遺物実測図(1)



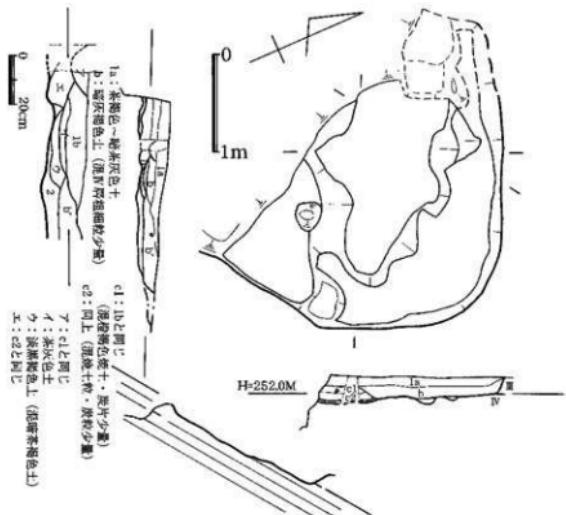
第405図 SA-187 出土遺物実測図(2), SA-188-189 出土遺物実測図(1)



第406図 SA-189 出土遺物実測図(2), SA-190~192 出土遺物実測図(1)



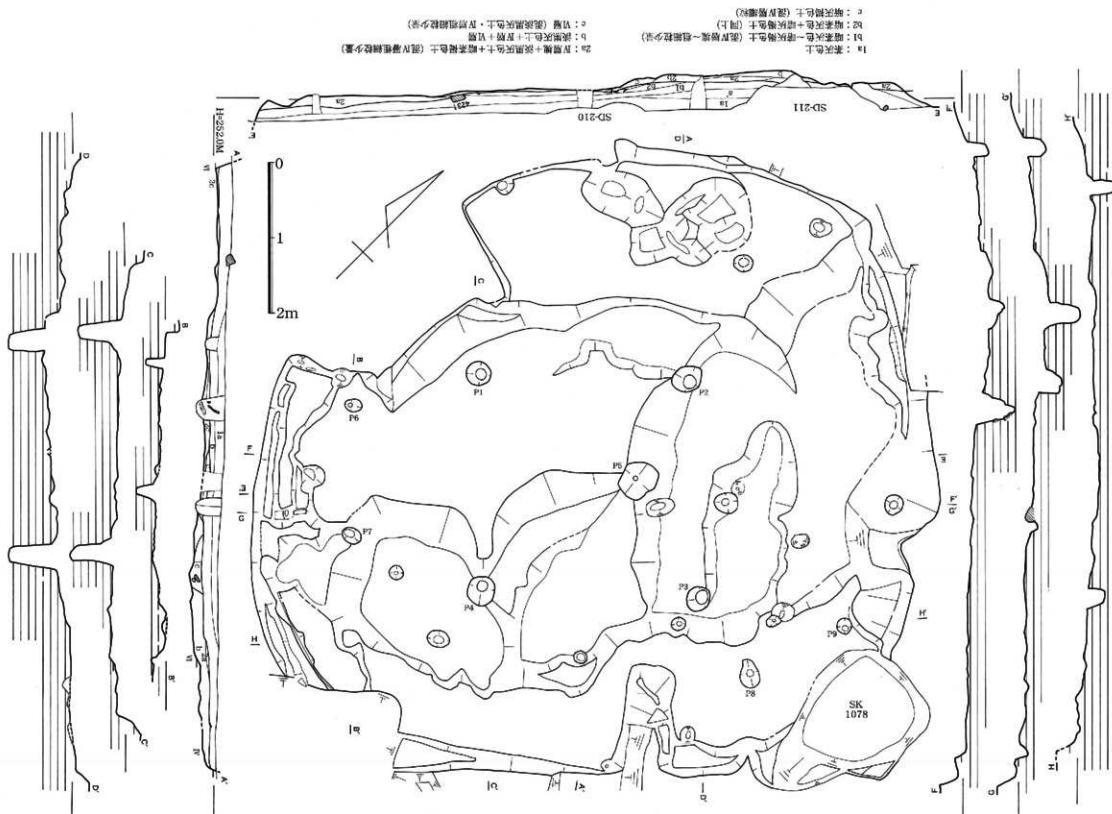
第407図 S A-193 遺構実測図



第408図 S A-194 遺構実測図

### S A-183 (第394図)

原区の西南端で検出した、4本柱と土器埋設炉である。土層的には、15~20cmの削失が推定される。主柱穴は、直径24~45cm・深さ35~44cmを測る4本(P1~4)で、直径10~13cmの柱痕跡が明瞭である。中央やや北西寄りには、口縁部~肩部を打ち欠いた甕(4084)を使用した土器埋設炉がある。P2と3



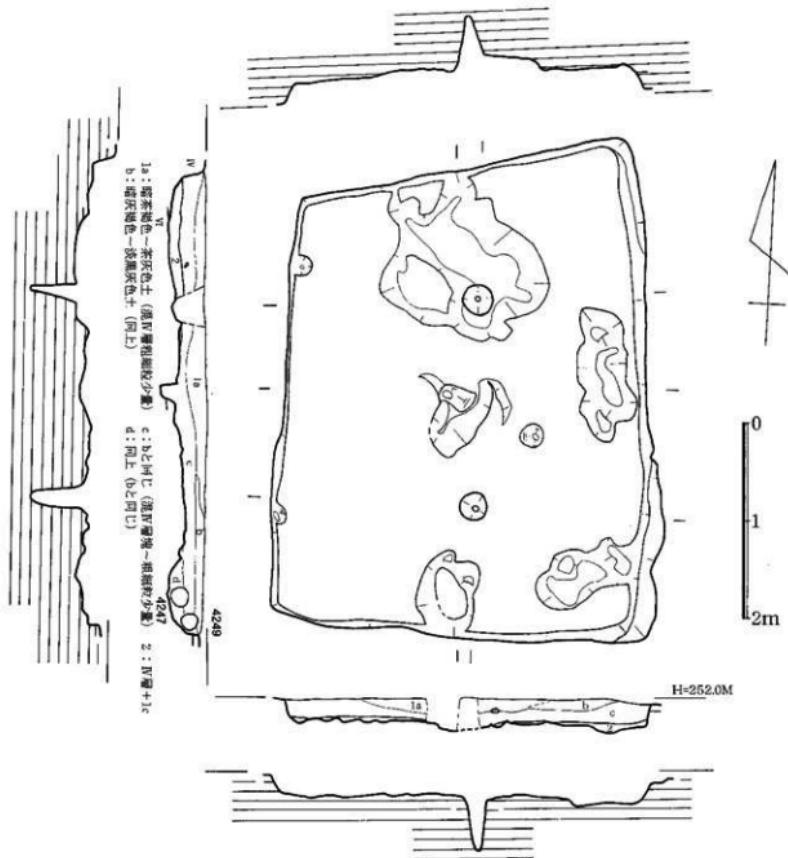
第409図 SA-195 遺構実測図

の中間には、直径33cm・深さ25cmのpit（P 5）があるが、柱痕跡は無く、焼土や炭も含まない。当住居に属するpitだと思われるが、機能は不明である。

柱穴内から土師器片4点と須恵器片1点が出土しているが、須恵器片のみ図化できた。6世紀後半である。

#### S A-184 (第395図)

157号住居の西4.3mに位置し、壁溝の痕跡と掘り込み炉の存在から住居と断定できた遺構である。長さ3.94m・幅3.8~3.87mの隅円方形を呈し、主層的には20~25cm程の削尖が推定される。主柱穴は無いが、中央に、長径60cm・短径49cm・深さ10cmの掘り込み炉がある。北東部には、長径70cm・深さ53cmの土坑が伴う。



第410図 S A-196 遺構実測図

土坑等から、土師器片16点が出土しているが、図化できたのは1点のみである。5世紀代か。

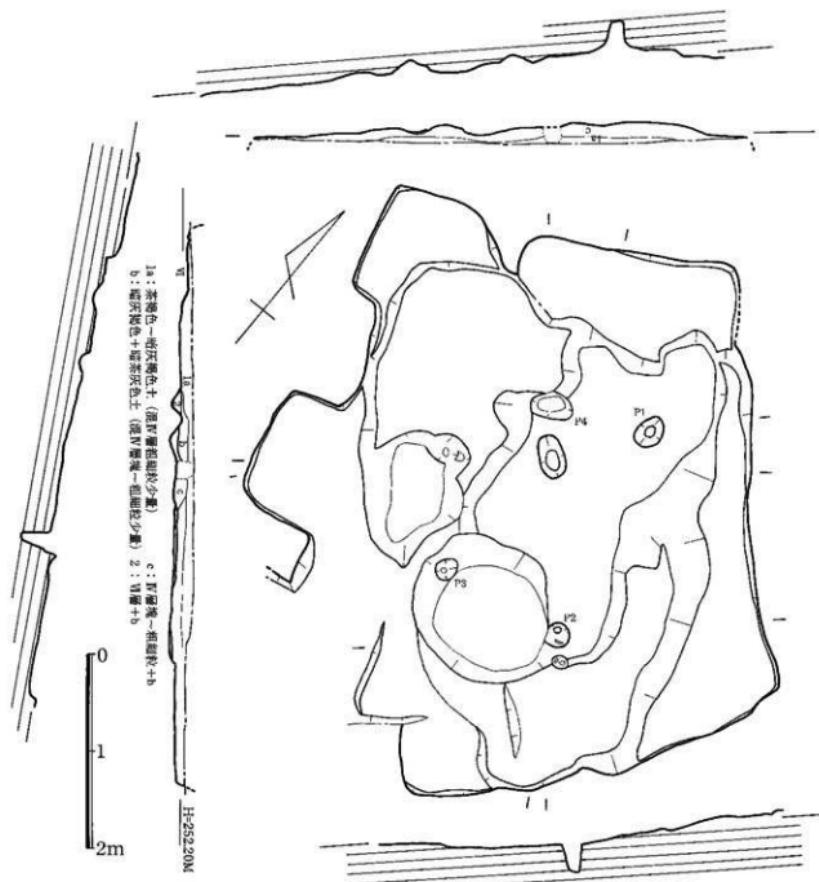
#### S A-185 (第396図)

IV区の南西部に位置し、古代の掘立柱建物に切られた住居である。東西2.28~2.32m・南北2.23~2.34mの隅円方形を呈する住居である。覆土は16~26cmで、西側が12cm程の削尖を受けている。主柱穴は、直径13~19cm・深さ10~13cmの2本である。炉跡と壁溝は無い。

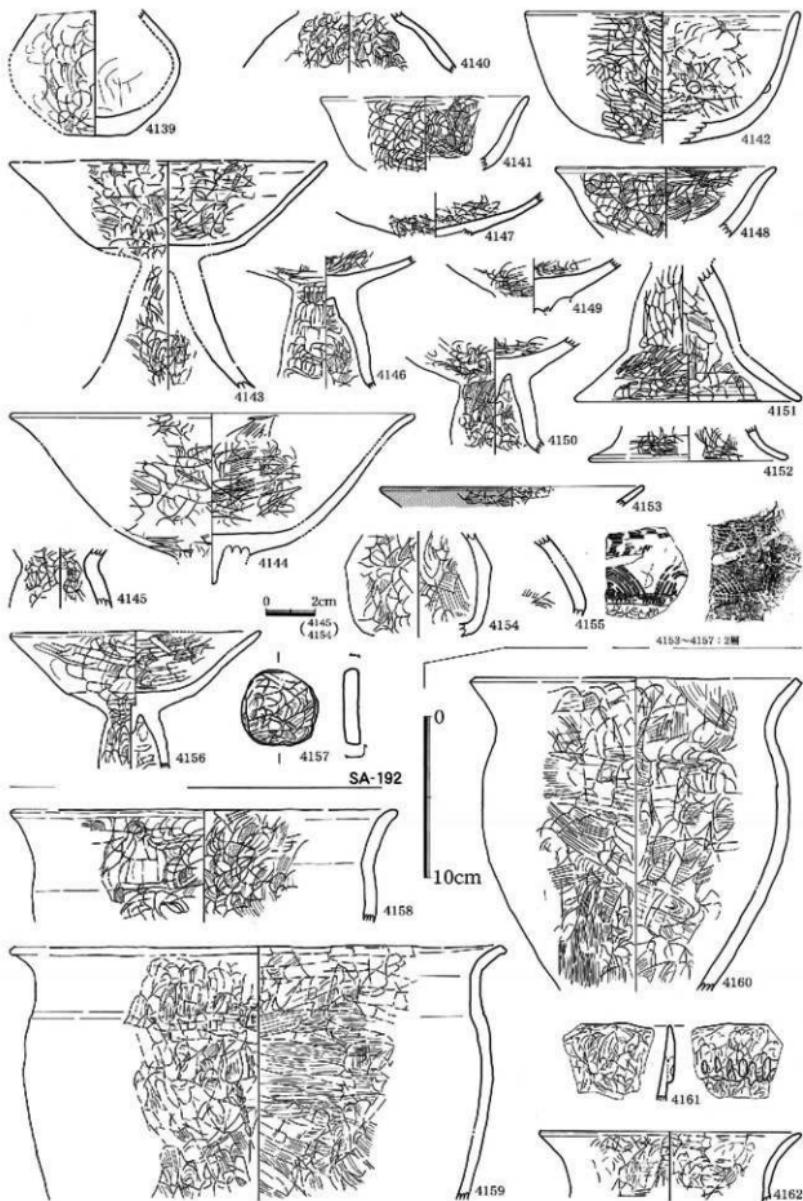
覆土から、土師器片28点が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀前半か。

#### S A-186 (第397図)

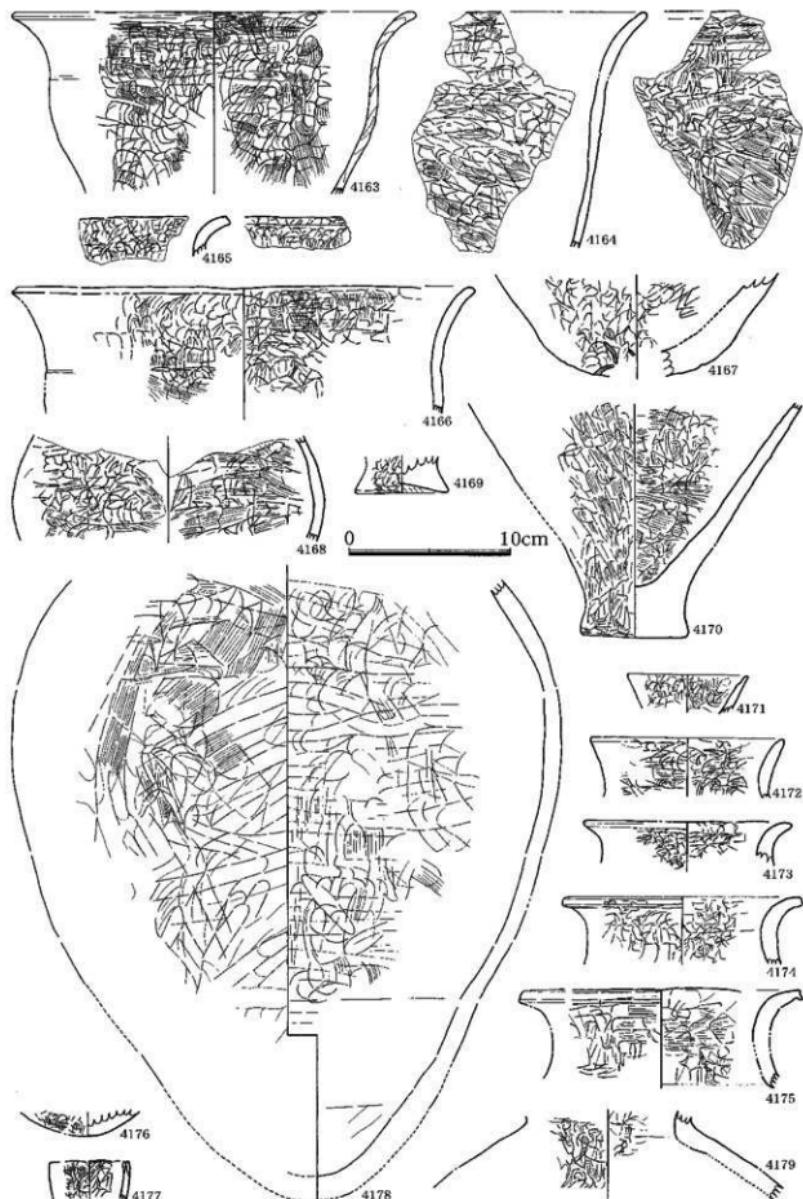
V区の南縁中央に位置し、天地返しによって大きく削失している。長径2.1m・短径1.93mの構



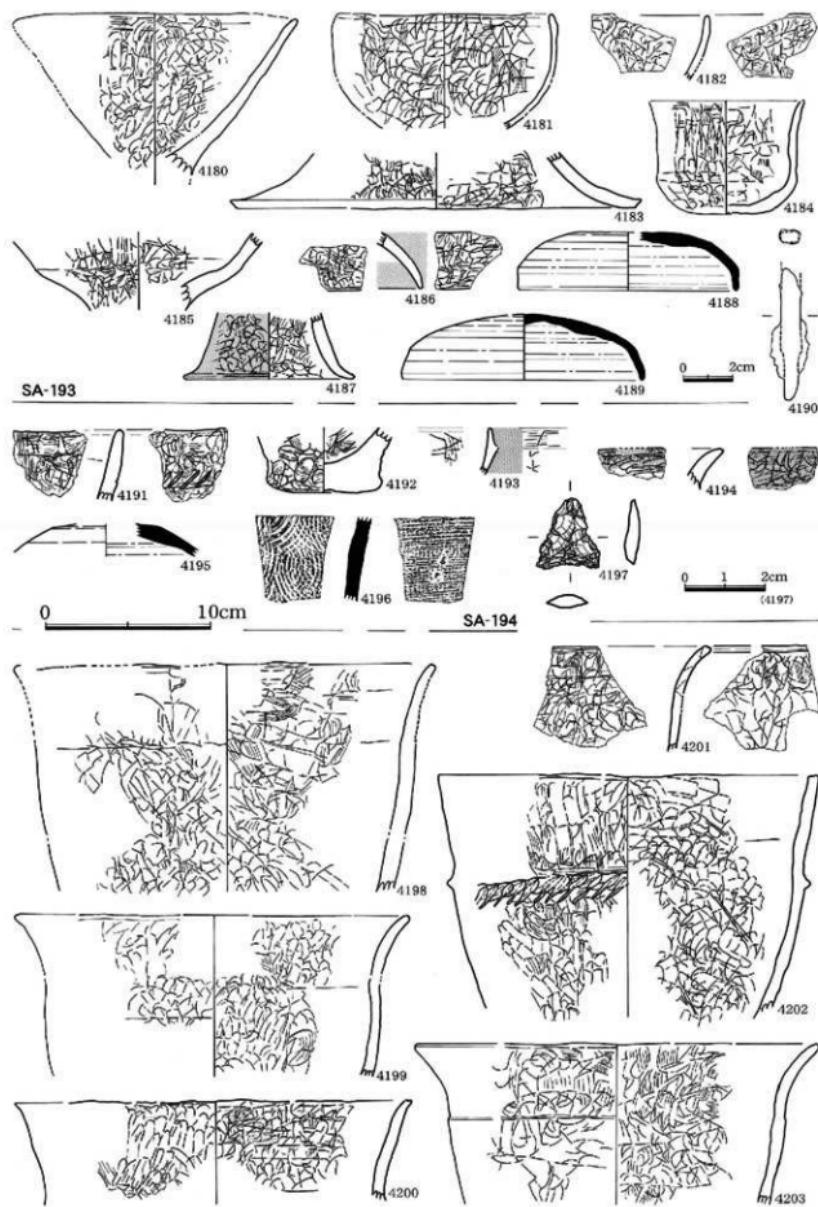
第411図 S A-197 遺構実測図



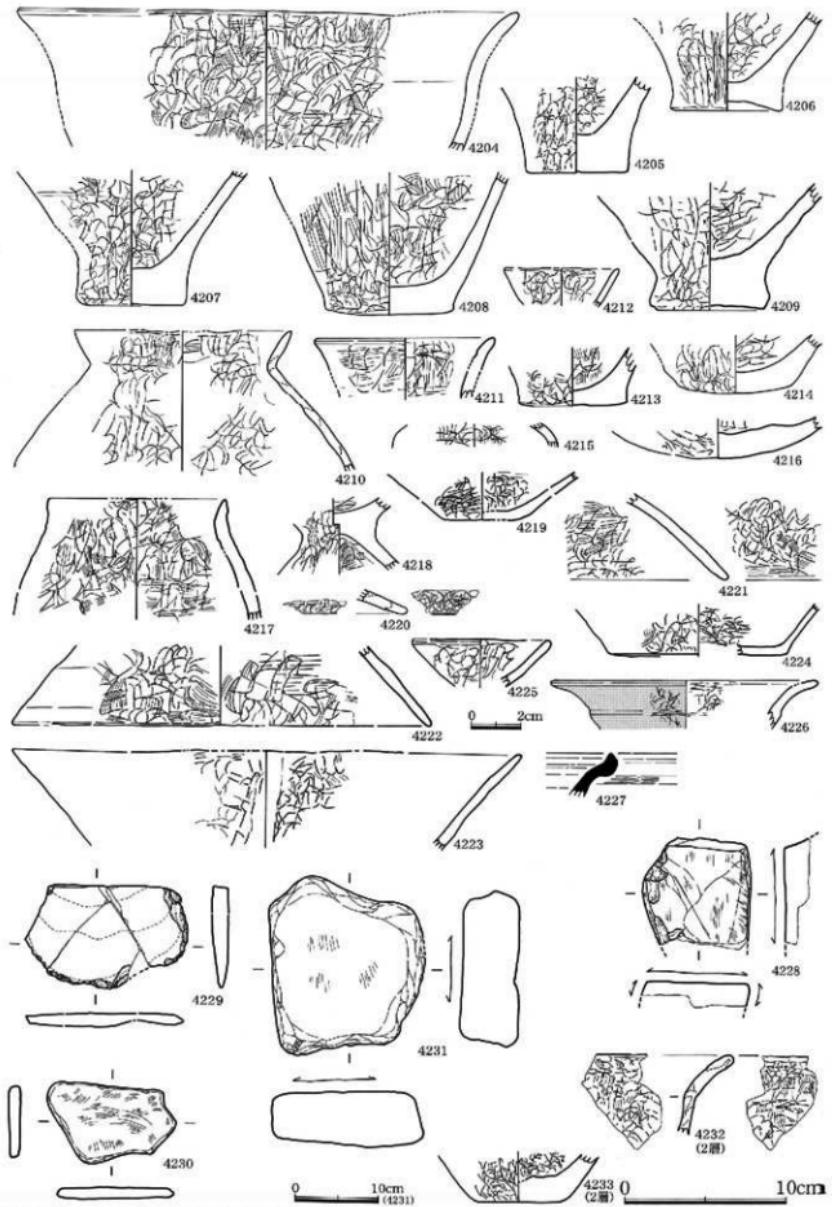
第412図 SA-192 出土遺物実測図(2), SA-193 出土遺物実測図(1)



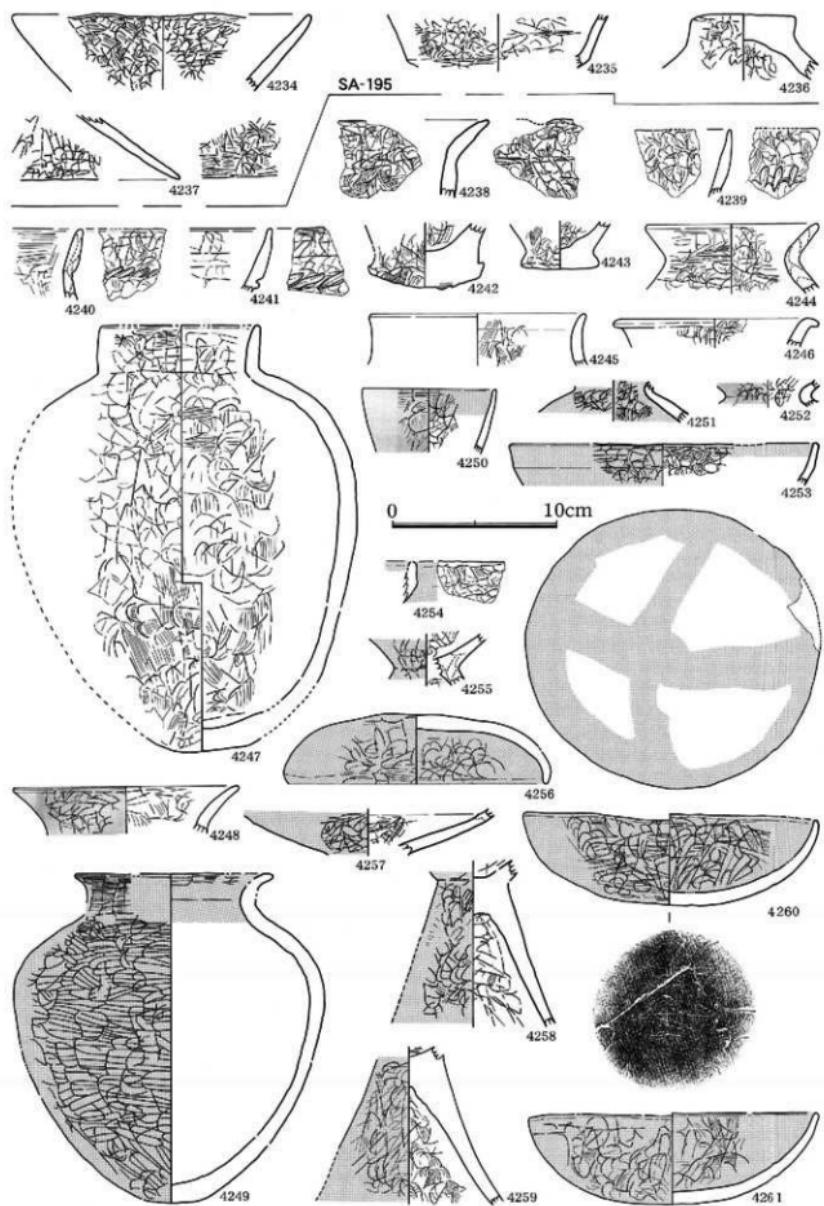
第413図 S A-193 出土遺物実測図(2)



第414図 SA-193 出土遺物実測図(3), SA-194・195 出土遺物実測図(1)

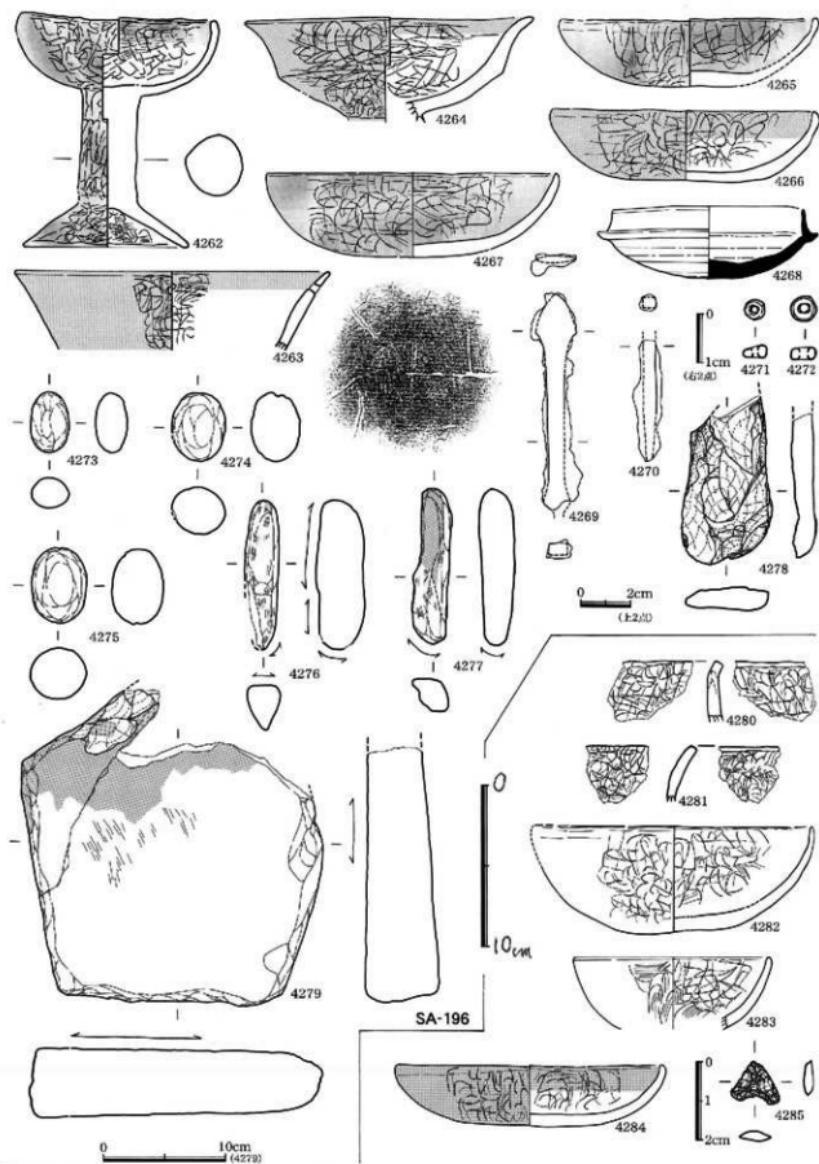


第415図 SA-195 出土遺物実測図(2)



第416図 SA-195 出土遺物実測図(3), SA-196 出土遺物実測図(1)

円形掘り込みの南側に、長径76cm・短径47cm・深さ35cmの土坑が付く。覆土は8~15cm遺存し、土層的には10~30cmの削失が推定される。貼り床は5~9cmの厚さで施されている。主柱穴は無く、



第417図 S A-196 出土遺物実測図(2), S A-197 出土遺物実測図(1)

南側の土坑状掘り込みが炉であった可能性がある。底面中央には台石（4093）が置かれていた。

覆土から、弥生時代後期～古墳時代の土器片16点が出土しているが、図化できたのは僅かである。

#### S A-187 (第398図)

III区の東南端に位置し、201号溝と天地返し・搅乱を受けた住居である。長さ4.66～4.85m・幅4.2～4.43mの隅円長方形を呈する。覆土は25～30cm遺存し、土層的には、20～30cmの削失が推定される。主柱穴は、直径20～25cm・深さ28・37cmの2本である。明瞭な掘り込み炉は無いが、南北断面において、中央やや南寄りに、長径94cmの炭片混土層（1c層）を確認している。底面は僅かに凹む程度で、地床炉と言るべきか。貼り床は厚く、9～25cm施される。

覆土から、土師器片475点、須恵器片1点（混入か）などが、2層から土師器片30点と須恵器片1点が出土しているが、図化できたのは少ない。

4世紀代か。

#### S A-188 (第399図)

187号住居の4.5m北

に位置した、長さ2.5～

3.0m・幅2.6～2.79m

の、北東辺が短く南西

辺が胴張る、隅円方形

を呈する住居である。

覆土は29～37cm遺存し、土層的には10cmの削失が推定される。主柱穴は無いが、中央南寄りに、長径98cm・短径74cm・深さ6～8cmの土坑が伴う。焼土や炭は確認できなかったが、掘り込み炉の可能性を想定している。壁溝は無いが、1c層は、壁材の裏込めと思われる。

覆土から、弥生時代終末～古墳時代前期の土器片84点と2次加工のある剥片1点が、2層から土器片4点が出土しているが、図化できたものは少ない。

#### S A-189 (第400図)

188号住居の東2.5mに位置し、南～南西部は調査区外にある。東西は4.0m強と推定され、南北4.7～4.80mの長方形を呈する住居である。覆土は17～23cm遺存し、東側は13cm程削失する。主柱穴は、直径42～50cm・深さ50・66cmの2本（P1・2）で、P1の柱痕跡は14×20cmの楕円形であった。

中央やや北寄りには、

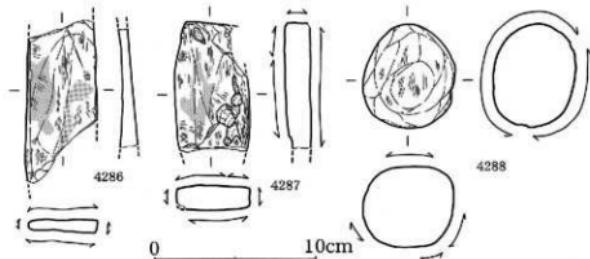
重複する土器埋設炉が

ある。上（2次炉）で

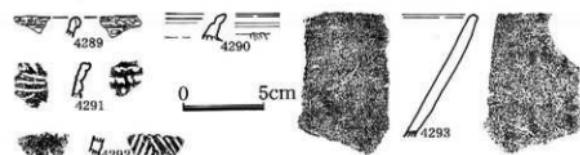
は口縁部を打ち欠いた

瓶（4114）を使用し、

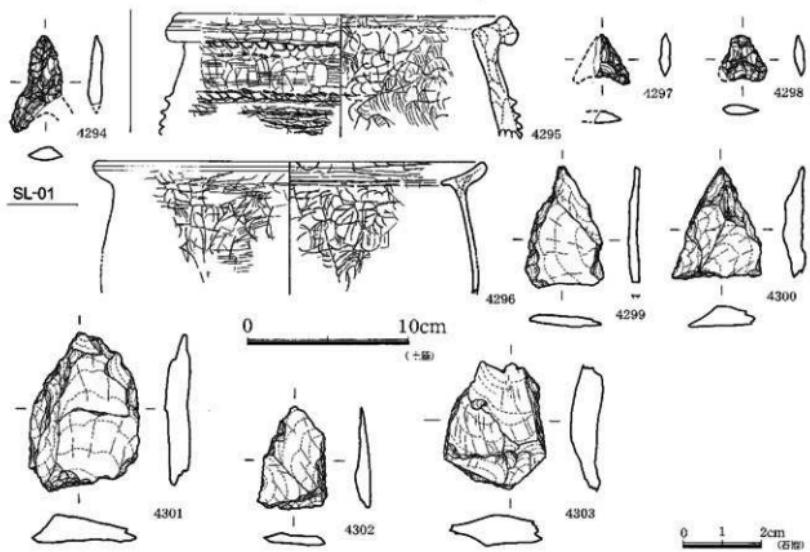
初期炉は口縁部～肩部



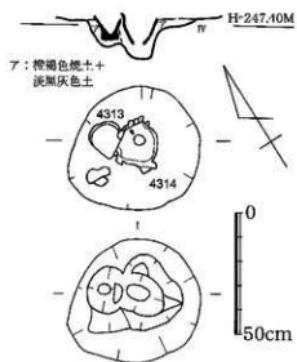
第418図 SA-197 出土遺物実測図(2)



第419図 III区出土 梗文土器 実測図



第420図 S L-01-02 出土遺物実測図



第421図 S K-172 遺構実測図

かたが、厚さ8~20cmの貼り床の上部が水平に近くやや継まっていることから、住居とした。

覆土から、弥生時代後期~古墳時代前期の土器片10点が、2層から1点が出土しているが、図化できたのは1点のみである。

#### S A-191 (第402図)

図の東端に位置した、南北3.0~3.04m・東西2.9~3.04mの隅円方形を呈し、南辺中央には幅80cm・奥行き45cmの突出部があり、出入口と推定される。覆土は16~23cm遺存し、土層的には10~

を打ち欠いた堀(4113)を使用しているが、2次炉構築の際に半分以上を消失している。南辺中央部の土坑は、機能不明である。西~北西部に残る壁溝は拡張前(初期)のものと推定される。

覆土から、土師器片331点のほか須恵器片2点、土器片加工双孔円盤1点等が、2層から土師器片13点が出土しているが、図化できたものは少ない。6世紀後半である。

#### S A-190 (第401図)

188号住居の北6mに位置した長径2.9m・短径2.58mの不整円形を呈する住居である。覆土は7~15cm遺存し、土層的には10~15cmの削失が推定される。主柱穴と炉は確認できな

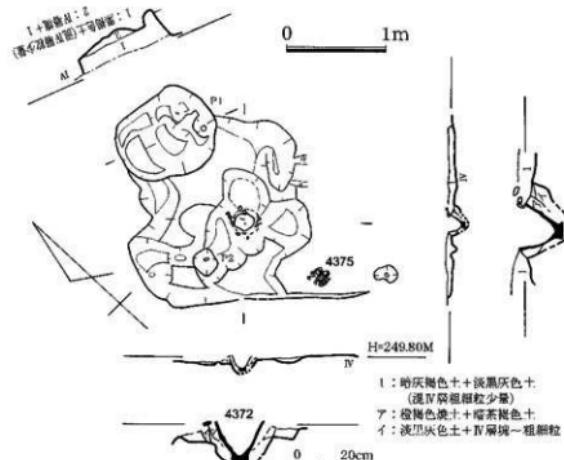
20cmの削失が推定される。主柱穴や炉・焼溝は確認できていない。

覆土から、土師器片39点が、2層から2点が出土しているが、図化できたのは僅か3点である。5世紀後半～6世紀前半か。

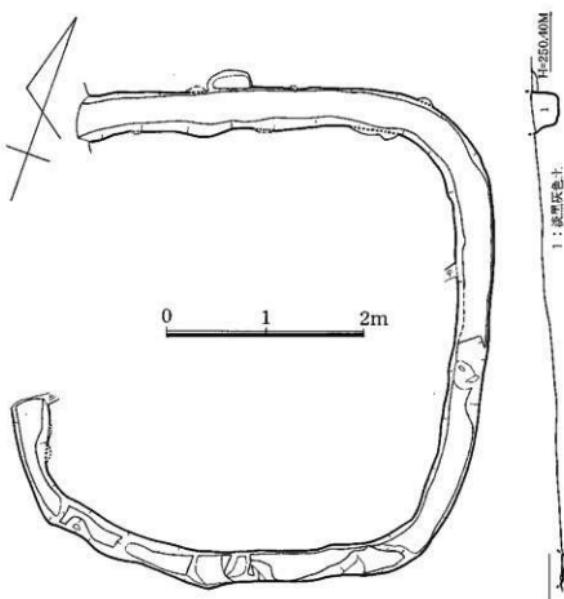
#### S A -192 (第403図)

190号住居の1.5m北東に位置し、北東部を210・211号溝に切られ、南辺中央部を天地返しによって削失した住居である。東西5.4～5.77m・南北5.1～5.85mの隅円方形を基調とし、南西隅は幅50cm・長さ1.9mの掘り残し、西辺中央南寄りには、幅1.54m・奥行き60～90cm・深さ4～6cmの、若干スロープ状になる出入口と推定される突出部が付く。東中央には、内側に突出して間仕切る名残がある。覆土は14～35cm遺存し、南側は40cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径24～42cm・深さ44～49cmの4本(P1～4)で、長径56cm・深さ5cmの掘り込み炉(A)を伴う。

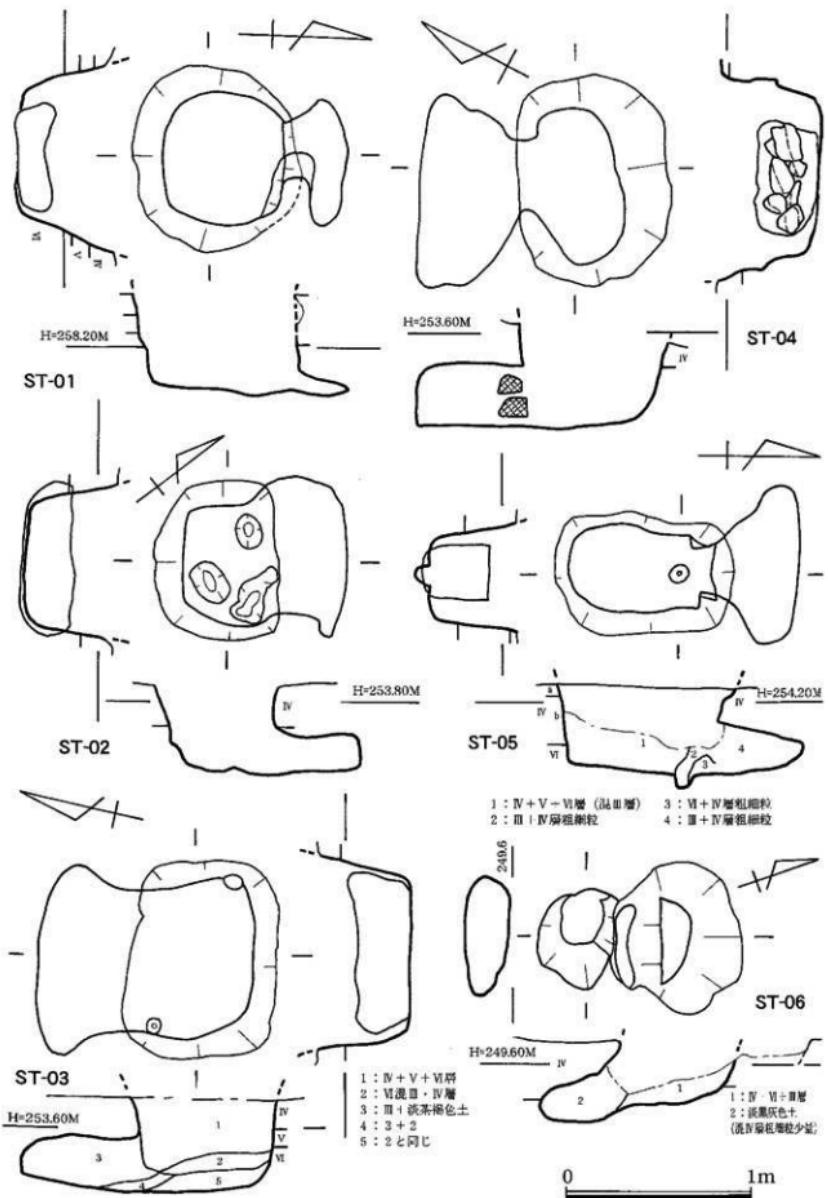
拡張前は、直径28・40cm・深さ40cmの2本柱(P5・6)で、中央や西寄りに、長径50cm・



第422図 SK-846・851 遺構実測図



第423図 SH-01 遺構実測図



第424図 01~06号地下式横穴墓 遺構実測図

深さ10cmの掘り込み炉（B、イ層）が伴うと推定される。住居の掘形は、北と東の側面の状況から4.5~4.6m四方であったと推定される。

覆土から、弥生土器片2点のほか、土師器片443点、土器片加工円盤1点が、2層から弥生土器片1点と土師器片65点が出土している。主体は4世紀後半~5世紀前半と推定される。

#### S A-193 (第404図)

194・195号住居を切る、長さ4.73~5.10m・幅4.32~4.38mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は44~49cm遺存し、南辺中央部はさらに15cm低いやりになっている。削失は西側が5cm程度である。主柱穴は、直径36~46cm・深さ42~56cmの2本で、南辺中央にかけて長径1.6m・短径1.06mの底面にも貼り床を施した大型炉がある。

覆土から、土師器片740点のほか須恵器片2点、鉄錫片1点(4190)などが、2層から土師器片17点が出土している。特に北東部には、焼成不良の壺・甕類が多重集積しており、焼成不良品が一括廃棄された状況である。6世紀後半である。

#### S A-194 (第408図)

193号住居に切られ、北西部には廃絶後の風倒木痕があり、南東部の検出時は直線的であったが最終的には西側へ大きく曲がる形状になった。東西3~3.2m・南北3m程の隅円方形を基調とする住居と推定される。覆土は15~18cmで、削平は無い。明確な掘り込み炉は平面では検出されなかつたが、断面観察ではアーエ層に焼土や炭片が混じることから、ウ→エ→イ→アと掘り込みが変遷し、1b・b'層上面が2次床面として使用されたことが推定される。

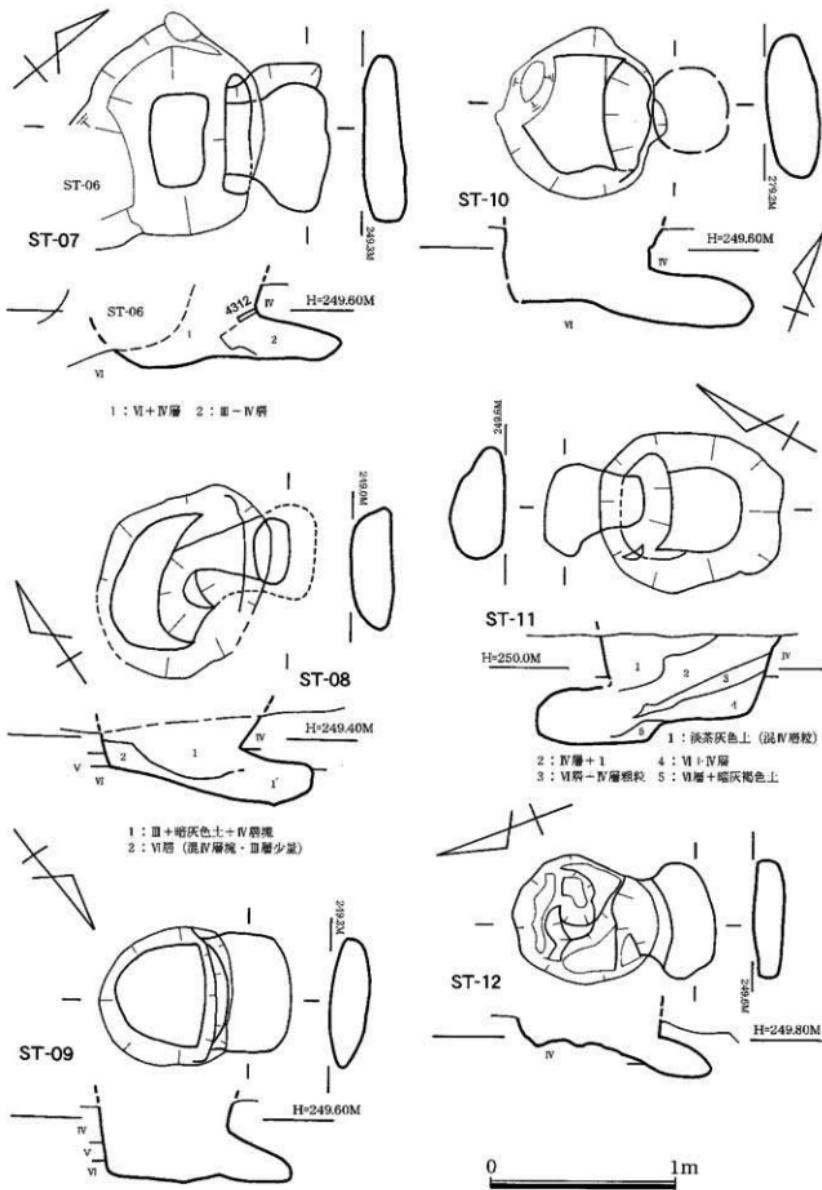
覆土から、土師器片222点のほか、須恵器片5点等が、2層から土師器片15点が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。

#### S A-195 (第409図)

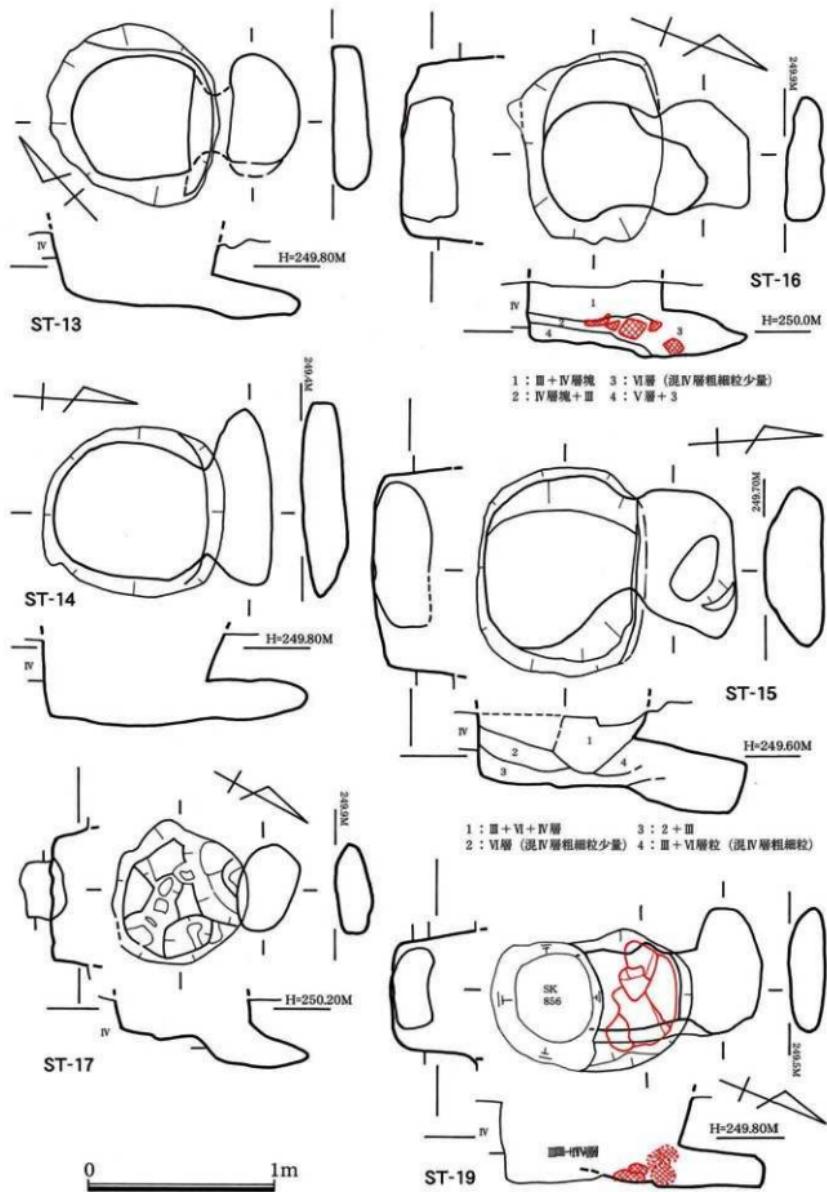
南端部を193号住居に、東端部を古墳時代の片側小口付設土坑(S K-1078)に切られ、北東部は県文化財課の試掘坑による削失と近現代の搅乱がある。西半分は円形基調、東半分は方形基調の間仕切り住居で、長さ9.1m・幅8.4mを測る。覆土は7~22cm遺存し、西側は20cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径29~42cm・深さ48~65cmの4本(P 1~4)である。中央北寄りには、長径56cm・短径45cm・深さ50cmのpitがあり、ロクロpit等が推定される。床面中央部は、短軸方向では6cmの緩やかな段差があるが、長軸方向では明瞭でない。炉跡は明瞭でないが、中央付近の搅乱(短軸断面図)内に炭片と焼土塊が混入しており、直下に炉が存在したと推定される。

西南部には、幅2.0~3.06m・奥行き1~1.4mの間仕切り(掘り残し)があり、出入口としての機能を想定したい。南端部の40cm内側には、拡張前の壁溝が遺存している。その他、P 6~9ほか12個程の小pitが散在し、P 6・7は初期の入口の支柱としての可能性があるほかは、屋根の支柱として機能したもののが含まれているのであろうが、推定の域を出ない。

覆土から、弥生時代後期~終末を主とする土器片810点のほか、須恵器片1点(4227、混入か)、砥石1点、台石2点、刃器1点等が、2層から土器片113点が出土している。



第425図 07~12号地下式横穴墓 遺構実測図



第426図 13~17·19号地下式横穴墓 遺構実測図

### S A-196 (第410図)

III区の北端に位置した、南北4.3~5.16m・東西3.4~3.98mの、西辺が短い長方形を呈する住居である。覆土は22~27cm遺存し、北側が5cm程度の削失を受けている。主柱穴は、直径26~32cm・深さ58cmの2本柱である。中央部には、長径88cm・短径46cm・深さ8~12cmの長楕円形掘り込みがあり、炉として機能したものと思われるが、焼土や炭化物は出土していない。南辺中央には、長径82cm・短径58cm・深さ13~16cmの土坑が伴う。

覆土から、土師器片632点のほか、須恵器片4点、鐵鎌片2点、ガラス小玉2点、投弾3点(4273~4275)、器面調整具2点(4276・4277)、被熱と彈けのある鉄床石(4279)等が、2層から土師器片8点が出土している。特に南辺中央土坑とその周辺には、完形品や大型破片が集中している。丹塗り土師器の鉢(4260)の内面には、十文字様の丹塗りが施されている。4267の底面にはヘラ記号があり、須恵器蓋を模倣したものである可能性が高い。6世紀後半である。

### S A-197 (第411図)

195号住居と5m隔てた北西部に位置し、近現代の削平によって40cm程度削失し、東~南西部は掘形が不明瞭である。北辺と西辺は凹凸を除けば直線的であり、本来は方形基調の間仕切り住居であったと思われる。現状では、東西3.6~5.2m・南北5.9mの大きさであるが、本来は、東西・南北5.9~6m程と推定する。主柱穴と言えるのは、直径23~35cm・深さ32~37cmの2本(P1・2)であるが、深さ10cm程のP3・4も含めて4本柱と考えないと、片寄った屋根になる。

中央南寄りの、東西2m・南北1.6m程の床面は4~14cm低く、内区として段差がある。P4の南東には、長径44cm・短径25cm・深さ8cmの掘り込みがあるが、焼土や炭片は無く、炉の可能性は低い。

覆土から、土師器片107点などが、2層から土師器片2点が出土しているが、図化できたのは僅かである。4世紀か。

### S K-712 (第421図)

XII区の東南部、710号土坑と48・49号住居の中間に位置した、新旧重複する土器埋設炉である。口縁部~胴部上半を打ち欠いた甌(4314)が2次炉で、口縁部~胴部上半を打ち欠いた甌(4313)が初期の炉に使用されている。

周囲には、2本柱もしくは4本柱になるようなpitや貼り床と推定される混じり土は検出されていないが、当遺跡内で屋外炉は全く存在しないことから、1辺3m程の方形住居があったものと推定される。

### S K-846 (第422図)

III区北東部の、97・112号住居の間に位置した、幅2m+S K-851の突出部・長さ2.7mほどの不整半円形として検出し、覆土を掘り下げるに、口縁部~肩部を打ち欠いた甌(4372)を使用した土器埋設炉を検出した。主柱穴は無く、硬化面も不明瞭であるが、不整形な平面を考えると、覆土とした1層は貼り床で、1辺3~4mの方形住居を想定するべきであろう。北側の土坑は、長径1.03

m・短径86cm・深さ25cmを測る。底面は水平に貼り床が施され、東端には深さ33cmの柱穴が付隨し、P 1・2の2本柱であった可能性もある。

#### S H-01 (第423図)

82号住居に、北西隅～南側を切られた、幅30～44cm・外径4.9～5.78m・内径4.26～5.06mの、周溝状遺構である。隅は円く、北辺は直線的、他は胴張りである。深さは、北側で28cm・南側で6cmを測り、削失は5cm程度であろうから、構築時から南側は浅い掘り込みであったと思われる。

覆土から、土師器片が出土しており、古墳時代後期の遺構と推定される。

地下式横穴墓を構築しなくなった6世紀後半～末の、低い墳丘を有する古墳とみたいが、根拠に欠ける。

#### S T-06 (第424図)

XII区の、55号住居の南4m、54号住居の北6mに位置し、07号地下式横穴墓の豎坑を切る。豎坑は、長径82cm・短径70cmの不整楕円形を呈し、深さは36cmを測る。土層的には、10cm程の削失と推定される。羨道は長さ12cm・幅29cm・高さ24cmで8cm低い玄室へ至る。羨門の最大幅は46cmで、閉塞材は遺存せず(板か)、玄室は黒色土が充填していた。玄室は平入り両裾楕円形を呈し、天井は羨道部から奥壁へ向かって弱い凹凸で繋がる。玄室規模は、奥行き45cm・最大幅66cm・高さ25cmを測るが、平坦面は26×30cm程しか無い。人骨や副葬品は出土していない。主軸方位は、S 19°Eである。

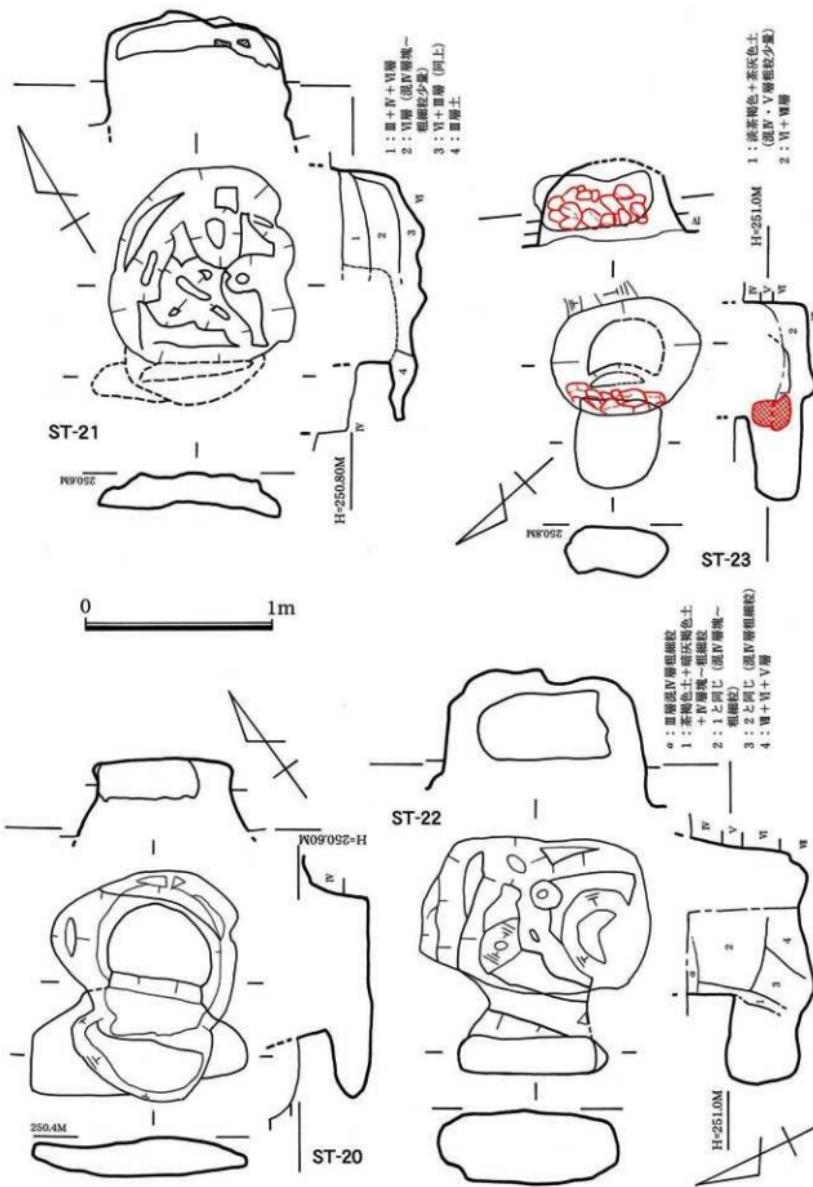
#### S T-07 (第425図)

豎坑の南東部が、06号地下式横穴墓の豎坑に切られている。豎坑は、長径1.14m・短径0.95mの楕円形を呈する。深さは44cmで、羨門部は6cm高い。羨門は、最大幅64cm・高さ24cmを測る。閉塞材は遺存せず(板か)、玄室に黒色土が充填していた。玄室は、平入り両裾楕円形タイプで、幅70cm・最大幅80cm・奥行き36cm程である。天井は、羨門から奥壁上部に向かって緩やかなS字状を描き、中央部で高さ19cm・奥壁部で10cmである。

人骨は遺存していないが、右側のほうが天井が高いので、頭位は南東と推定される。羨門部において、玄室内に土が流入した時に混入したと思われる須恵器の甕片(4312)が出土しているので、構築時期は6世紀後半の可能性がある。主軸方位は、N 40°Eである。

#### S T-08 (第425図)

47号住居の東南壁を切り込む。豎坑は、長径1.09m・短径0.9mの卵型を呈し、鋭角な東側に羨門が付く。土層的には、西側が20cm・東側が15cm程の削失と推定される。遺存する豎坑は、西側が深さ20cmで、羨門に向かって下降する。羨門は、最大幅66cm・高さ27cmを測り、閉塞材は遺存せず(板か)、玄室に黒色土が充填していた。玄室は、平入りの楕円形プランで、裾が明瞭でない。底面の平坦部は、幅36cm・奥行き18cmしかないが、奥壁に向かって10cm高くなり、奥行きが14cm広くなる。最大幅は66cmあり、奥壁の高さは12cm、天井は奥行き20cmの平天井で、羨門よりも6cm低い。主軸方位は、S 35°Wで、豎坑長軸とは47°南寄りである。



第427図 20~23号地下式横穴墓 遺構実測図

人骨や副葬品は出土せず、頭位も不明である。

#### S T-09 (第425図)

57号住居の2.6m北東、58号住居の45cm北・59号住居の4.2m北、62号住居の3.1m西に位置している。竪坑は、長さ73cm・幅74cmのD字形を呈し、深さは38~40cmを測る。土層的には、15cm程の削失と推定される。羨門は、幅52cm・高さ24cmで、竪坑底面よりも3cm高い。閉塞材は遺存せず、玄室内には黒色土が充填していた。玄室は平入りで、裾は僅かに両裾様に膨らむ。玄室は、幅64cm・最大幅68cm・奥行き20cm程で羨門底面より3cm低い。天井は羨門から奥壁に向かって真直に下降する。奥壁の高さは10cmで、玄室中央付近の高さは18cmである。主軸方位は、N52°Wで、58号住居の主軸方位に近い。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は、玄室横断面形態から、左側壁側の可能性がある。

#### S T-10 (第425図)

09号地下式横穴墓の3.3m北西、56号住居の4m南、57号住居の3.8m北に位置している。竪坑は、長径95cm・短径80cmの隅円D字型を呈し、深さ40cmを測る。土層的には、10cm程の削失と推定される。羨門は、幅64cm・高さ28cmで、竪坑底面よりも10cm低い。閉塞材は遺存せず(板か)、玄室内は黒色土が充填していた。玄室は平入り両裾楕円形プランで、底面は幅47cm・最大幅78cm・奥行き40cmを測る。奥壁の高さは10cm、玄室中央の高さは26cmを測る。主軸方位は、N70°Eである。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は不明。

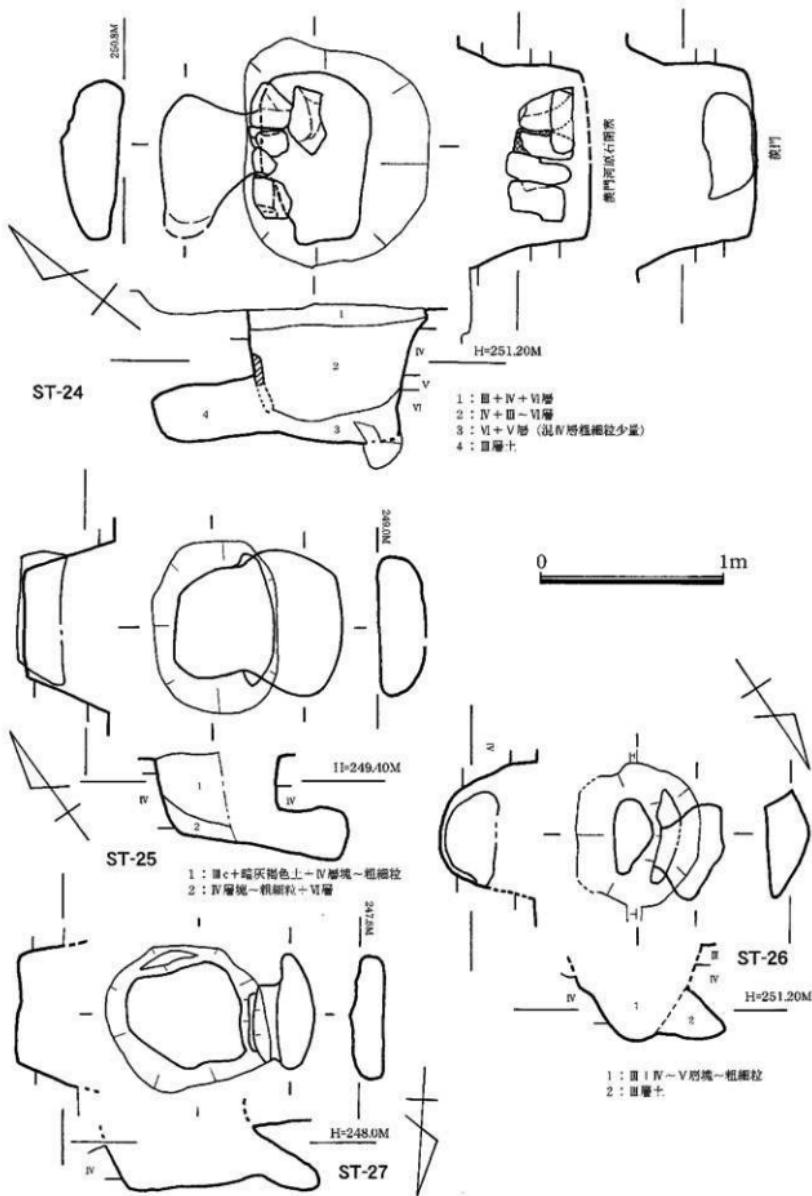
#### S T-11 (第425図)

67号住居の北70cm、69号住居の南東9.3m、64号住居の西北西8.2mに位置している。竪坑は、長径96cm・短径80cmの、北側が幅広い楕円形を呈し、深さ42~47cmを測る。底面は、羨門に向かって緩やかに下降し、羨門底面は12cmの段差が付く。羨門は、幅59cm・高さ28cmを測る。閉塞材は遺存せず(板か)、玄室は黒色土が充填していた。玄室は、平入り片裾楕円形プランで、幅49cm・最大幅62cm・奥行き20cmの平天井、高さ29cm、奥壁の高さは13cmを測る。主軸方位は、N30°Wである。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は、玄室横断面形態から、左側壁側の可能性がある。

#### S T-12 (第425図)

68・66・45・55号住居の間に並ぶ4基の地下式横穴墓のうちの1基で、西から2番目、最も竪坑規模が小さい。68号住居の南東7.8m、66号住居の東4~5mに位置する。竪坑は、長径80cm・短径68cmの楕円形を呈し、深さ12~15cmが遺存する。土層的には、15cm程の削失が推定される。底面は凹凸が激しい粗掘りのままで、中央付近から玄室まで南方へ下降する。地形的には低くなる方へ羨門を設けており、方位か竪坑の配置状況が優先された結果と思われる。羨門は、幅47cm・高さ17cmで、閉塞材は遺存しない(板か)。玄室内は黒色土で充填されていた。玄室は平入り両裾楕円形タイプで、幅59cm・最大幅63cm・奥行き24cmを測り、天井は羨門から緩やかな凸面を描く。奥壁は不明瞭に鋭角になる。玄室中央部の高さは18cmで、左側壁側が若干高い。主軸方位は、S21°Wである。人骨や副葬品は出土していないが、竪坑内から壺の胸部片(4307)が出されている。頭位は、



第428図 24~27号地下式横穴墓 遺構実測図

左側壁側の可能性がある。

#### S T-13 (第426図)

12号地下式横穴墓の1.7m北西、68号住居の南東5.3m、66号住居の北東3mに位置する。竪坑は、長径1.04m・短径88cmの楕円形を呈し、深さ34~38cmが遺存する。土層的には、20cm程の削失が推定される。底面は羨門に向かって僅かに下降し、羨門は、幅70cm・高さ18cmを測る。閉塞材は遺存せず（板か）、玄室は黒色土が充填していた。玄室は、平入り両裾楕円形タイプで、羨門底面よりも6cm低い。玄室の幅は60cm・最大幅79cm・奥行き35cmを測り、天井は羨門から奥壁に向かって真直である。奥壁は不明瞭で鋭角になる。玄室中央の高さは18cmで、右側壁側が20cm・左側壁側が15cmを測る。主軸方位は、N43°Eである。頭位は、玄室横断面より、右側壁側と推定される。

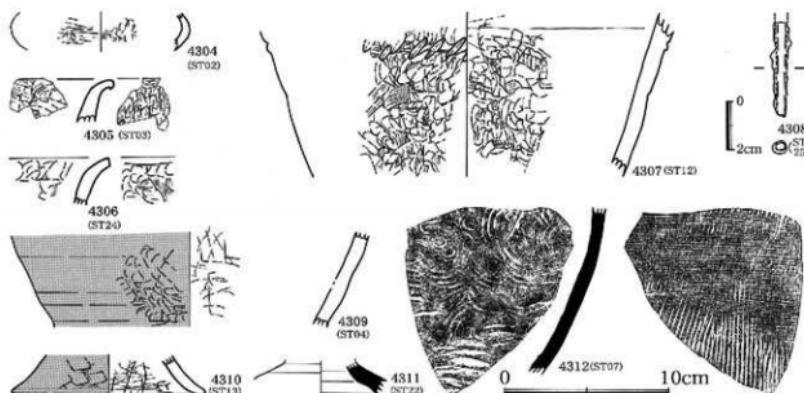
人骨や副葬品は、出土していないが、竪坑内から丹塗り土師器の高壺脚部片（4310）が出土している。

#### S T-14 (第426図)

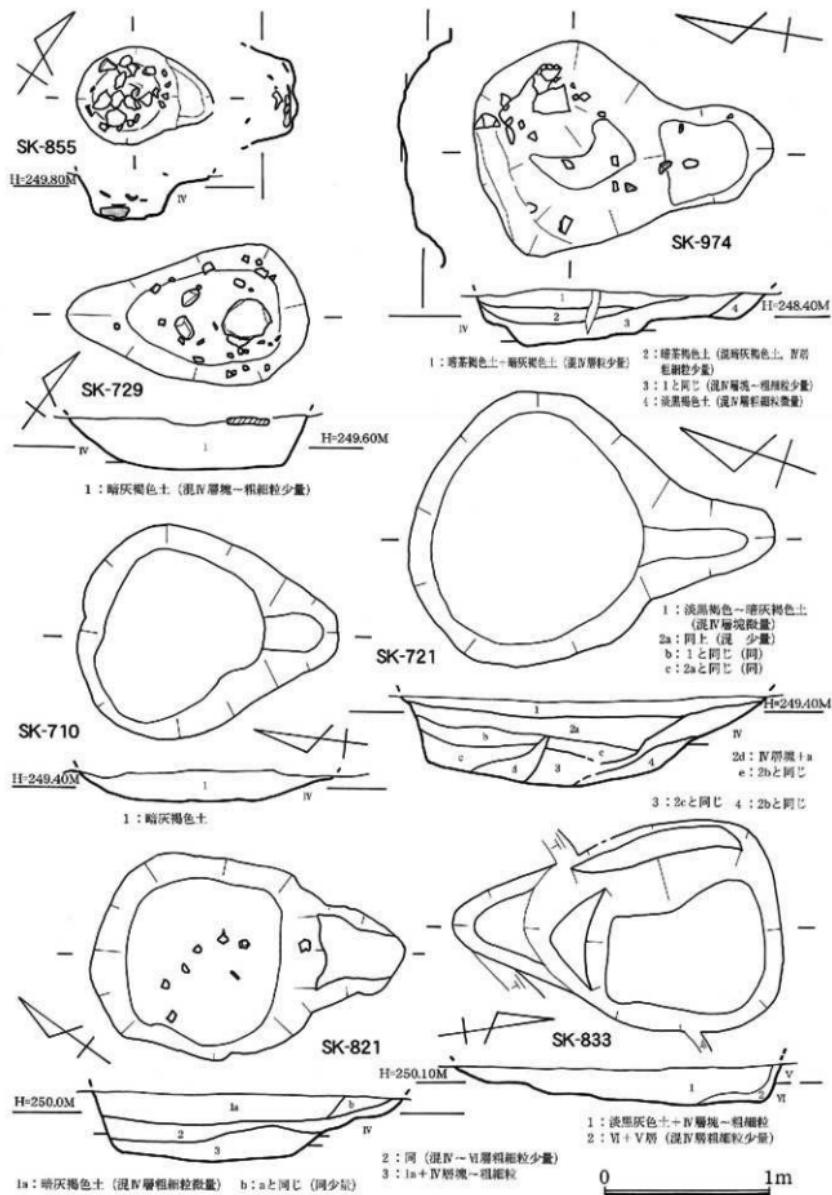
4基並ぶうちの東端、68・66・55号住居から8~10mの位置にある。竪坑は、長径97cm・短径93cmの楕円形を呈し、羨門側がやや直線的である。深さは43~48cmを測り、土層的には15cm程の削失が推定される。羨門は北側に設けられ、幅78cm・高さ20cmを測る。底面は、竪坑中央部よりも5cm高くなる。閉塞材は遺存せず（板か）、玄室は黒色土が充填していた。羨道の幅は、46cmである。

玄室は、平入り両裾楕円形タイプで、幅95cm・最大幅1.06m・高さ14~24cmを測る。天井は若干の凹凸がある程度の平らな造りで、床面は緩やかに湾曲する。奥壁は6cm程、左側壁は14cmの高さがある。主軸方位は、N4°Wである。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は、天井の高さから、右側壁と推定される。



第429図 S T-02~04・07・12・13・22・24・25 出土遺物実測図



第430図 片側小口付設土坑 遺構実測図(1)

### S T-15 (第426図)

13号地下式横穴墓の50m東、14号地下式横穴墓の90cm西、68号住居の7.8m南東、66号住居の6m北東に位置する。堅坑上面は、一回り大きい747号土坑によって、深さ8~13cmまで削除する。

堅坑は、長径1.14m・短径93cmの楕円形を呈し、深さは46cmを測る。土層的には、20cm弱の削除が推定される。羨門は、北側に設けられ、幅78cm・高さ26cmを測る。閉塞材は遺存せず（板か）、玄室は黒色土が充填していた。羨道底面は玄室底面に向かって14cm下降する。玄室は平入り両裾の不整楕円形を呈し、幅72cm・最大幅86cm・奥行き25cm・高さ31cmを測る。天井は、羨門から奥壁までほぼ直立で、横断面はドーム型である。奥壁の高さは、26cmを測る。主軸方位は、N 4°Eである。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は不明である。

### S T-16 (第426図)

72号住居の南西端から80cm南、69号住居の北西5.6m、70号住居の北東8.3m、71号住居の南東5.3mに位置する。堅坑は、長径1.04m・短径74cm・深さ32~36cmを測り、北側の羨門下底が1段（6cm）下がる。土層的には、10cm程の削除が推定される。羨門は、幅66cm・高さ21~28cmを測る。閉塞材は遺存していない（板か）が、押さえとして置いたとみられるIV層の塊が玄室内へ流入している。玄室内は、黒色土が充填していた。玄室は両裾であるが不定形プランで、幅56cm・最大幅76cm・奥行き32cm程、高さ15~22cmを測る。羨道の大井14cmは半らで、奥壁に向かって下降する。底面も中央部から10cm上昇し、鋭角な奥壁になっている。主軸方位は、N21°Wである。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は、玄室の高さから、右側壁側と推定される。

### S T-17 (第426図)

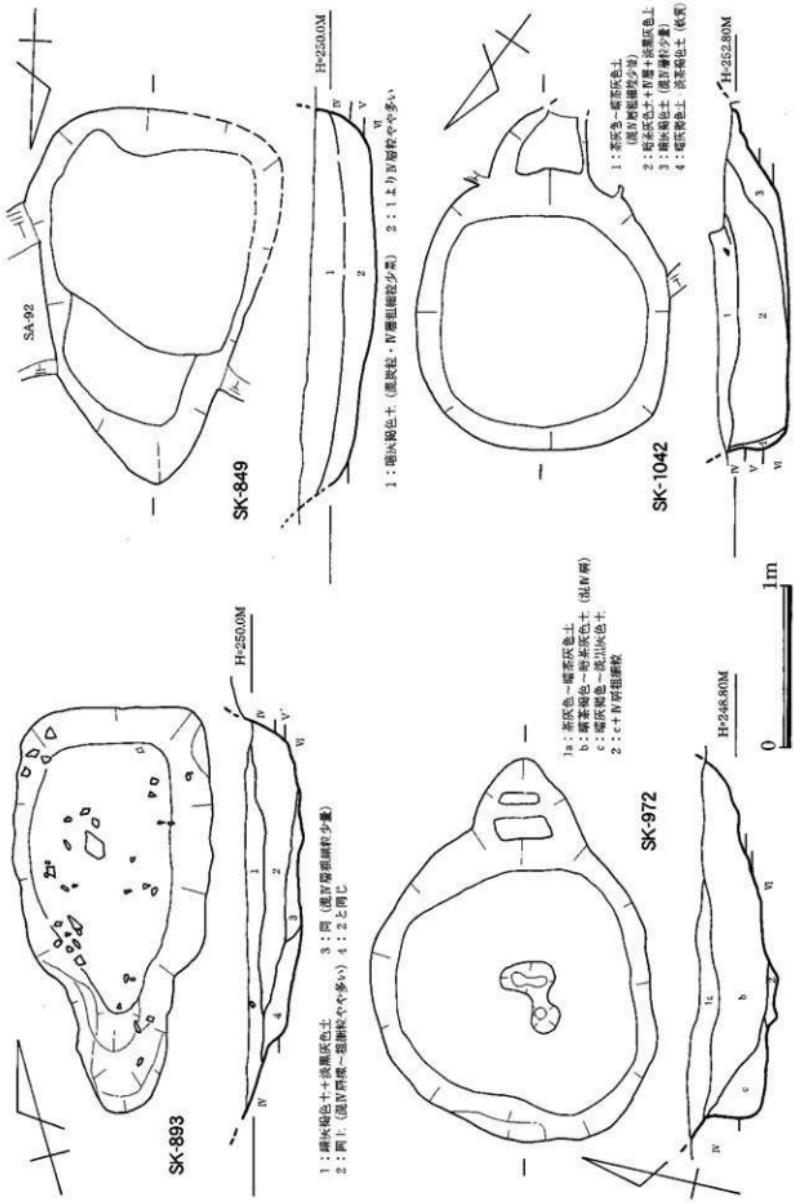
69号住居の北東3m、72号住居の南東8.3mに位置する。堅坑は、直径71~80cmの不整円形を呈し、深さ16~20cmを測る。土層的には、10cm程の削除が推定される。凹凸の激しい底面中程から羨門手前で16cm下降し、深さは34cmになる。羨門は、幅30cm・高さ21~22cmを測る。閉塞材は遺存せず（板か）、玄室は黒色土が充填していた。玄室は、平入り両裾楕円形プランで、幅45cm・最大幅47cm・奥行き26cmを測り、中央部の高さは14cmである。羨門から奥壁までの天井は、緩やかにS字を描く程度で奥壁の高さは2~3cm程の鋭角である。主軸方位は、N28°Wである。

人骨や副葬品は、出土していない。

### S T-18 欠番である。

### S T-19 (第426図)

56号住居の北東5m、64号住居の東2m、105号住居の西6mに位置する。堅坑の南側は近現代の座棺墓に切られて長さは不明（推定長径97cm）、短径71cmの楕円形を呈し、深さ46cmを測る。羨門は、幅43cm・高さ22cmを測り、IV層の塊7~8個で閉塞されていた。玄室は黒色土が充填し、塊の隙間などから流入したと推定される。玄室は、平入り両裾楕円形プランを呈し、幅66cm・最大幅68cm・奥行き34cmを測り、底面は凹凸がなく丁寧に整形されている。天井は羨門から緩やかに下降し、中央部で高さ18cm、奥壁部で16cmを測る。主軸方位は、N23°Wである。



第431図 片側小口付設土坑 遺構実測図(2)

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は、幅広の右側壁側と推定される。

#### S T-20 (第427図)

XII区125号住居内、南西側中央部で、住居内土坑に切られる、住居以前の造構である。未調査地に、関連する住居が存在する可能性がある。堅坑は、直径94~98cmの不整円形を呈し、深さ35cmが遺存する。土層的には、10cm程の削尖が推定される。羨門は、幅52cm・高さ20~22cmで底面が2cm低くなる。閉塞材は遺存せず（板か）、玄室は黒色土が充填していた。玄室は、平入り両幅で半長方形・半梢円形を呈する。幅は1.15m・奥行き29~35cm、高さは中央で20cmを測る。右側壁の高さは8cm、左側壁は6cmを測り、天井は緩やかに下降する。奥壁は鋭角になり、面が無い。主軸方位はS 36°Wである。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は、玄室の高さから、左側壁側と推定される。

#### S T-21 (第427図)

120号住居の北東隅と1m隔てた位置にある。近現代の147号溝と搅乱によって20cm程の削失を受けている。堅坑は、長径1.14m程・短径90cmの不整梢円形を呈し、羨門側が広い。遺存する深さは40~48cmで、底面は粗掘りのままで凹凸が激しい。羨門は、幅70~85cm・高さ12~17cmを測り、東側のほうが歪つて高い（頭部を入れるためか）。閉塞材は遺存せず（板か）、玄室内には黒色土が充填していた。玄室は平入りであるものの歪つな形で、天井や床・壁面すべてが粗掘りのままである。床面の幅は63cm、天井の幅は98cm・高さ16~18cmの不整逆台形を呈する。奥行きは18~20cmあるが、奥壁の高さは4cmしか無い。主軸方位は、S 30°Wである。

人骨や副葬品は、出土していない。頭位は不明である。

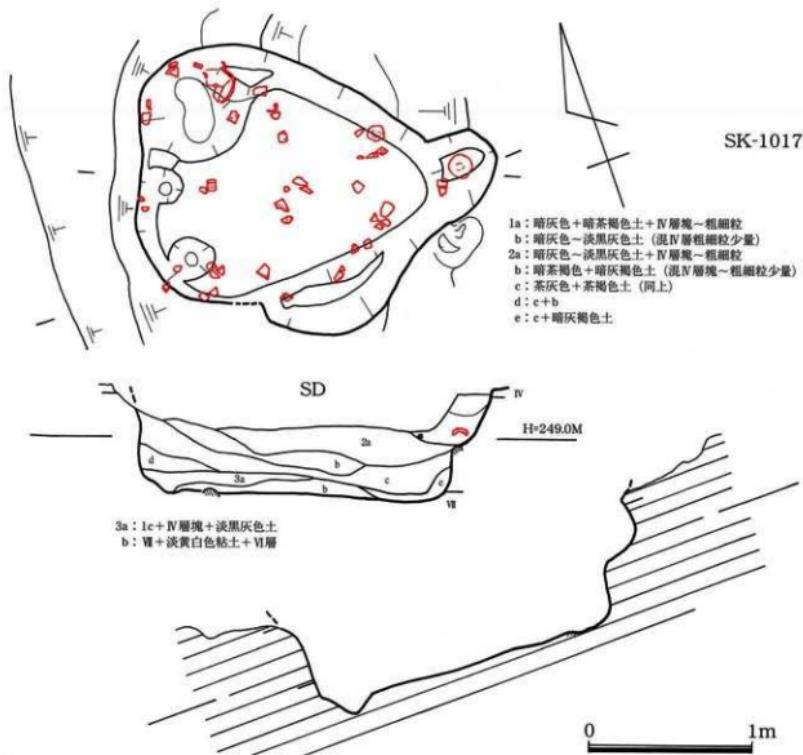
#### S T-22 (第427図)

21号地下式横穴墓と90cm隔てた北西部、120号住居の1.3m北東に位置する。堅坑は、147号溝に上部を10cm程削られ、長径1.23m・短径85cm・深さ60~71cmを測る。底面は凹凸が激しく、粗掘りのままである。羨門は長軸の北西壁にあり、幅62~69cm・高さ35cmを測る。閉塞材は遺存していないが、板閉塞としての痕跡（1層）が明瞭である。玄室内は、黒色土が充填していた。玄室は、平入り両幅梢円形プランを呈し、幅79cm・最大幅96cm・奥行き20cm・高さ36~39cmを測り、底面に凹凸がある。天井は、羨門から奥壁に向かってやや上昇し、奥壁の高さ32cmを測る。主軸方位は、N 64°Wである。

人骨や副葬品は、出土していないが、堅坑上面から須恵器片（4311）が出土している。頭位は、空間の広さから右側壁側と推定される。

#### S T-23 (第427図)

22号地下式横穴墓から4.8m北北東、124号住居の南東4mに位置する。堅坑は、長径82cm・短径60cmの梢円形を呈し、深さ34~39cmを測る。土層的には、25cm程の削尖が推定される。羨門は、幅64cm・高さ25~30cmを測る。底面は堅坑底面よりも4cm低い。閉塞は、羨道にかけてIV層塊を2段に10数個置かれていた。玄室内は、黒色土が充填していた。羨道床面は8cm高くなり、奥壁まで平



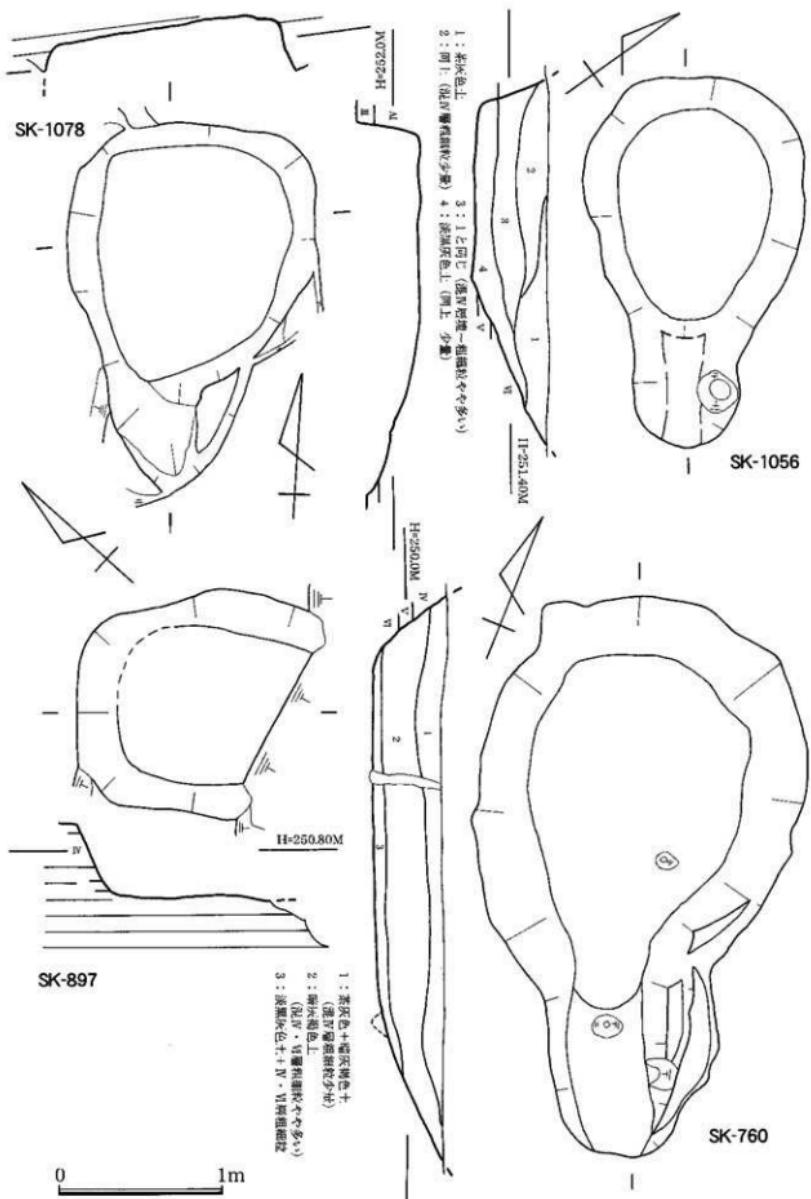
第432図 片側小口付設土坑 遺構実測図(3)

坦である。玄室は無裾で、羨道との区別がない。幅は45cm・最大幅55cm、奥壁の高さは22cm、羨門から奥壁までは49cmを測る。天井は、羨門から奥壁へ緩やかに下降する。主軸方位は、N47°Wである。

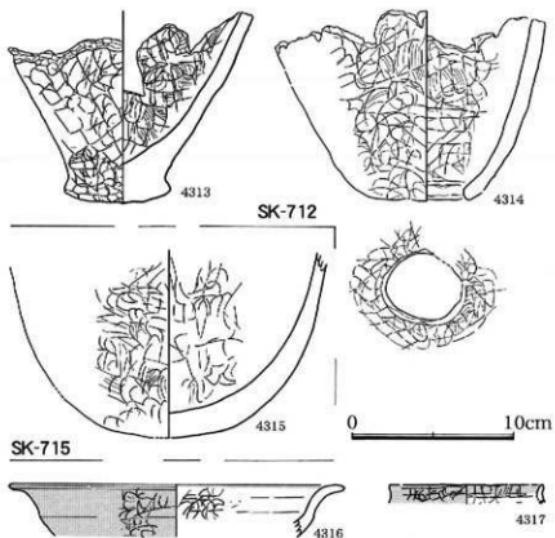
人骨や副葬品は、出土していない。頭位も不明である。

#### S T-24 (第428図)

XI区の南東部、122号住居の北2.4m、126号住居の2m南西、127号住居の70cm東に位置する。豎坑は、長径1.26m・短径98cmの不整梢円形を呈し、羨門部が直線的なプランで、深さ69~75cmを測る。羨門は、3層上面において、加久藤溶結凝灰岩2個（左側）と河原石2個を立てて、右端の厚みのある河原石の倒壊防止として平石が置かれている。河原石の隙間には、IV層の塊が詰め込まれている。羨門は、幅36~57cm・高さ24~27cmで、下部は豎坑底面よりも5cm高い。玄室は平入り両裾梢円形タイプで、幅70cm・最大幅87cm・奥行き30cm・高さ12~32cmを測る。天井は、羨道20cmで6cm下がり、20cm程の平天井、奥壁に向かって8cm下がる。底面は、奥壁に向かって5cm下がり、



第433図 片側小口付設土坑 遺構実測図(4)



第434図 SK-712・715・721 出土遺物実測図

高さ30cmを保って奥壁に至り、奥壁は高さ22cmで外傾する。右側壁の高さは25cm、左側壁は12cmを測り、天井はドーム型である。主軸方位は、N38°Wである。

玄室は黒色土で充填しており、人骨や副葬品は、出土していない。頭位は、天井の高さから、右側壁側と推定される。なお、竪坑内から、壺片(4306)が出土している。

#### S T-25 (第428図)

126号住居の北西2.5m、139号住居の南東2.7mに

位置する。竪坑は、長径94cm・短径66cmの梢円形を呈し、深さ42-50cmで渓門に向かって下降する。渓門は、幅56-70cm・高さ23cmを測る。閉塞材は遺存せず(板か)、玄室は黒色土が充填していた。玄室は、平入り両裾梢円形タイプで、幅66-74cm・最大幅82cm・高さ27cmを測る。渓道の天井は長さ12cmで水平、玄室中央は3cm高くなる。底面は奥壁まで下降し、竪坑北西底面よりも15cm低い。奥壁は湾曲した面があり、高さ24cmを測る。主軸方位は、S 55°Eである。

人骨や副葬品は出土していないが、竪坑内-10cmのレベルで鉄錐茎部(4308)が出土している。

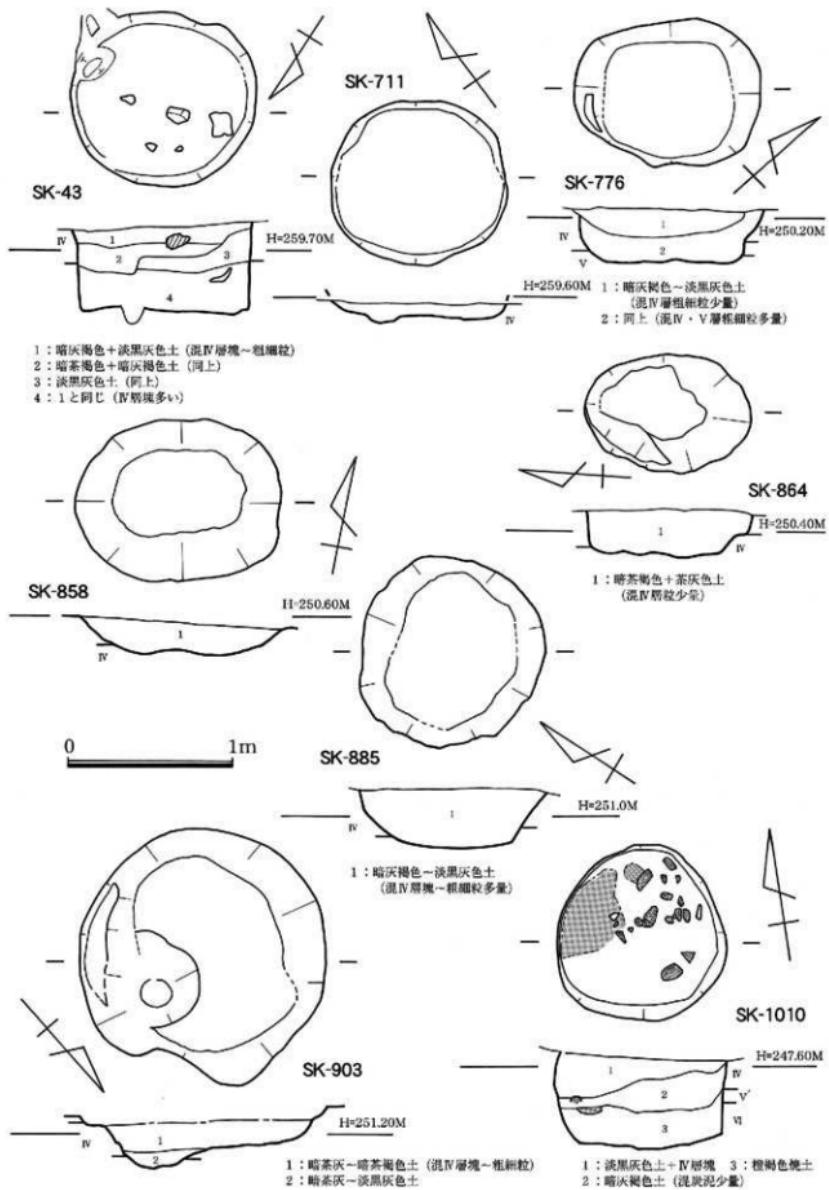
#### S T-26 (第428図)

24号地下式横穴墓の1.2m南東、122号住居の北2.7m、126号住居の40cm南西に位置する。竪坑は、長径79cm・短径67cmの半円半隅円方形を呈し、深さ53cmを測る。東南半分は、上部を削失しており、推定復元すると、短径は74cm程になる。渓門は、幅54-71cm・高さ22-27cmを測り、底面は竪坑よりも4cm高い。閉塞材は遺存せず(板か)、玄室は黒色土が充填していた。玄室は平入り両裾梢円形タイプで、幅53cm・奥行き14-24cm・高さ22cmを測る。左側壁は壁が外方へ14cm反る。天井は渓門から奥壁に向かって直線的に下降し、右側壁と奥壁は面が無く鋭角である。主軸方位は、N 57°Wである。

人骨や副葬品は、出土していない。

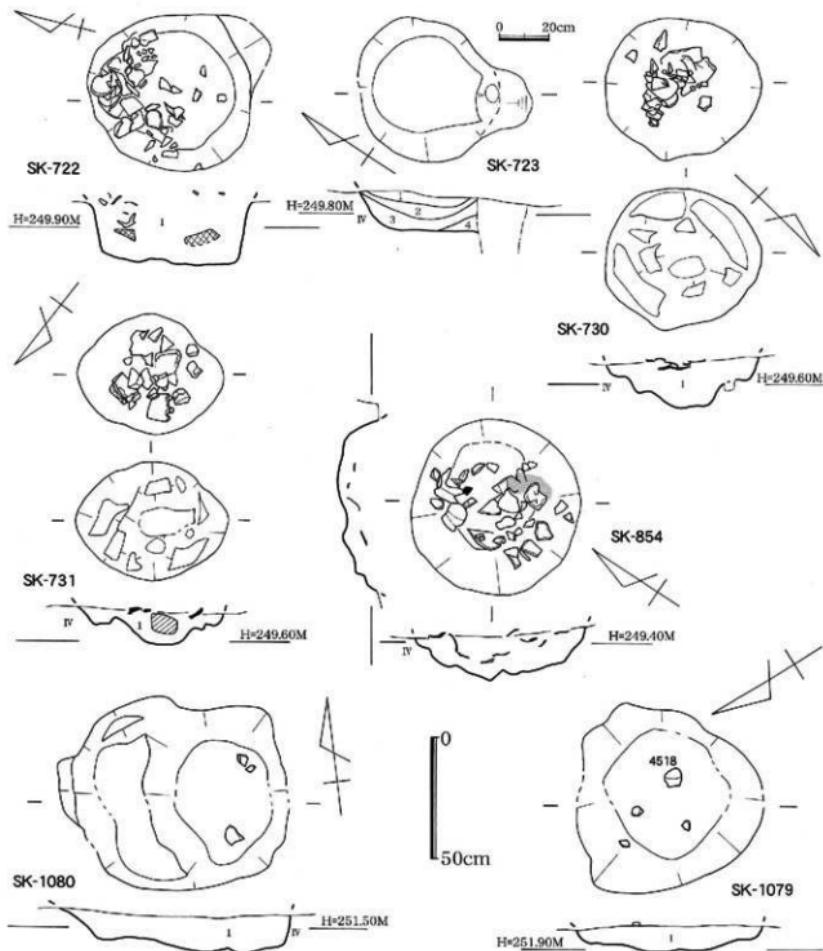
#### S T-27 (第428図)

Ⅳ区の東南部、163号住居の西3.1m、164号住居の東2.1mに位置する。竪坑は、長径86cm・短径



第435図 円形・橢円形土坑 遺構実測図(1)

79cmの、半円半方形を呈し、深さ23~26cmが遺存する。土層的には、25cm程の削失が推定される。羨門は西の直線部に設けられ、幅31cm・高さ26cmを測る。底面は、豊坑よりも6cm高い。閉塞材は遺存せず（板か）、玄室は黒色土が充填していた。玄室は、平入り両裾楕円形タイプで、幅62cm・最大幅68cm・奥行き18cm・高さ10~18cmを測る。天井は羨門から奥壁に向かって真っ直ぐ下降し、底面は羨門部よりも6~8cm低くなる。奥壁は高さ10~12cmを測り、両側壁とも無いに等しい。主軸方位は、S 86°Wである。



第436図 円形・楕円形土坑 遺構実測図(2)

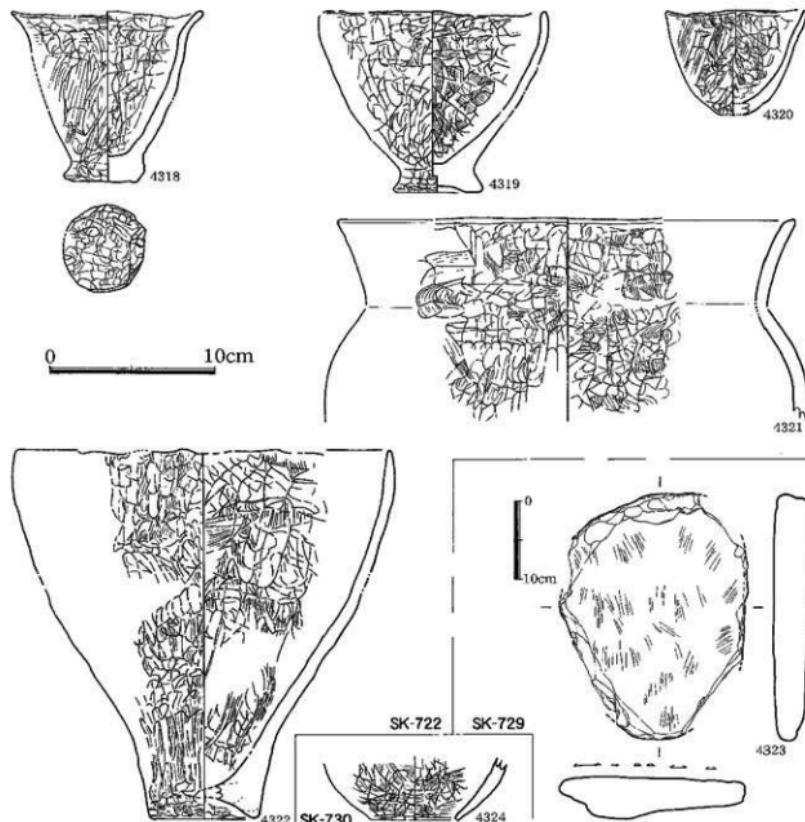
人骨や副葬品は、出土していない。

#### 片側小口付設土坑

大小・様々な形の土坑の片側にスロープが付く土坑で、Ⅶ～Ⅸ・Ⅹ区において検出している。以下、小規模な土坑から述べる。なお、壁面の被熱は1例も無い。

#### SK-855 (第430図)

Ⅹ区56号住居の北2.5m、64号住居の南2.4mに位置した、長径63cm・短径57cm・深さ26～29cmの円形土坑の北東部に、幅42cm・奥行き20cm・深さ1～2cmの小口が付設する。土層的には上部5～10cmが削失している。覆土から、弥生時代終末～古墳時代前期の土器片31点と焼土塊（底面）が出土した。不要物廃棄坑以外、機能を推定する要素が無い。



第437図 SK-722・729・730 出土遺物実測図

### S K-729 (第430図)

56号住居の東1.6m、62号住居の北西5.4mに位置する。主軸方位を同じくする住居は、周囲には無い。直径86cmの円形土坑の南西側に長さ40cm程の42度の斜面スロープが付いて、長さ1.45mになる。深さは30cmで、土層的には10cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片121点と台石1点、鉢底1点（写真図版413）が出土しているが、図化できたのは台石のみである。

### S K-710 (第430図)

47・48・49号住居から3.4~3.8mの距離にあるが、主軸方位は一致しない。長径1.32m・短径1.2m程の楕円形土坑の長軸南側に、長さ36cmのスロープが付き、1.57mになる。掘形は円形部と一体化する。深さは18cmを測り、土層的には10cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片15点が出土したが、図化に耐えない小片ばかりである。

### S K-821 (第430図)

64号住居の北西6.4m、67号住居の北東3.6m、93号住居の南西7.0mに位置し、主軸方位は67号住居が最も近い。長さ1.4m・幅1.2mの楕円形を呈する深さ37~41cmの土坑の南東部に、幅63cm・長さ50cmのスロープが付き、長さ1.88mになる。土層的には、10cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片73点と、須恵器片2点（4350・4351）が出土しているほかは、目立った特徴が無い。

### S K-974 (第430図)

廻区153号住居の28cm南西、154号住居の1m北、155号住居の北西3.4mに位置し、主軸方位は155号住居が近い。掘形は、長さ1.23m・幅0.7~1.2mの隅円台形を呈する深さ23~30cmの土坑の南側に、幅60cm・長さ50cm・深さ12~15cmのステップが付く。土層的には、15cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片50点と須恵器片1点（4463）が出土している。

### S K-721 (第430図)

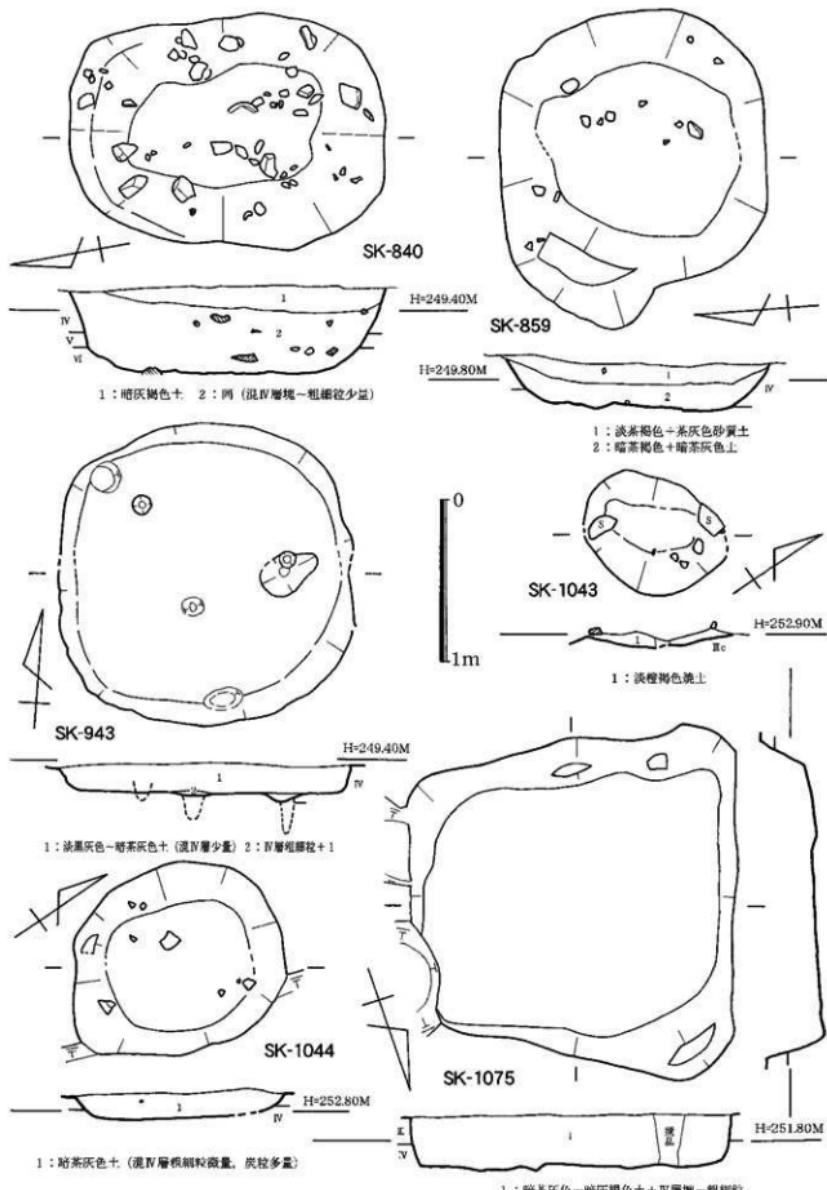
710号土坑の4.2m東、49号住居の北東5.2m、51号住居の北西6.9m、73号住居の南90cm程に位置し、主軸方位は48~50号住居に近い。掘形は、長径1.7m・短径1.5m程の楕円形を呈する深さ38~51cmの土坑の南側に、幅75cm・長さ64cmのスロープが付き、長さ2.21mになる。覆土の2e層が堆積した段階で、北半分程が掘削されて再利用されている。覆土から、土師器片30点と須恵器片2点が出土している。

### S K-833 (第430図)

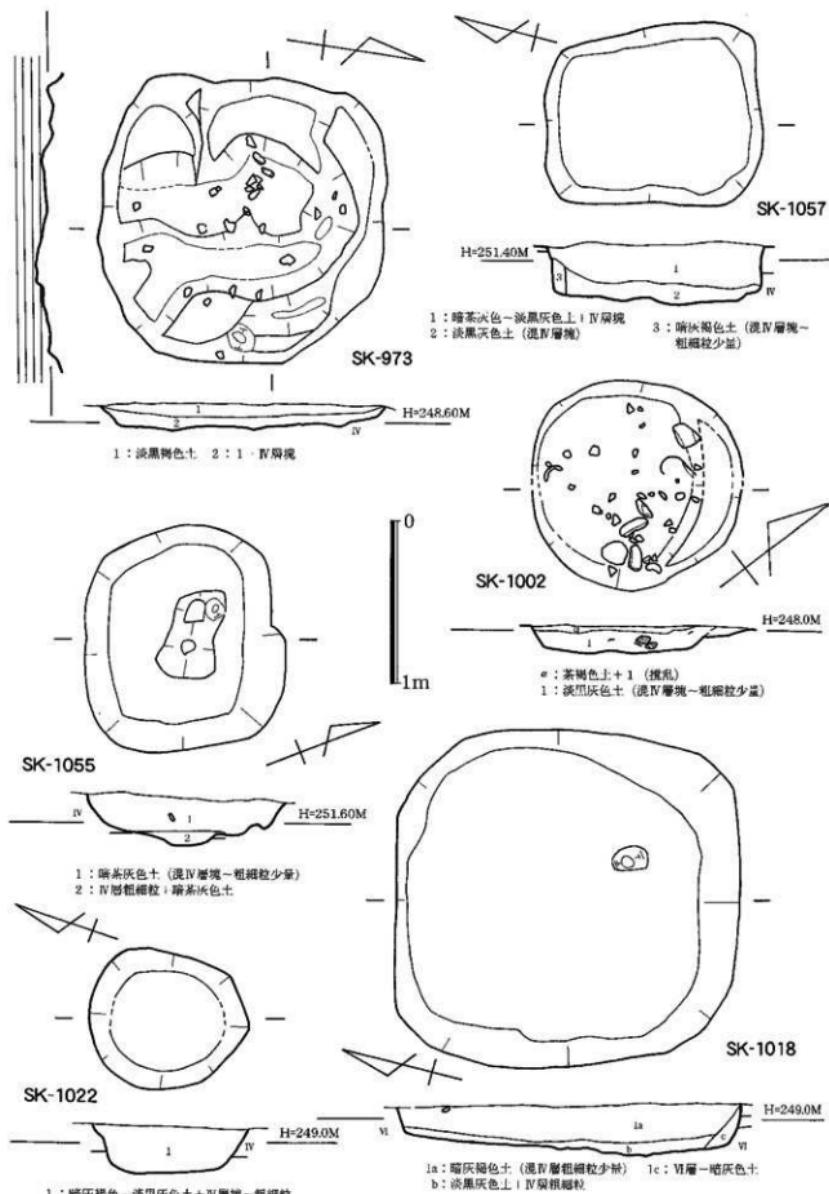
93号住居を切り、84号住居の南南東5.4m、89号住居の南南西6.1m、91号住居の南西3.3m、94号住居の北西7.0mに位置し、主軸方位は84・89号住居が近い。長さ1.56m・幅1.29mの倒卵型を呈する深さ18~22cmの土坑の南側に、長さ43cm・深さ9cmのステップが付いて長さ1.99mになる。土層的には、25cm程の削失が推定される。平面面の形態は、729号土坑と相似する。覆土から、土師器片163点と須恵器片4点が出土している。

### S K-849 (第431図)

92号住居を切り、93号住居の南東5.2m、94号住居の南南西2.4m、106号住居の西2.7mに位置す



第438図 SK-840・859・943・1043・1044・1075 遺構実測図



第439図 SK-973・1002・1018・1022・1055・1057 遺構実測図

る。長さ2.31m・最大幅1.52mの、小口が一体化するタイプである。深さは33~39cmを測り、土層的には10~15cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片358点と須恵器片5点が出土しているが、図化できたのは僅かであり、小片が多い。

#### S K-893 (第431図)

III区の、116号住居の北6.6m、117号住居の東4.4m、118号住居の南4mに位置する。長さ1.7m・幅1.06~1.20mの隅円長方形を呈し深さ24~35cmの土坑の南側に、幅66cm・長さ82cmのスロープが付く。総じて長さは2.50mになる。土層的には、15cm程の削失が推定される。スロープ終点と土坑底面は11cmの段差がある。覆土から、土師器片113点と須恵器片1点が出土しているが、図化できたのは僅かである。

#### S K-972 (第431図)

III区の中央部、148号住居の南東4.3m、151号住居の北西3.1m、152号住居の南西3.2mに位置する。長径2.0m・短径1.67mの不整梢円形の東側に、幅70cm・長さ48cm・深さ22cmのステップが付く。土坑の深さは36~47cmで、中央部はさらに4~5cm下がる。土層的には、上面は5cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片265点と須恵器片3点が出土しているが、小片が多い。

#### S K-1042 (第431図)

IV区の185号住居の北北西5.3mに位置し、01号掘立柱建物の柱穴に小口を切られる。掘形は長径1.72m・短径1.53mの梢円形を呈し、深さ43cmが遺存する。土層的には15~25cm程の削失が推定される。南西部には、幅63cm・長さ38cmのスロープが付設される。覆土から、土師器片22点が出土しているが、図化できたのは僅かである。

#### S K-1017 (第432図)

III区の中央付近、168号溝に切られ、168号住居を切る。遺存する長さは、1.92m・幅1.43~1.59m・深さ62~69cmの土坑の北東部に、長さ32cm・幅54cm・深さ34cmのステップが付く。土層的には、30cm程の削失が推定される深いタイプである。底面西側にはpit状の凹みがあるが、柱穴ではないと思われる。覆土から、土師器片140点と須恵器片4点、完形品2点(4494・4495)が出土している。4495の有蓋短頸壺には黒色土が充填しており、水洗選別をしたが、何も検出されなかった。

#### S K-1078 (第433図)

III区の中央寄り、195号住居の東部を切る。長さ1.64m・幅1.52mの隅円方形土坑の南側に、長さ67cm・幅82cmのスロープが付く。土坑の深さは、38cmである。覆土から、弥生時代後期の免田式土器片(4515・4516)やその他の土器片82点と磨製石錐未製品1点(4517)等が出土している。

#### S K-1056 (第433図)

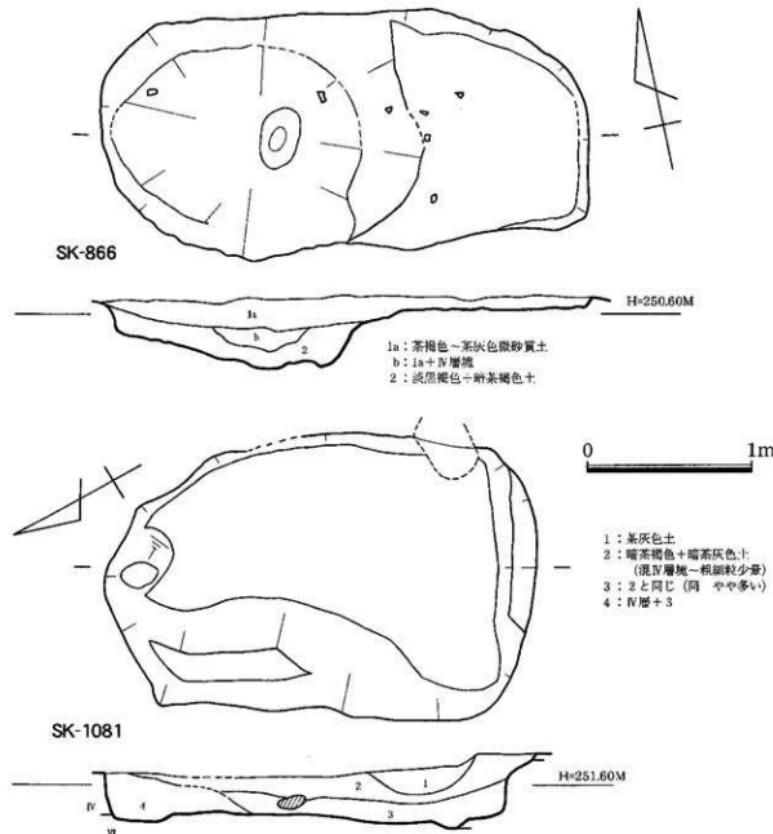
188号住居の北5.6m、189号住居の北西4.3m、190号住居の東4.3mに位置する。長径1.6m程・短径1.36mの梢円形の南東側に、幅65cm・長さ70cm程のスロープが付いて、長さ2.28mになる。深さは41~45cmで土層的には5~10cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片55点が出土しているが、小片ばかりで、図化できたのは僅か3点である。

SK-760 (第433図)

Ⅹ区64号住居の西10.4m、67号住居の北0.35m、68号住居の東14m、69号住居の南東10.2mに位置した、遺跡内最大の片側小口付設土坑である。長径2.5m程、短径2.0mの指円形の南側に、長さ1.1m・幅1.04mのスロープが付き、長さ3.45mになる。深さは40~45cmで、土層的には15cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片473点のほか、須恵器片7点、刀子の刃部(4330)、鉛滓1点等が出土しているが、小片が多く、図化できたものは少ない。

SK-897 (第433図)

Ⅹ区中央の124号溝に削失され、小口の有無は不明であるが、形状と規模から、付設されていた可能性がある。位置的には、123号住居の北東隅と切り合っていたかもしれない。119号住居とは13.5



第440図 SK-866・1081 遺構実測図

m西、122号住居とは8.4mの位置にある。長径1.5m以上（推定1.8m）・短径1.39mの不整椭円形を呈し、深さは42cmを測る。覆土から、土師器の小片10点が出土しているが、図化に耐えない。

#### その他の土坑

円形・椭円形・隅円方形等の定形タイプと不定形タイプ、大小様々な土坑があり、II～IV区に多い。

#### SK-711（第435図）

710号土坑の北東70cm、721号土坑の北西2.7m、73号住居の南西3.9m、49号住居の北北西4.9mに位置する。長径1.08m・短径1.01mの円形を呈し、深さ8cmが遺存する。土層的には10cm程の削失と推定される。出土遺物は無いが、覆土の性質から古墳時代の土坑であると思われる。

#### SK-776（第435図）

70号住居の北西3.0mに位置した、長径1.13m・短径0.88mの椭円形を呈し、深さ31～33cmを測る。土層的には、10cm程の削失と推定される。覆土から、土師器片11点が出土しているが、図化に耐えない。

#### SK-858（第435図）

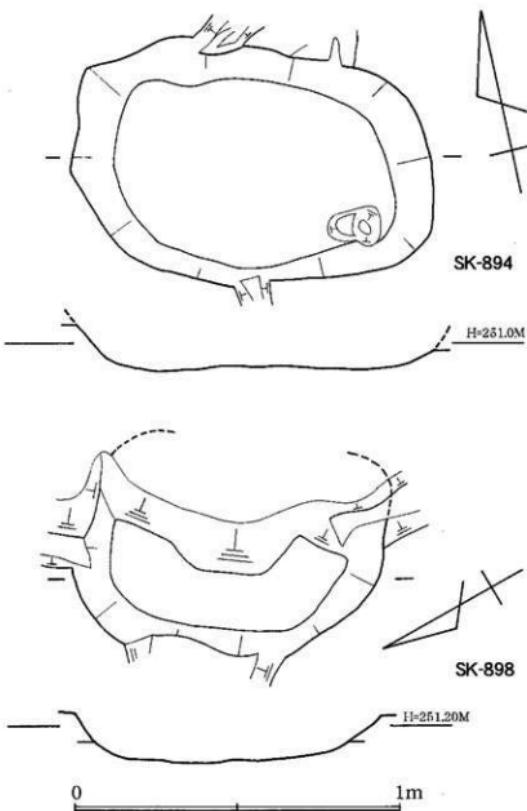
II区東南部の125号住居の東80cmに位置した、長径1.25m・短径0.99mの椭円形土坑で、深さ16～20cmを測る。覆土から、土師器片3点が出土しているが、図化に耐えない。

#### SK-864（第435図）

71号住居の北2.3m、116号住居の南西4mに位置した、長径1.01m・短径0.71mの椭円形を呈し、深さ26～29cmを測る土坑である。覆土から土師器片7点が出土しているが、図化に耐えない。

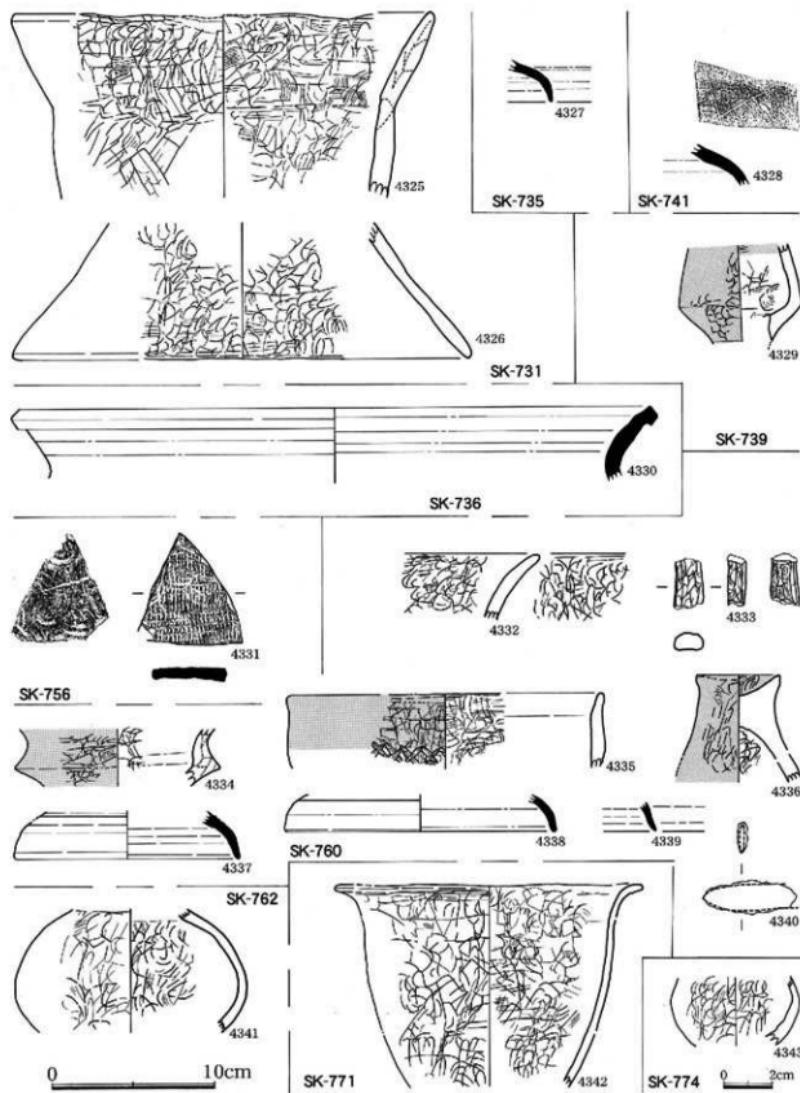
#### SK-885（第435図）

120号住居の北西5.9m、121

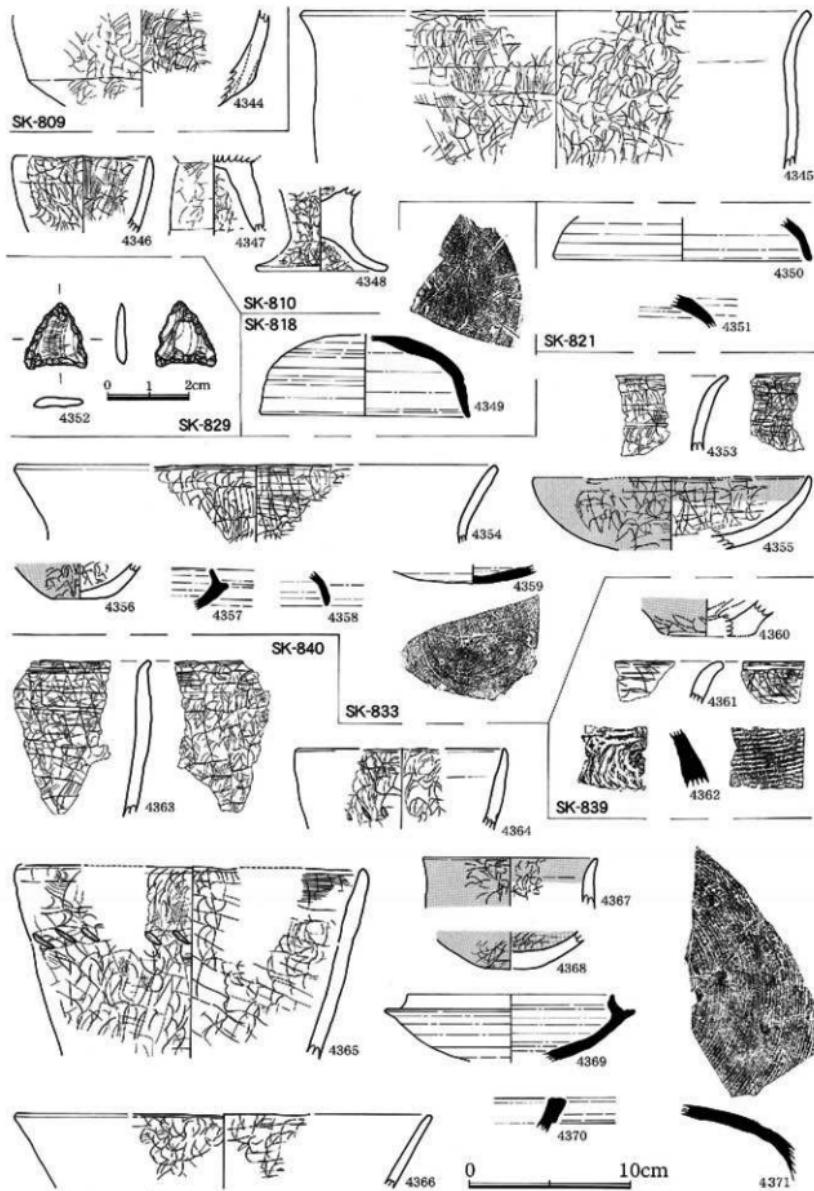


第441図 SK-894・898 遺構実測図

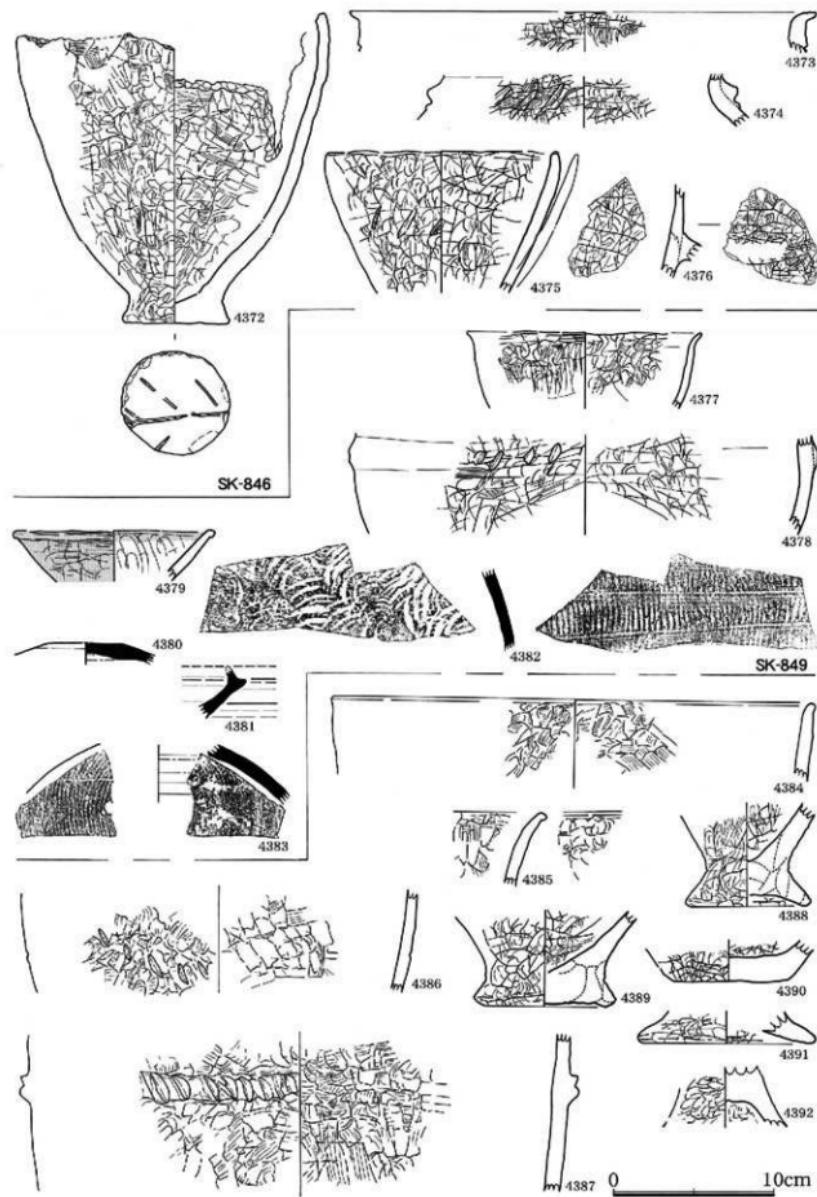
号住居の南東4.5m、128号住居の2.8mに位置した、長径1.15m・短径1.11mの楕円形を呈し、深さ33~37cmを測る。土層的には、5~15cmの削失が推定される。覆土から土師器片4点が出土して



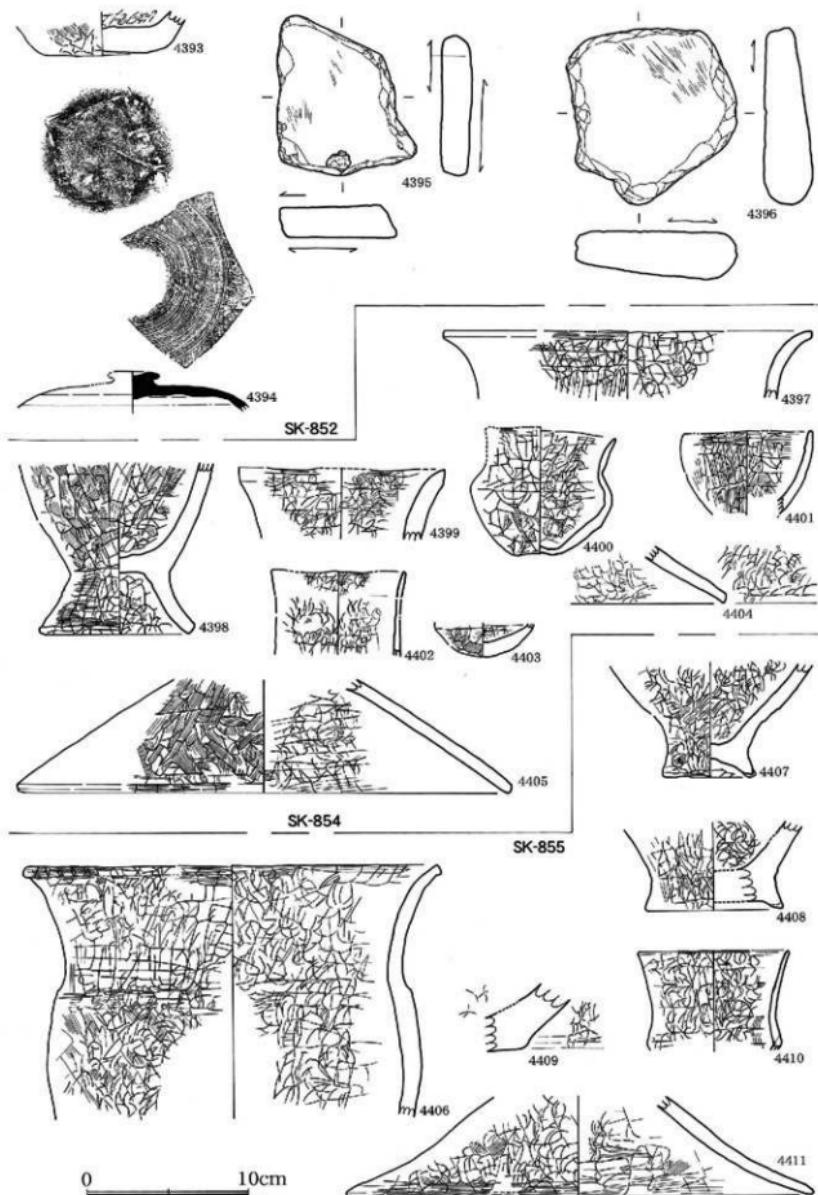
第442図 SK-731・735・736・739・741・756・760・762・771・774 出土遺物実測図



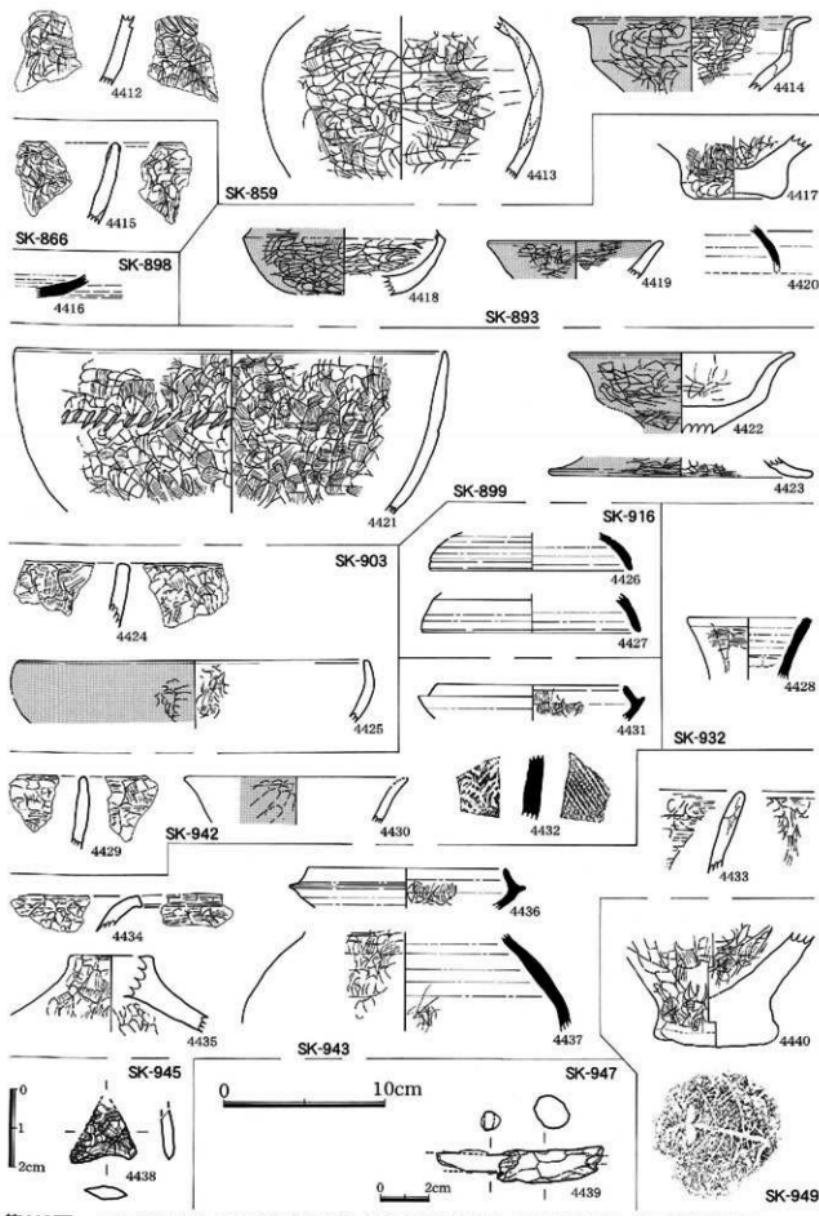
第443図 SK-809・810・818・821・829・833・839・840 出土遺物実測図



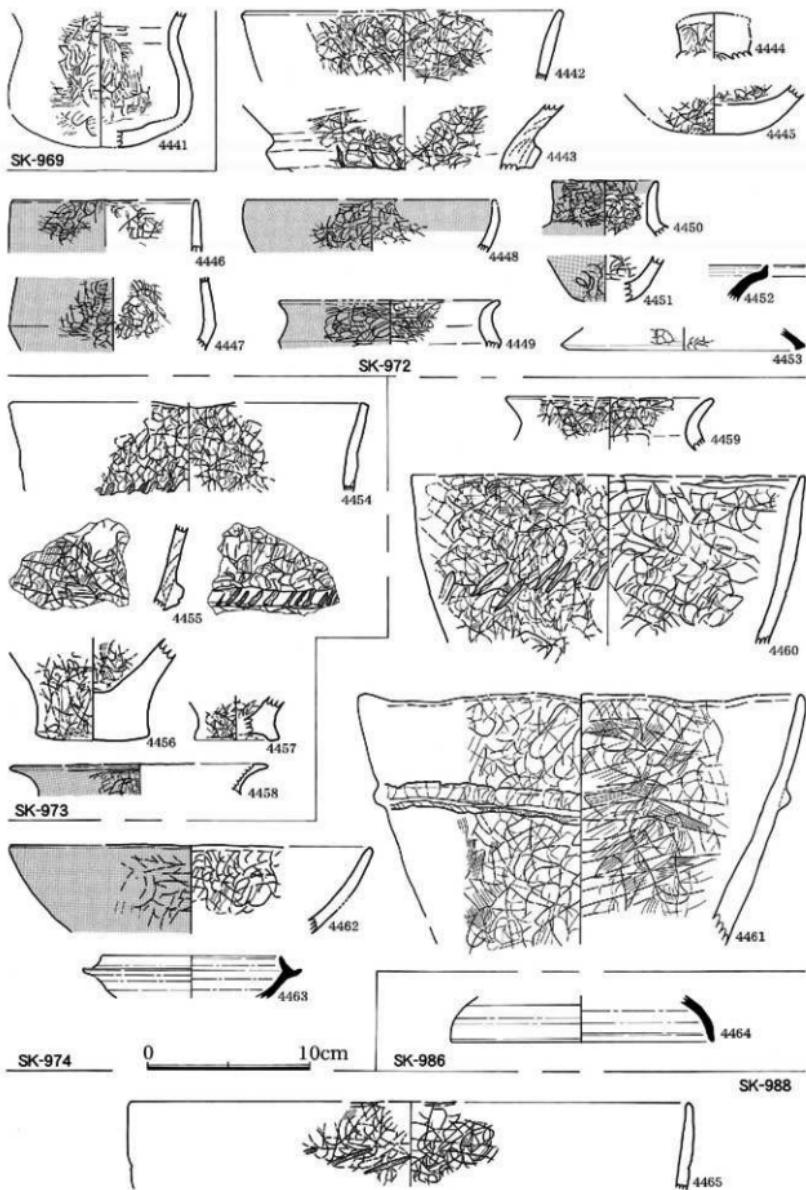
第444図 SK-846・849・852 出土遺物実測図(1)



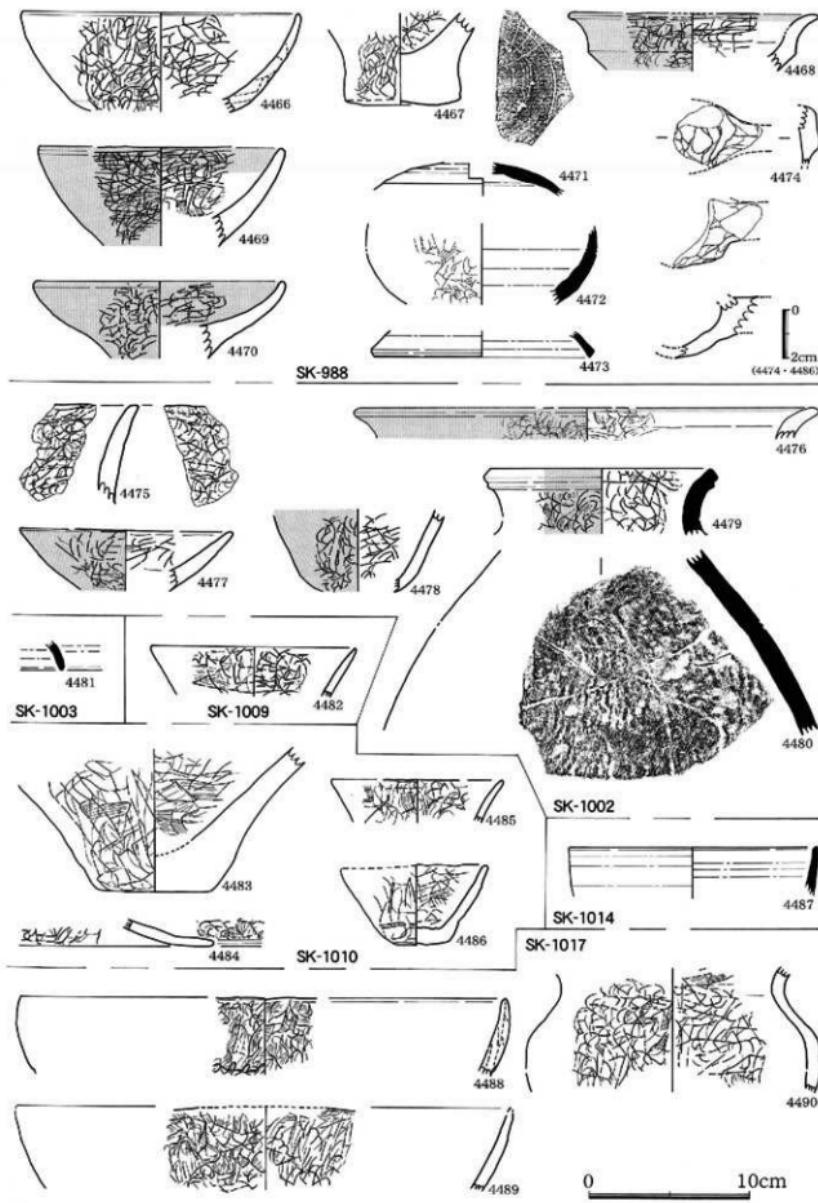
第445図 SK-852 出土遺物実測図(2), SK-854-855 出土遺物実測図



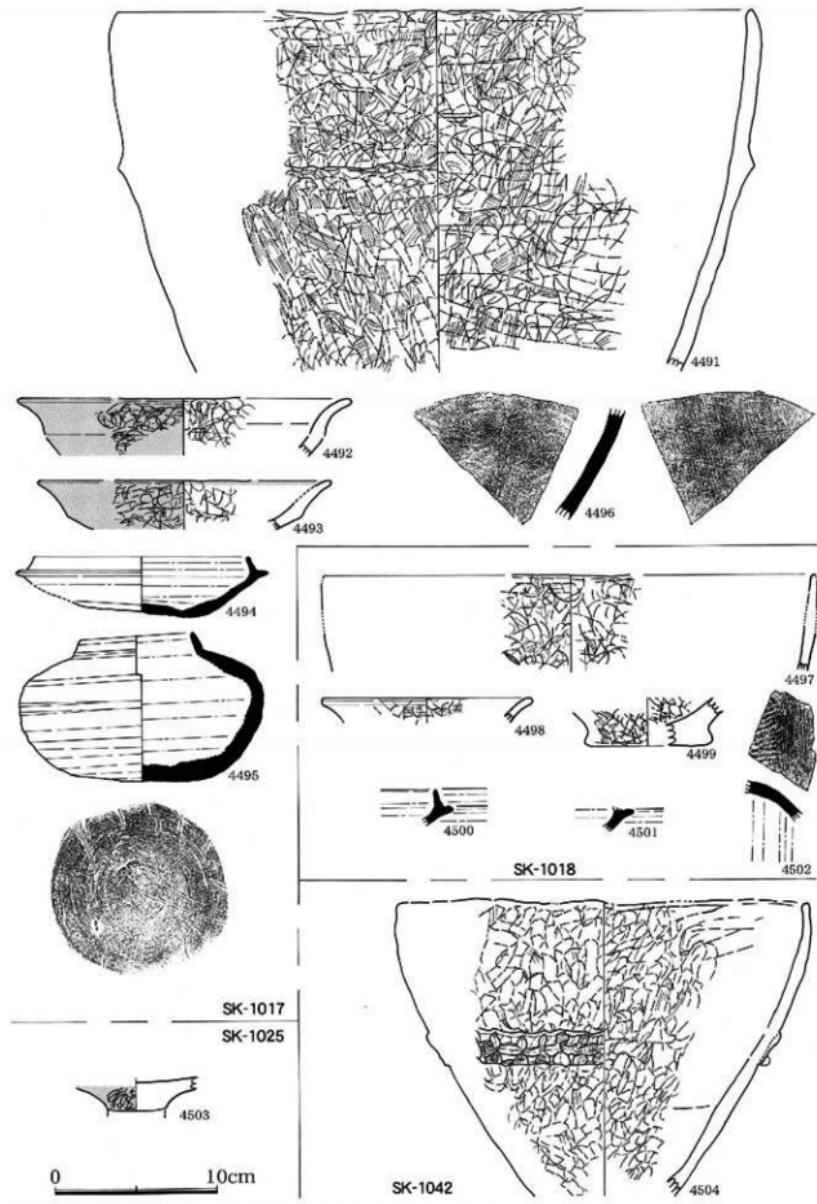
第446図 SK-859・866・893・898・899・903・916・932・942・943・945・947・949 出土遺物実測図



第447図 SK-969・972～974・986・988 出土遺物実測図(1)

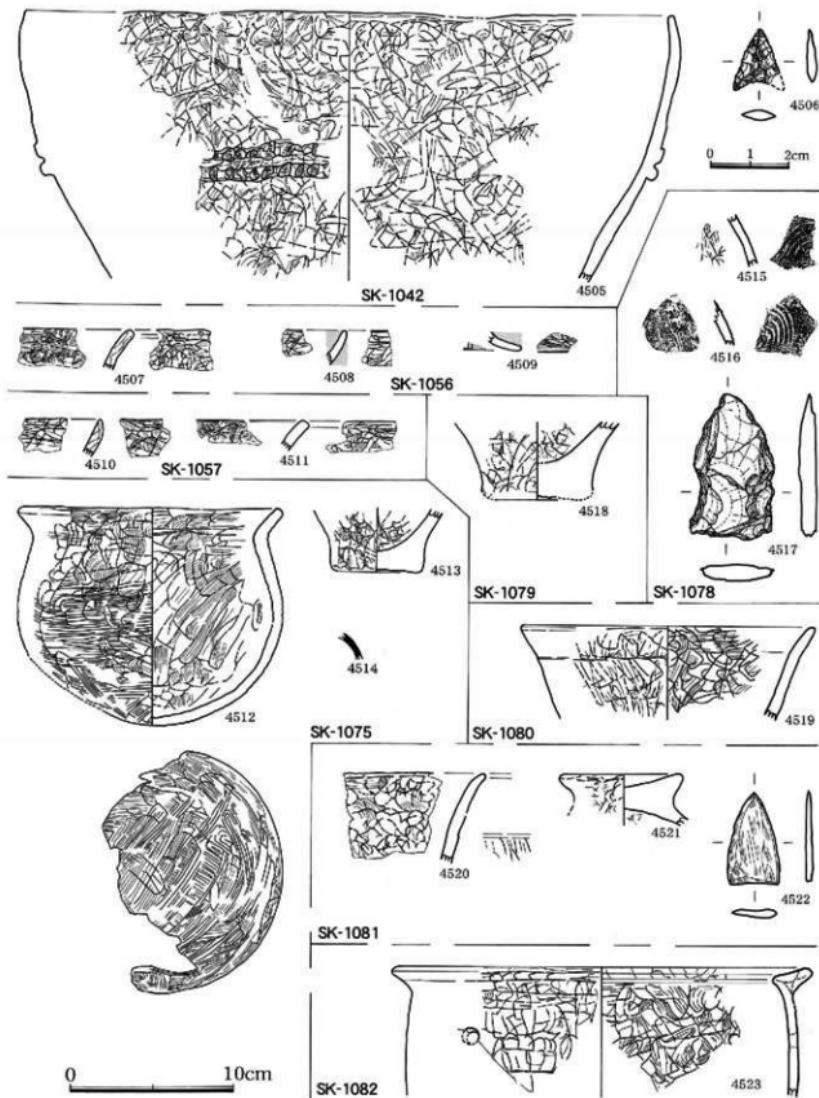


第448図 SK-988 出土遺物実測図(2), SK-1002-1003-1009-1010-1014-1017 出土遺物実測図

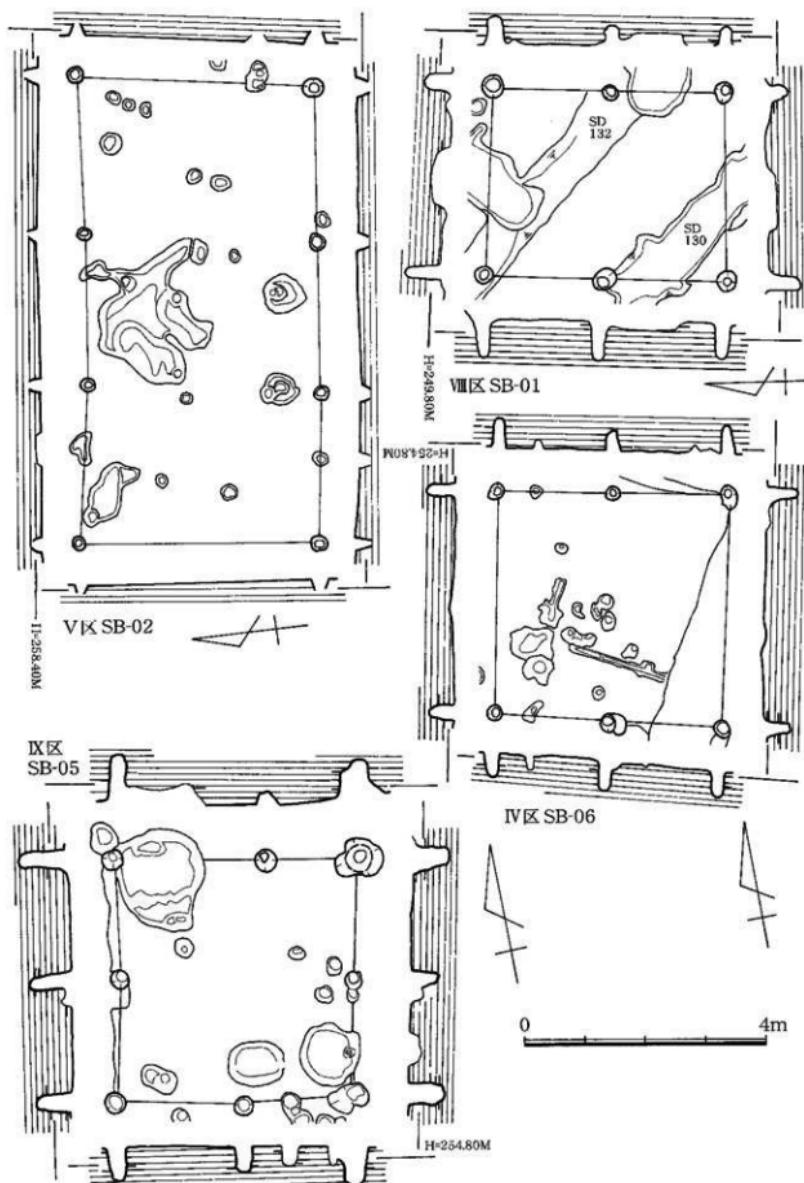


第449図 SK-1017-1018-1025-1042 出土遺物実測図(1)

いるが、図化に耐えない。



第450図 SK-1042 出土遺物実測図(2), SK-1056・1057・1075・1078~1082 出土遺物実測図



第451図 V区 SB-02, IX区 SB-05・06, VIII区 SB-01 遺構実測図

### S K-903 (第435図)

II区132号住居の南西6.6m、133号住居の南東4.7mに位置した、長径1.62m・短径1.50mの不整形圓形を呈し、深さ20~33cmを測る。底面東端が一段深く圓形に掘られている以外、特徴は無い。

### S K-1010 (第435図)

III区の東端、161号住居の南東2.2m、162号住居の北東2.8mに位置し、上部を170号溝に切られている。長径1.09m・短径1.03mの不整形圓形を呈し、深さ44~55cmを測る。覆土中位に遺物が集中し、弥生時代終末頃の土器片21点のほか、炭片や焼土塊が出土している。年代的には、161号住居の不要物廃棄坑と推定される。

### S K-722 (第436図)

III区56号住居の北1.2m、64号住居の南東3.8mに位置した、長径69cm・短径65cmの楕圓形を呈し、南東部に奥行き16cm・深さ5~6cmの突出部がある。土層的には、10cm程の削失が推定される。覆土から、弥生時代終末頃の土器片21点と焼土塊、炭化種子が出土している。

### S K-723 (第436図)

56号住居の南西1.4mに位置し、長径62cm・短径54cmの楕圓形を呈し、深さ14~16cmを測る。土層的には、10cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片6点が出土しているが、図化に耐えない。中層には、焼土粒が混じっている。

### S K-730 (第436図)

56号住居の南東4.1m、58号住居の北西4.7m、62号住居の南西3.8mに位置し、長径64cm・短径56cmの楕圓形を呈し、深さ8~19cmを測る。土層的には、10cm程の削失が推定され、底面は凹凸が激しい。覆土から、土師器片65点と赤色顔料粒1点が出土しているが、図化できたのは瓶1点(4324)のみである。

### S K-731 (第436図)

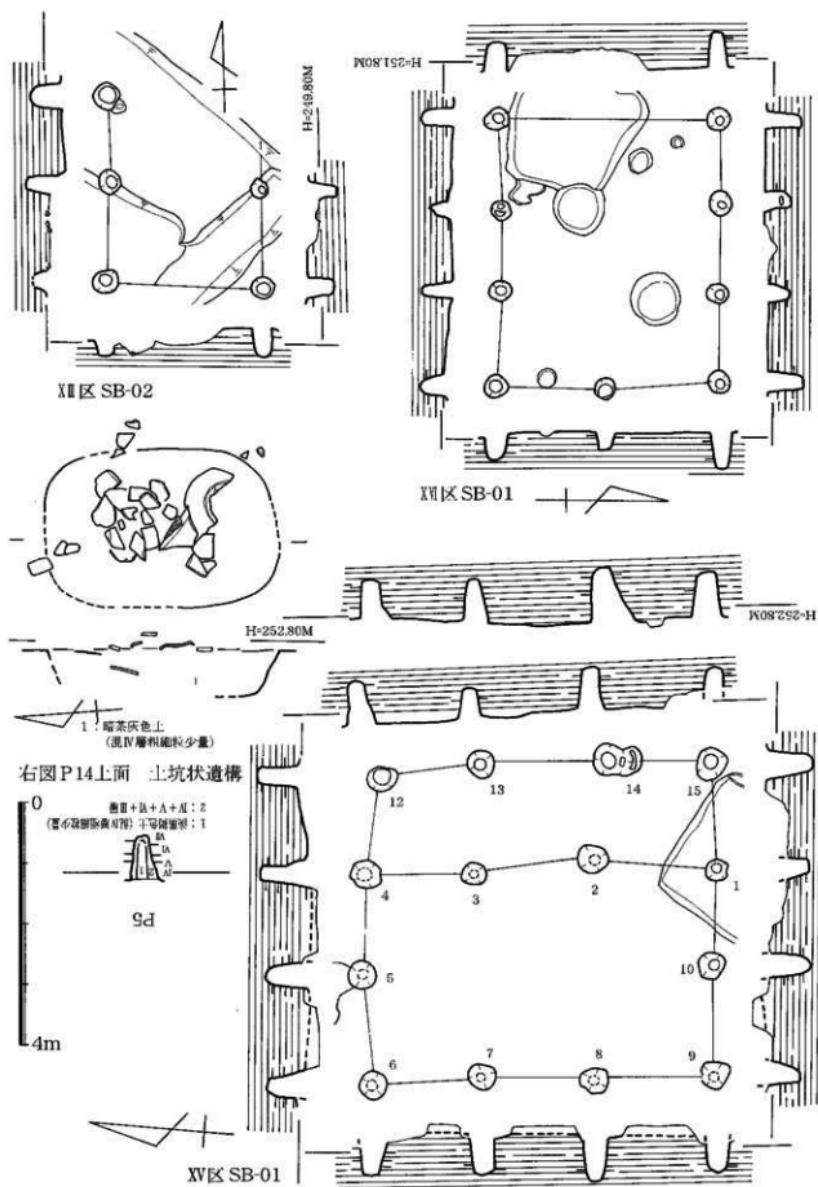
730号土坑の65cm南西、56号住居の3.3m南東、57号住居の5.4m北、58号住居の5m北西に位置し、長径61cm・短径49cmの楕圓形を呈し、深さ4~13cmを測る。土層的には、5cm程の削失と推定される。断面形態は、730号土坑に近似する。覆土から、土師器片18点が出土しているが、2点ほど図化できた。

### S K-854 (第436図)

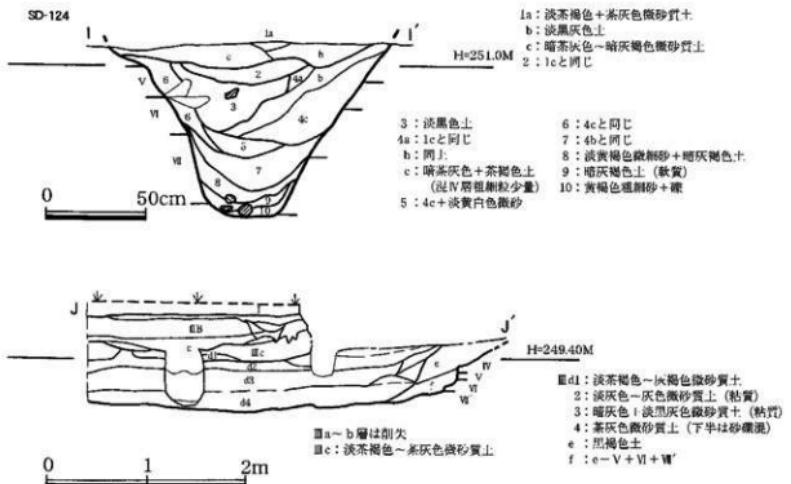
114号住居の西壁を切り、110号住居の南1.3m、111号住居の南70cm、140号住居の北3.3mに位置した、長径73cm・短径68cmの楕圓形を呈し、深さ13~17cmを測る。土層的には、10cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片34点と焼土塊が出土している。4405の蓋は、114号住居出土片と接合している。

### S K-1079 (第436図)

III区の197号住居の西50cmに位置した、長さ76~80cmの不整形土坑で、深さ5~11cmを測る。土層的には、5cm程の削失と推定される。覆土から、土師器片6点が出土しているが、1点のみ図化



第452図 XII区 SB-02, XIV区 SB-01, XV区 SB-01 遺構実測図



第453図 SD-124・SA-56の南側拡張部西壁層序図

できた。197号住居の周堤下にあたり、未調査区域の住居に付随するものと推定される。

#### S K-1080 (第436図)

205号溝の底面で検出した、197号住居の東9.3mに位置する。長さ93cm・幅69~79cmの不整形なプランを呈し、西壁はスロープ状になっている。深さは11~14cmを測り、土層的には5~10cmの削失が推定される。覆土から、土師器片7点が出土しているが、1点のみ図化できた。

#### S K-840 (第438図)

III区109号住居に切られた、長径1.90m・短径1.4m程の楕円形を呈し、深さ50~53cmを測る。土層的には、10cm程の削失が推定される。覆土から、土師器片242点と須恵器片5点が出土しているが、図化できたのは少ない。

#### S K-859 (第438図)

XII区117号住居の南西9.5m、123号住居の南南東11.4m、125号住居の北東9mに位置した、長径1.9m・短径1.6mの隅円方形の北東部に、幅1m・奥行き40cmのステップが付く。ステップは深さ3cm程、土坑は24~28cmを測り、土層的には10~15cmの削失が推定される。形態的には、片側小口付設土坑に含めておく。覆土から、土師器片59点が出土しているが、図化できたのは僅か3点である。

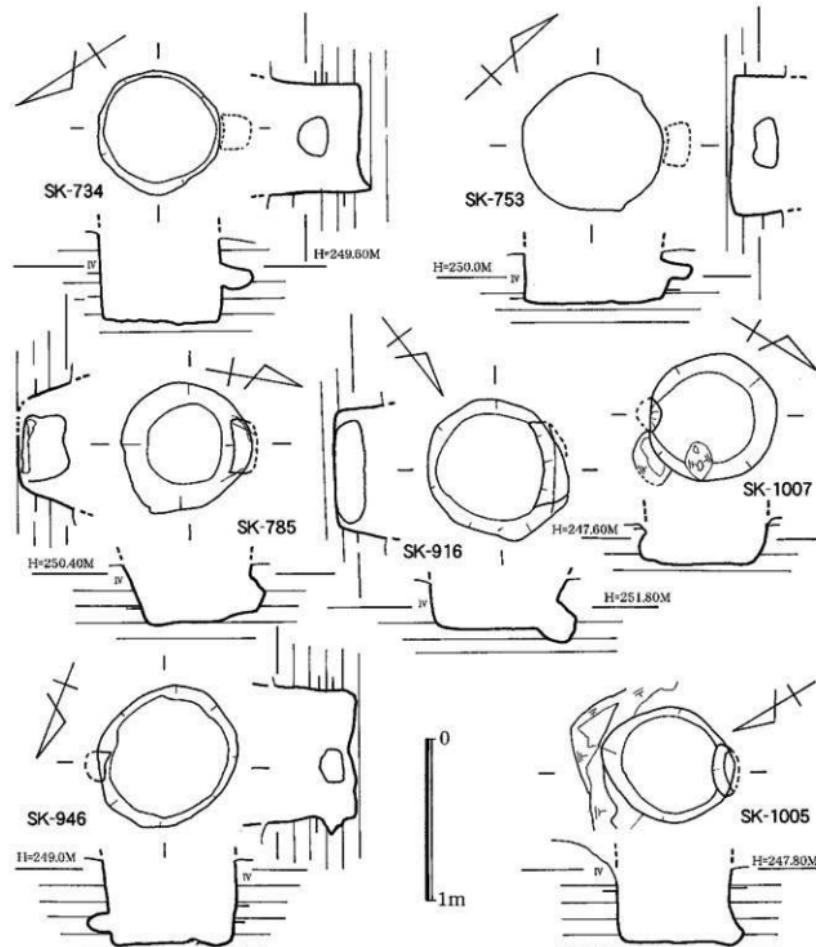
#### S K-943 (第438図)

161号溝に切られ、115号住居の南1.6m、140号住居の南東1.0m、142号住居の北東1.9mに位置した、長径1.87m・短径1.75mの楕円形を呈し、深さ15~18cmを測る。土層的には、10cm程の削失

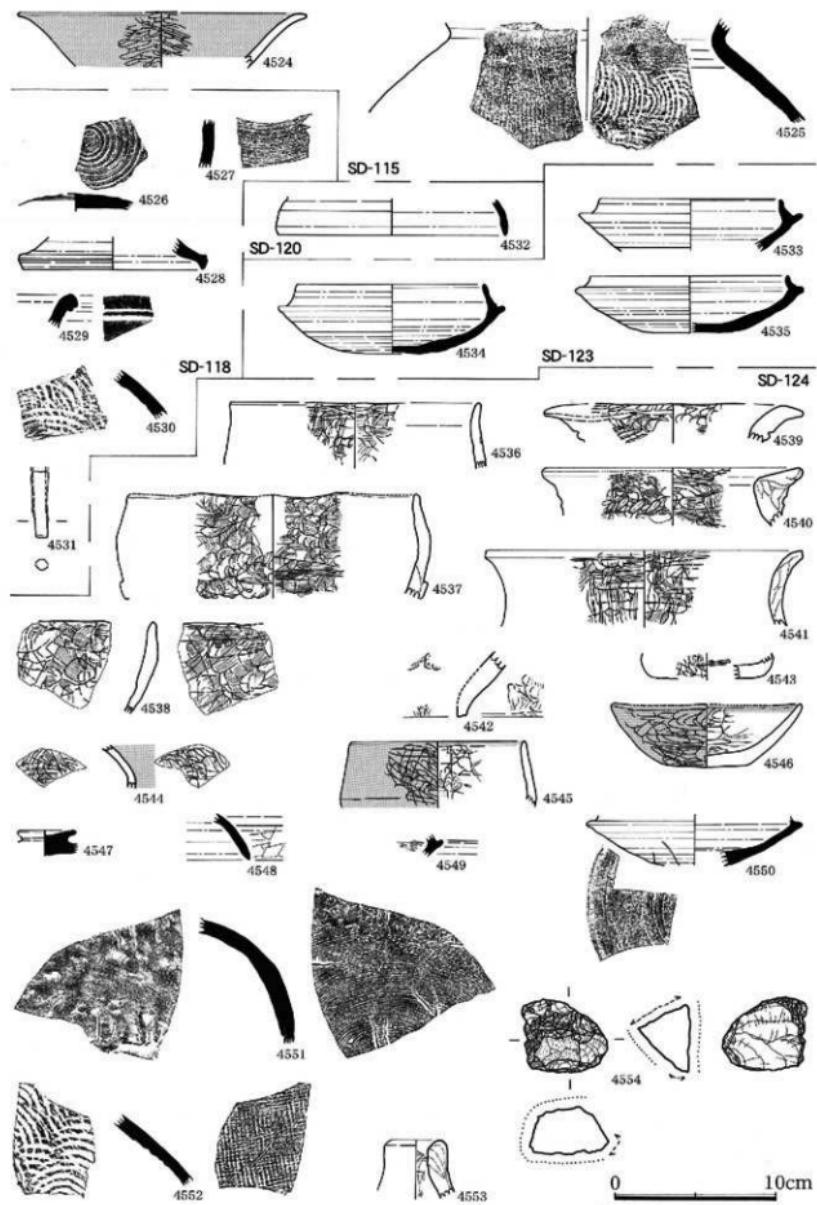
が推定される。底面には3基の小pitがあるが、住居址と推定できる要素が無いので、土坑としておく。覆土から、土師器片158点と須恵器片2点が出土しているが、図化できたものは僅かである。

#### SK-1043 (第438図)

XV区185号住居の南東5.6mに位置した、長径90cm・短径69cmの指円形を呈し、深さ8cm程の浅い掘り込みである。覆土の殆どは焼土であり、土師器片3点と被熱磧2点が出土した。当遺構の0.8~1.2m外方には小pit3基(直径30~42cm・深さ20~43cm)があり、掘り込み炉を有する掘立柱建物

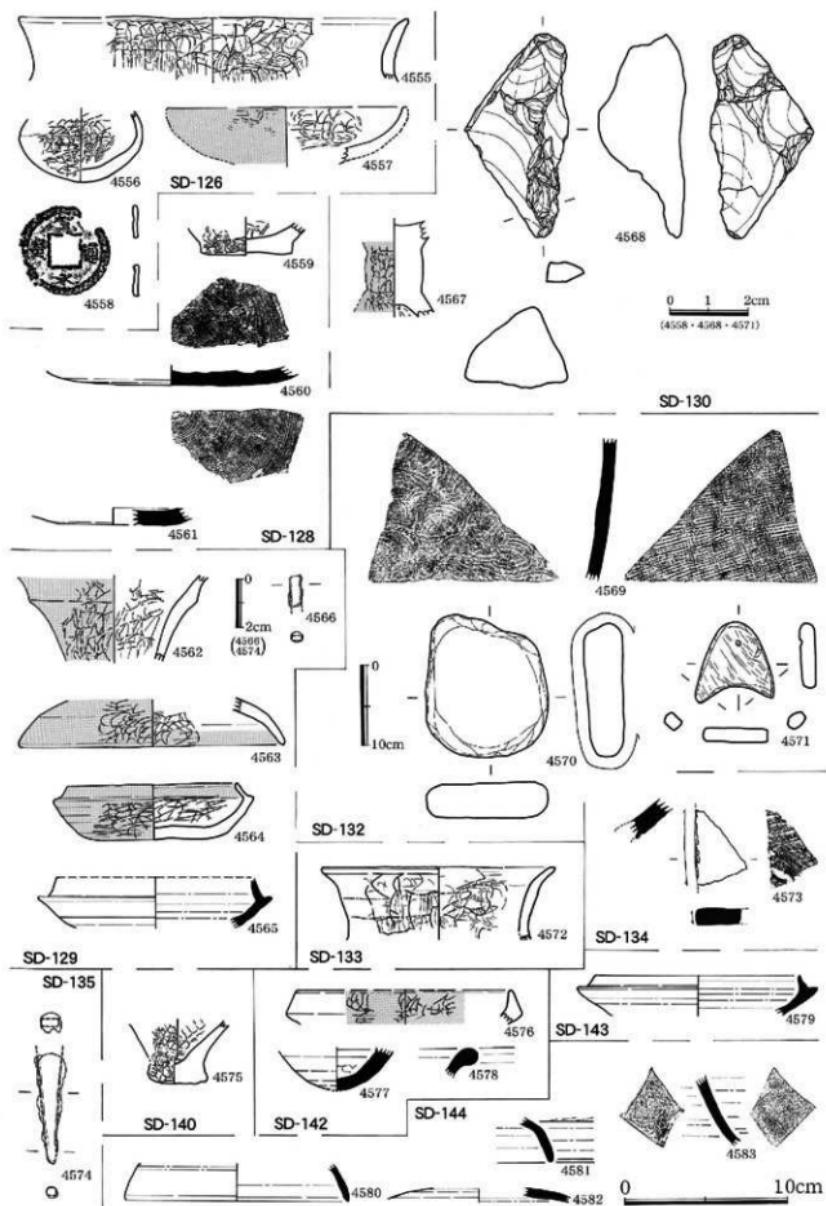


第454図 仏龕付設座棺墓 遺構実測図

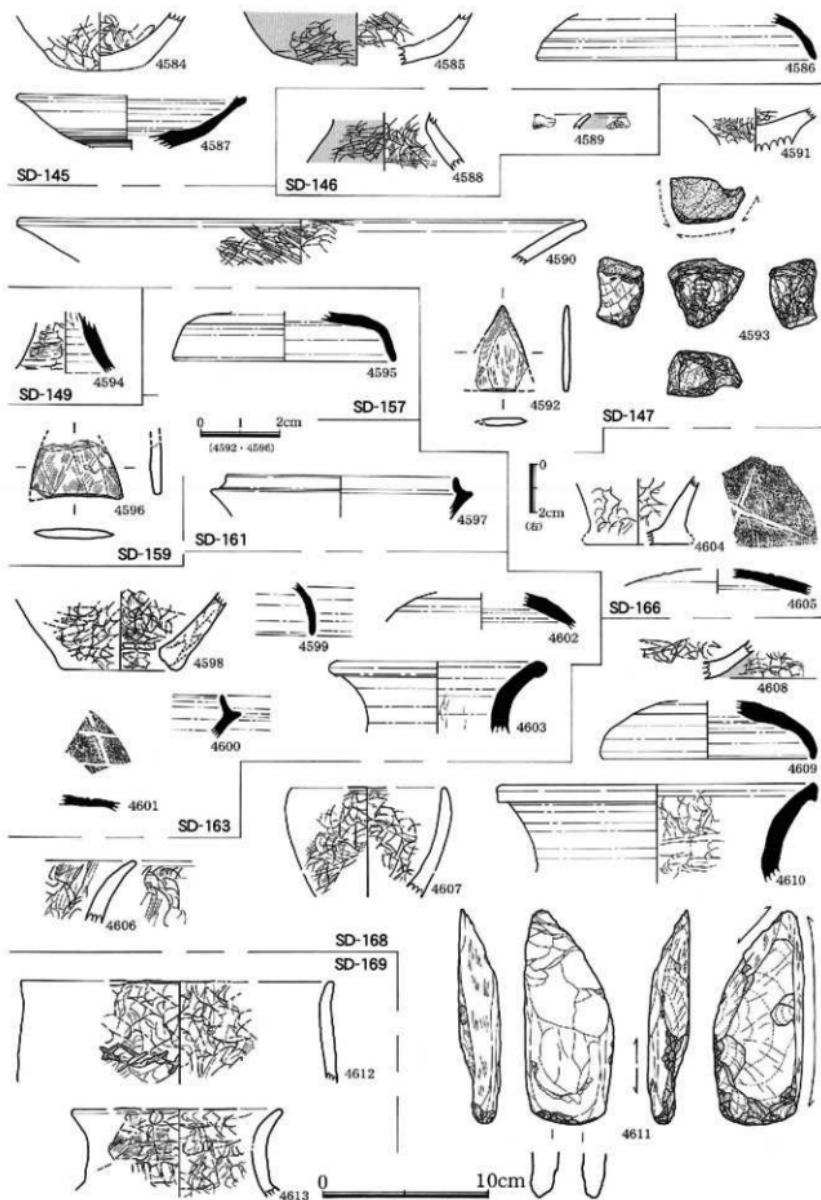


第455図 SD-115-118-120-123-124 出土遺物実測図(陶磁器以外)

4531は1:2  
4547はSA-123出土



第456図 S D-126・128~130・132~135・140・142~144 出土遺物実測図(陶磁器以外)



第457図 SD-145~147・149・157・159・161・163・166・168・169 出土遺物実測図(1) (陶磁器以外)

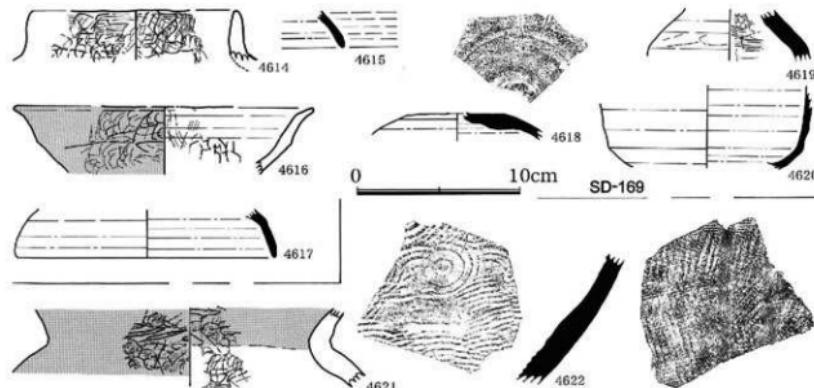
跡が存在したかもしれない。

S K-1044 (第438図)

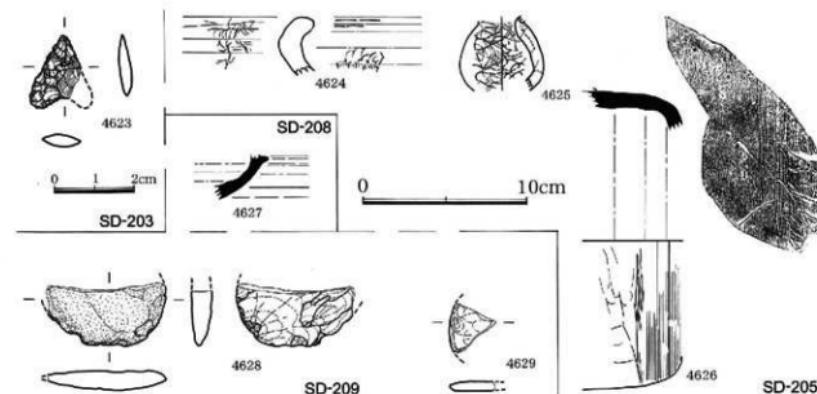
185号住居の北4.3mに位置し、186号溝に東側を切られた、長径1.53m・短径1.13mの楕円形を呈するが、南側はスロープ状に突出するとみるべきであろうか。深さは15cmを測り、覆土から、土師器片11点が出土しているが、図化に耐えない。

S K-1075 (第438図)

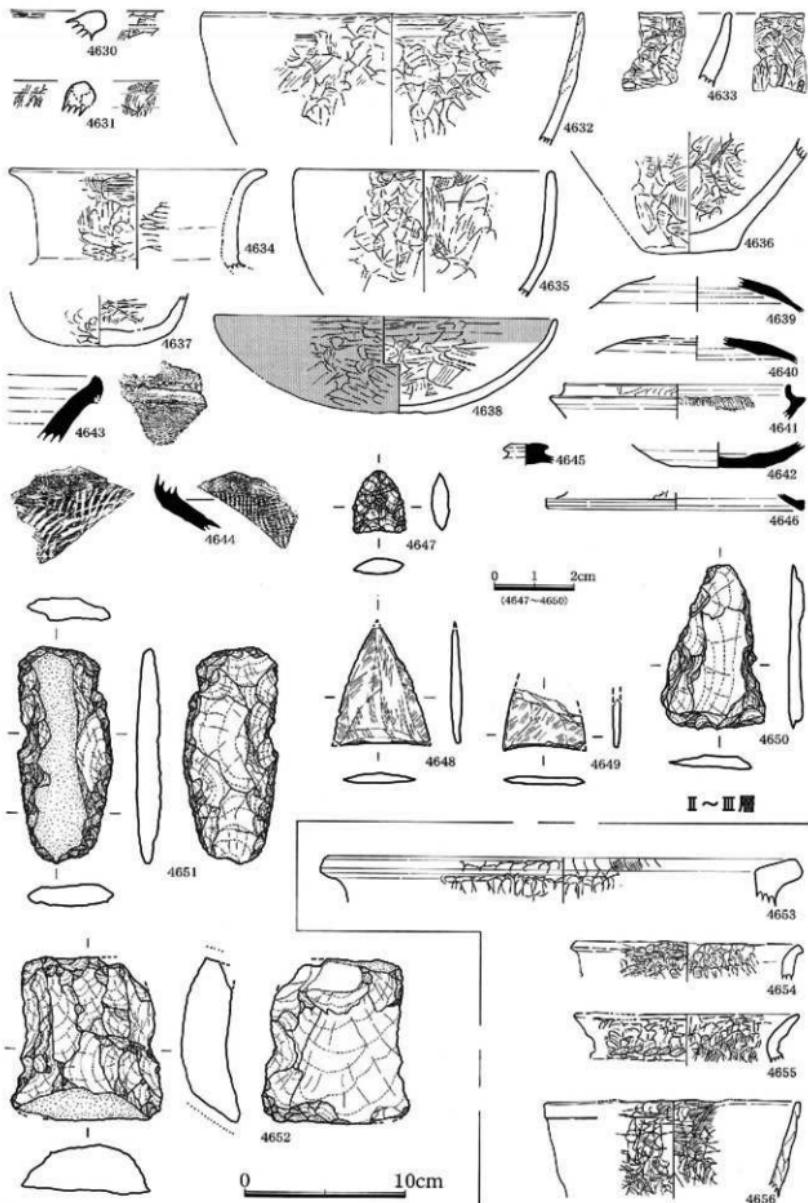
IV区北中部、01号掘立柱建物と座棺墓（S K-1068）に切られた、幅2.0m、長さ1.6~2.2mの隅円台形を呈する。深さは29~33cmを測り、主柱穴や炉・壁溝は無い。覆土から、土師器片57点と須



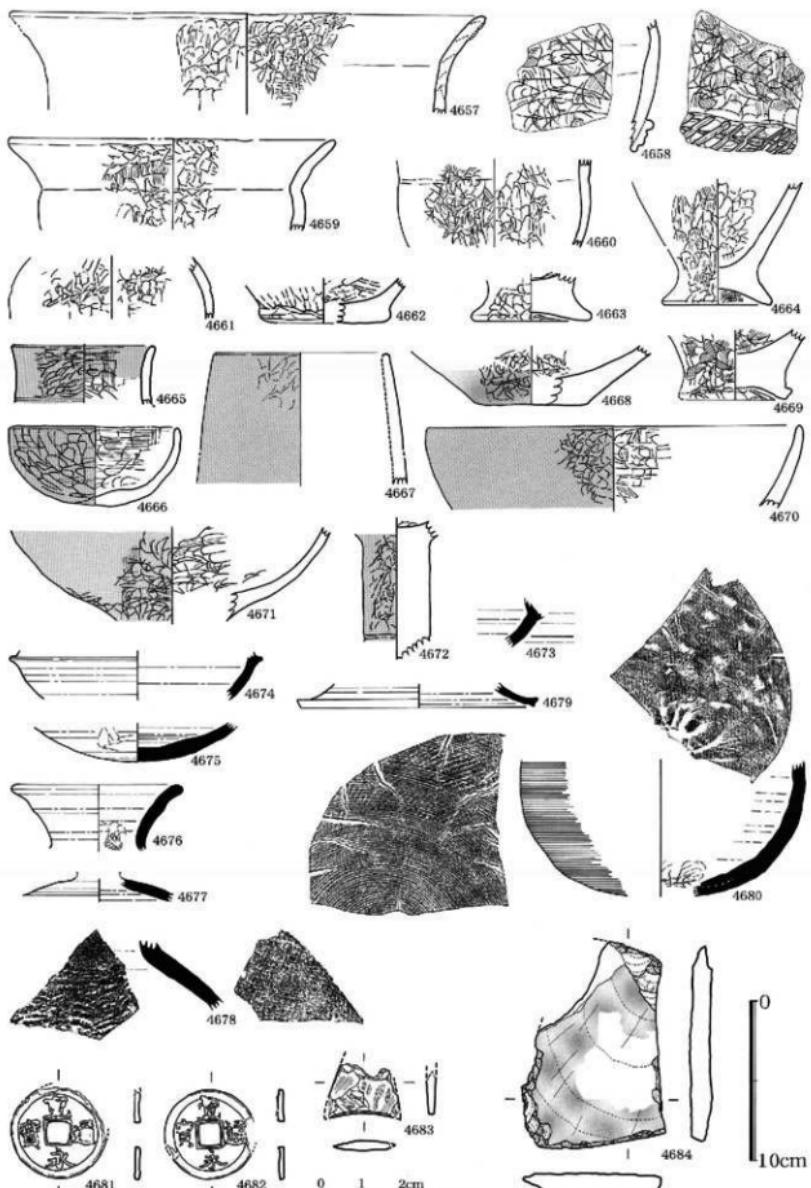
第458図 SD-169 出土遺物実測図(2), SD-172 出土遺物実測図(陶磁器以外)



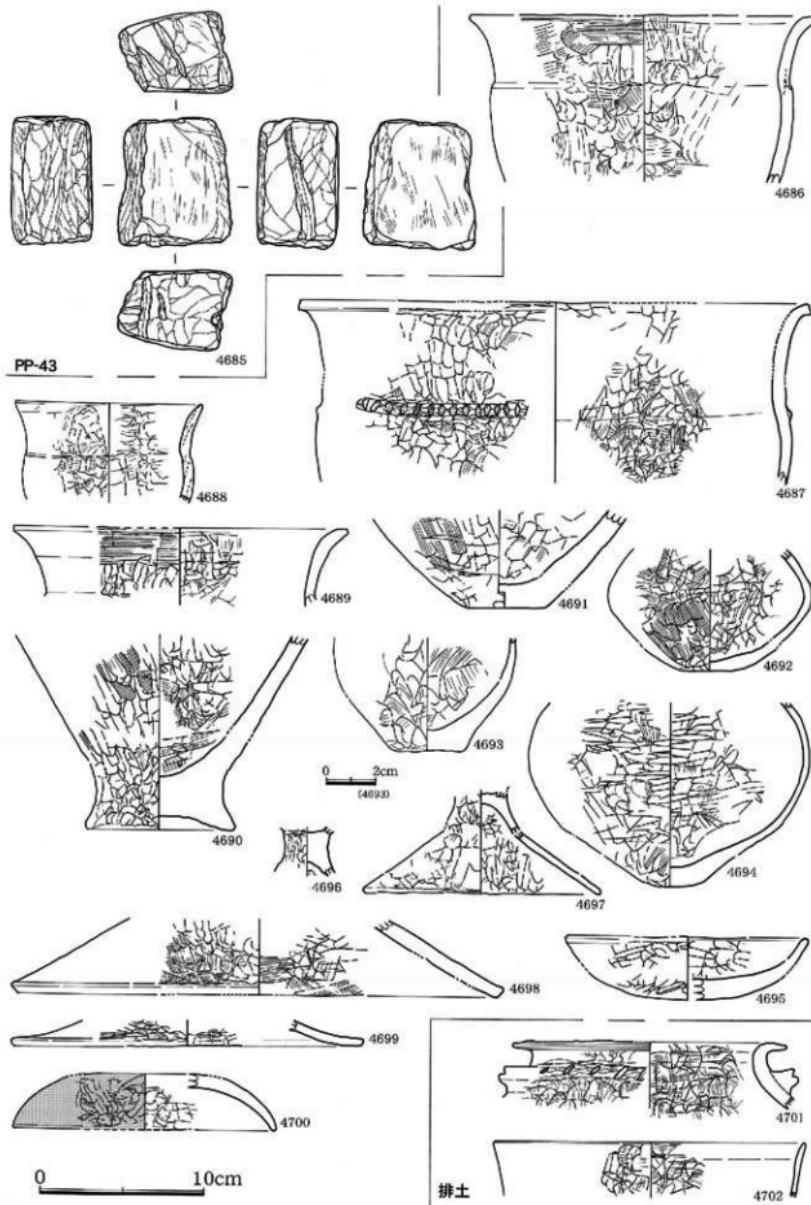
第459図 SD-203・205・208・209 出土遺物実測図(陶磁器以外)



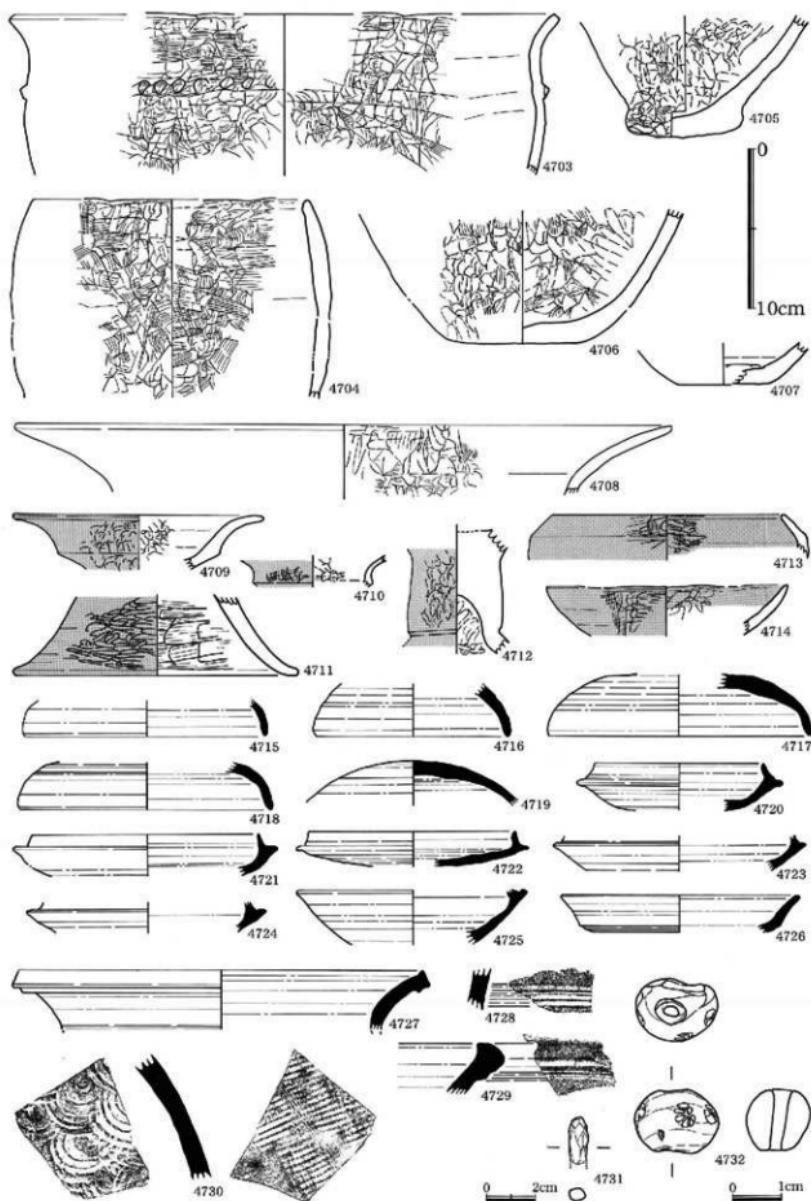
第460図 XI・XI区 II～III層・SA-116上Ⅲc層出土遺物実測図(1)



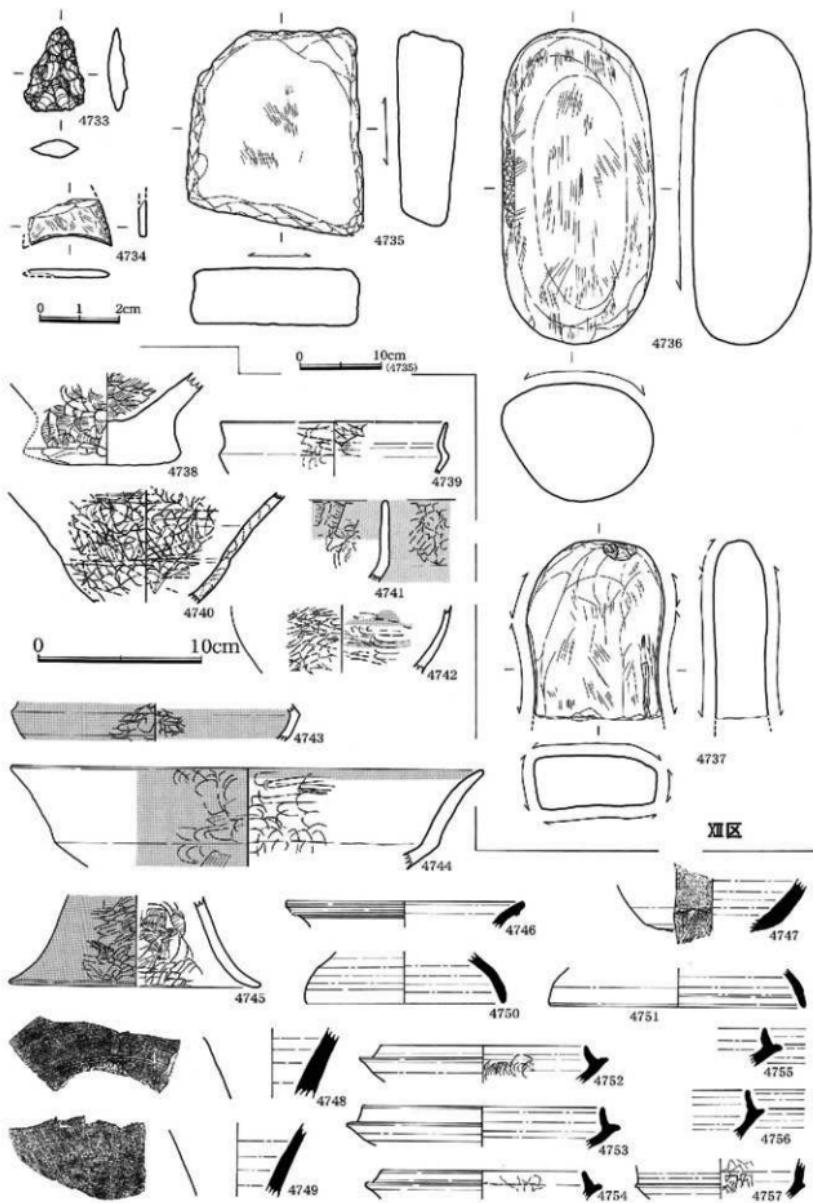
第461図 XI区 SA-116上Ⅲc層出土遺物実測図(2), II~Ⅲ層ほか出土遺物実測図



第462図 滋区 PP-43・SA-65上IIIc層出土遺物実測図(1)



第463図 XII区 II～III層・pitほか出土遺物実測図

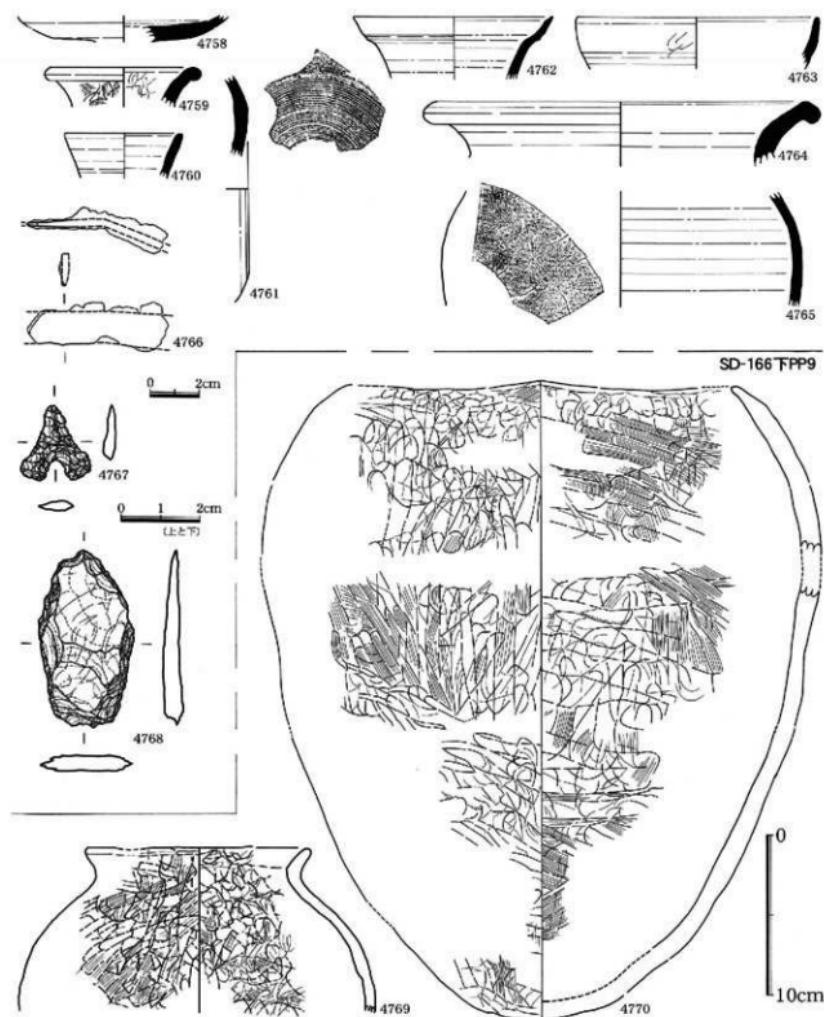


第464図 XII・XIV区 II～III層ほか出土遺物実測図

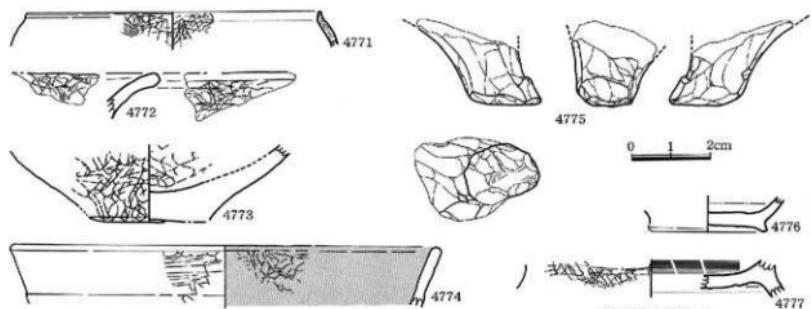
器片 1 点（混入か）が出土している。古墳時代前期の土坑である。

S K-973 (第439図)

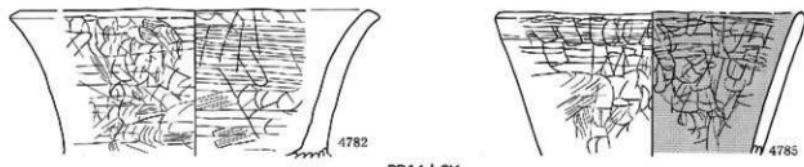
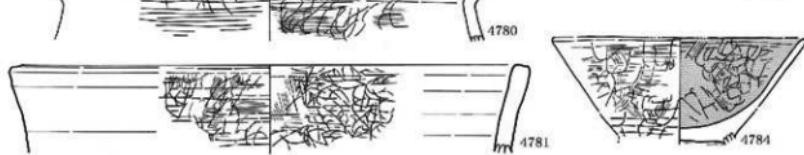
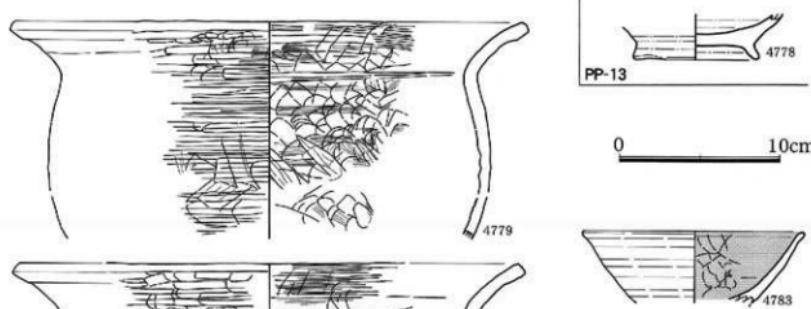
市區153号住居の南西3.8m、154号住居の西3m、161号住居の東5.1mに位置した、長径1.76m・短径1.70mの半円半隅円方形を呈する。深さは7~15cmを測り、土層的には10cm程の削失が推定さ



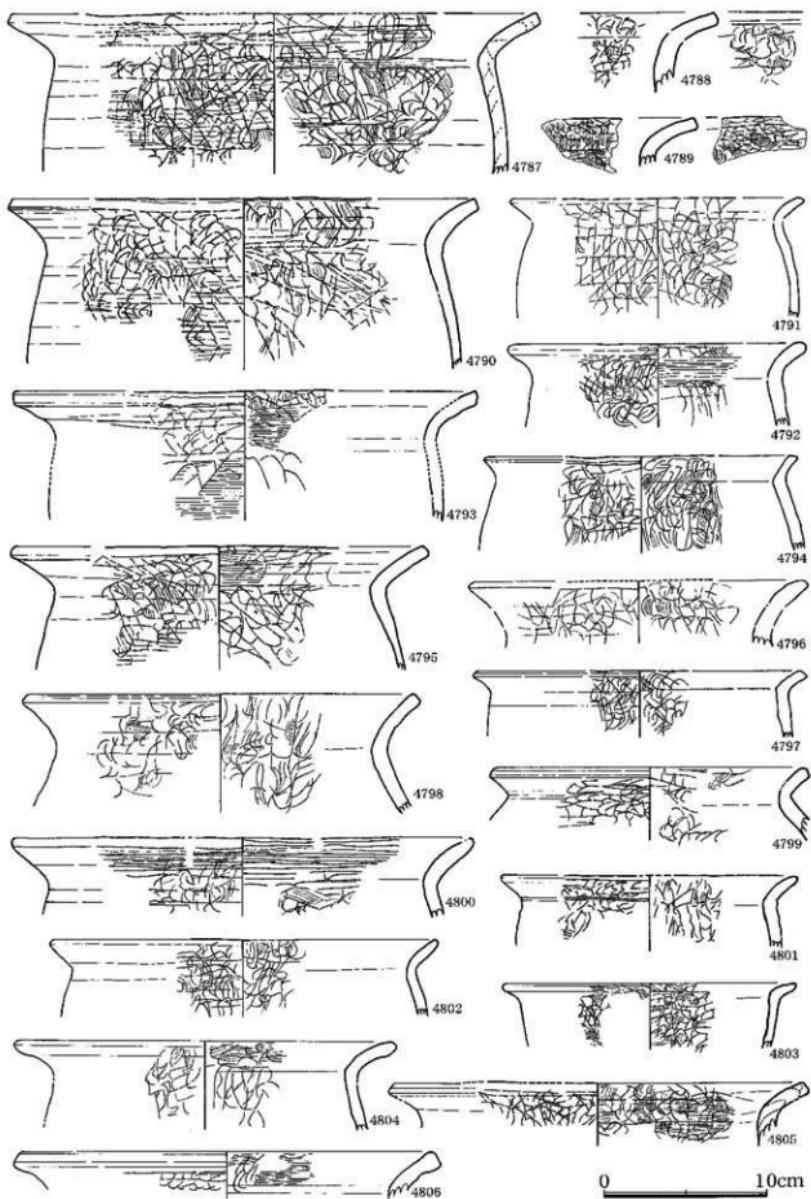
第465図 XI区 II~III層ほか出土遺物実測図



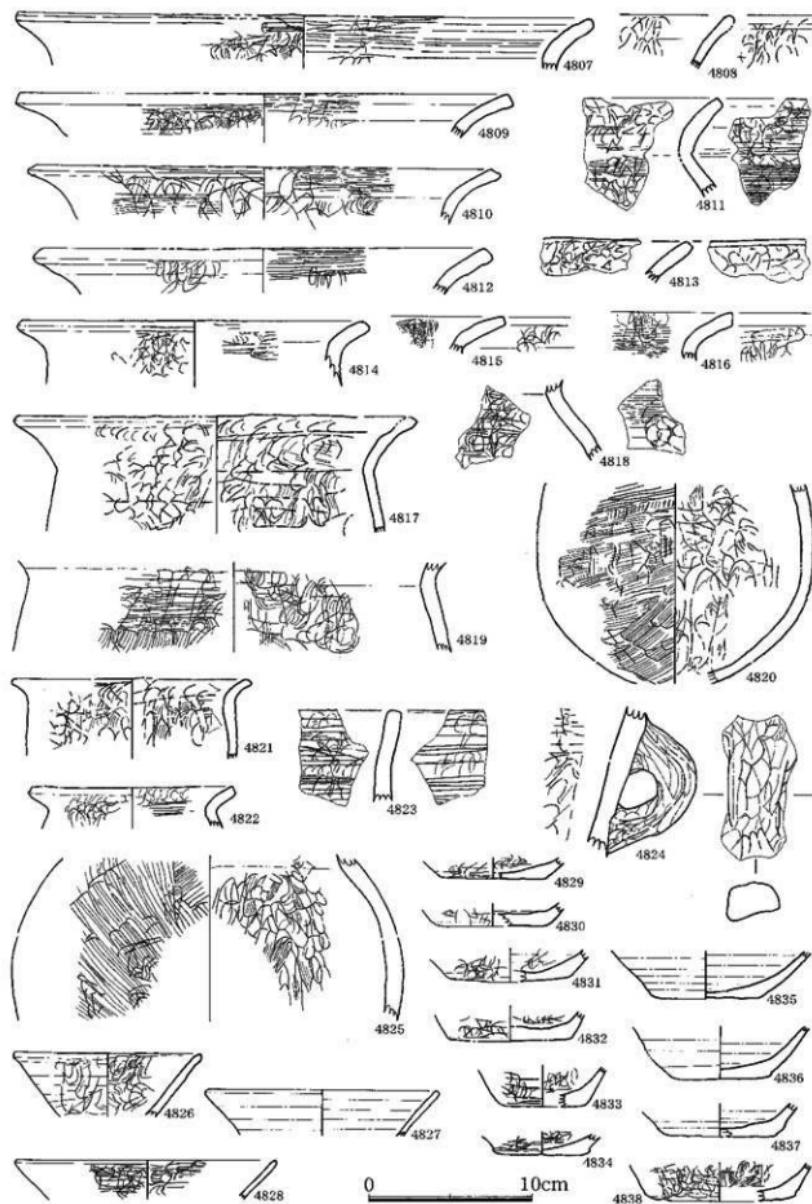
南西部II層ほか



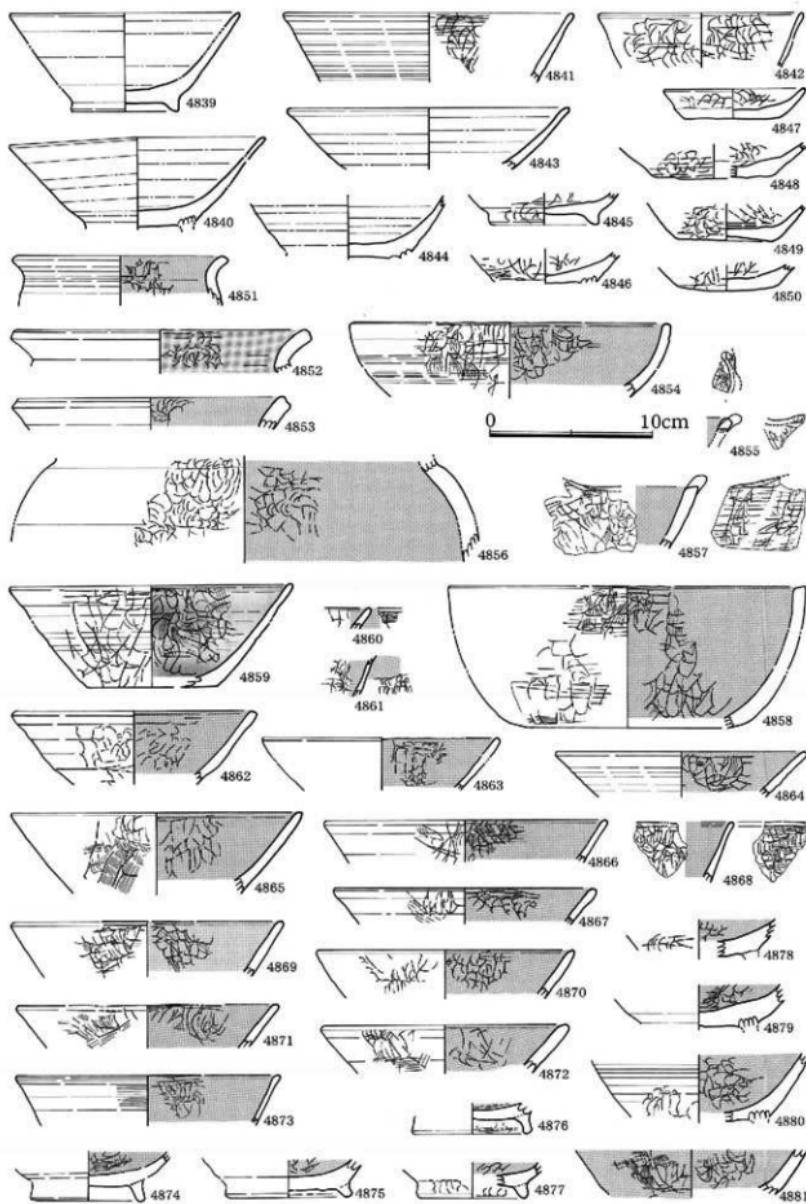
第466図 XV区 II層・PP14上SKほか出土遺物実測図



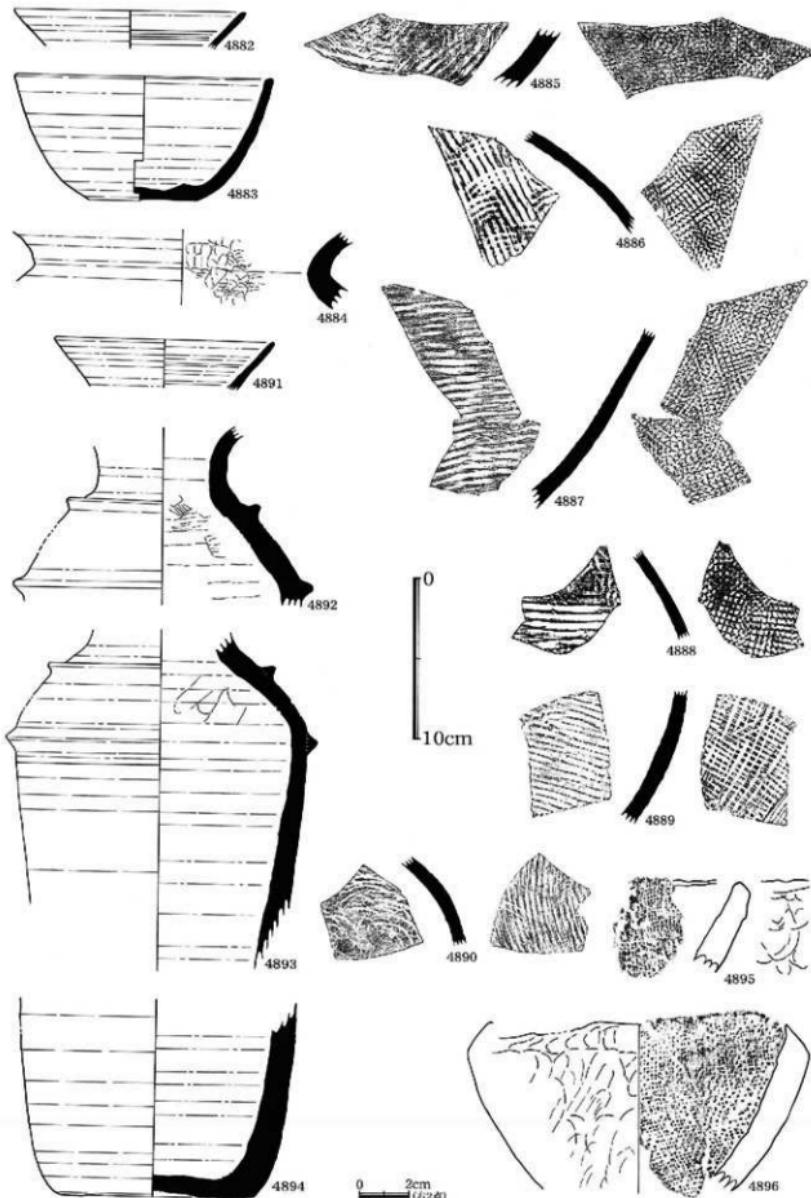
第467図 XV区 IIIc層出土遺物実測図(1)



第468図 XV区 IIIc層出土遺物実測図(2)



第469図 XV区 IIIc層出土遺物実測図(3)



第470図 XV区 IIIc層出土遺物実測図(4)

れる。1b層上面は平坦であるが縮まってはいない。柱穴や炉も検出されなかったことから、住居には含めない。覆土から、土師器片88点と須恵器片1点が出土しているが、図化できたのは僅かである。

#### S K-1002 (第439図)

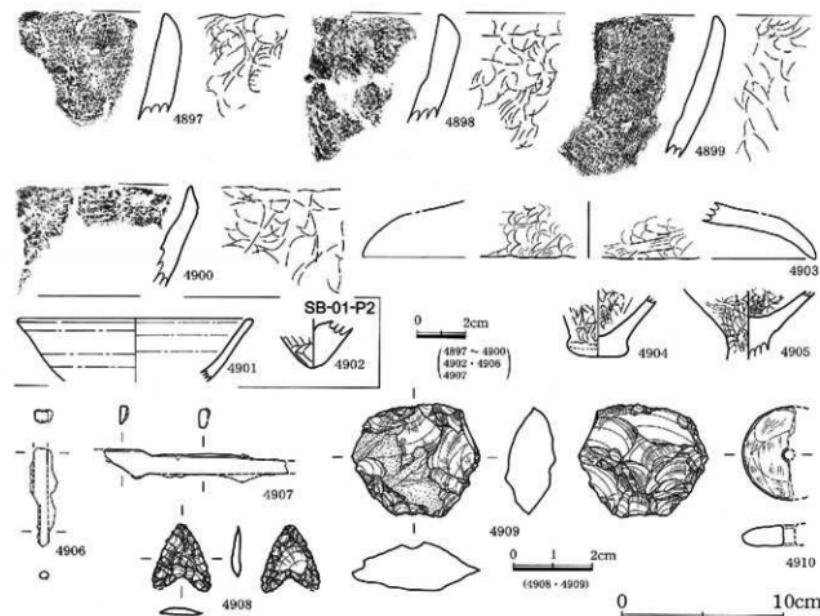
156号住居の南1.1m、157号住居の東3.5m、159号住居の北西3m、158号住居の南西4.7m程に位置する、直径1.28mの円形を呈し、深さ13~16cmが遺存する。土層的には、35cm程の削失が推定される。北東部は底面が6~7cm高くなっている。覆土から、土師器片88点と須恵器片2点(4479・4480)が出土している。須恵器は酸化・生焼けである。

#### S K-1022 (第439図)

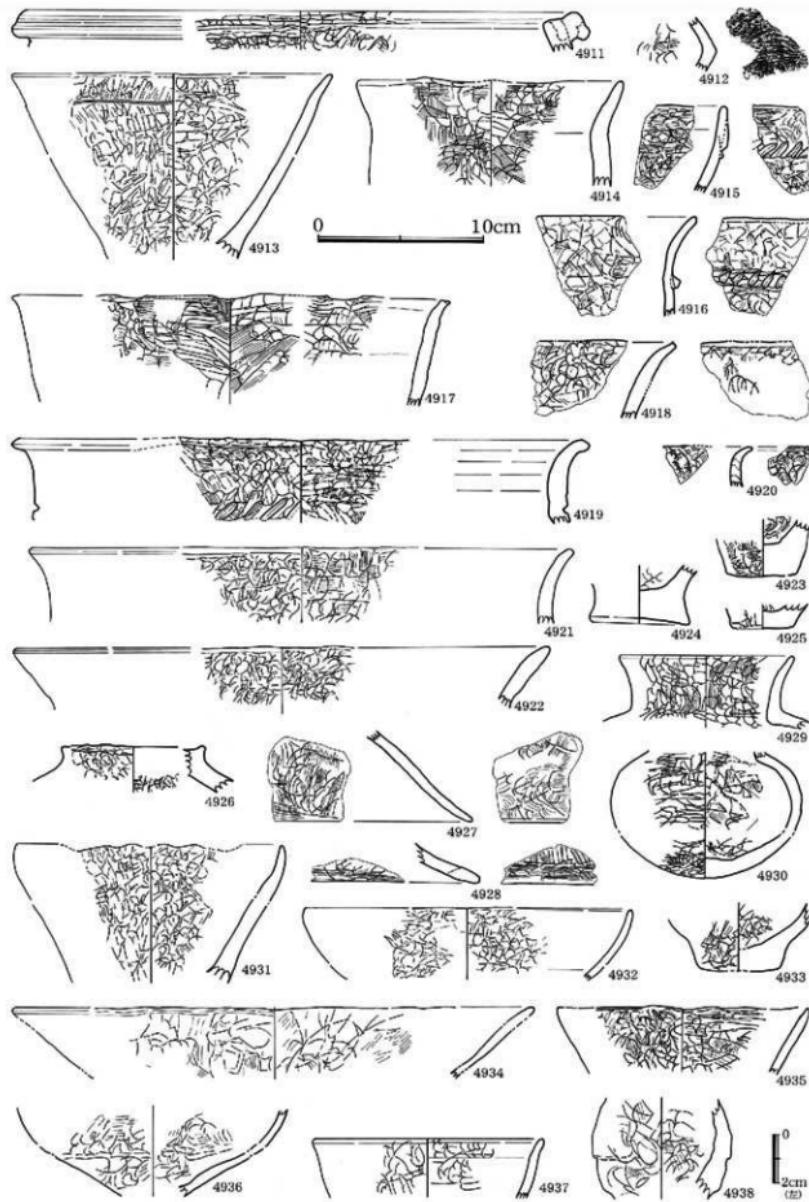
183号住居の西2m付近に位置する、長径97cm・短径84cmの不整梢円形を呈し、深さ25~28cmを測る。土層的には20cm程が削失していると推定される。覆土から土師器片5点が出土しているが、図化に耐えない。

#### S K-1055 (第439図)

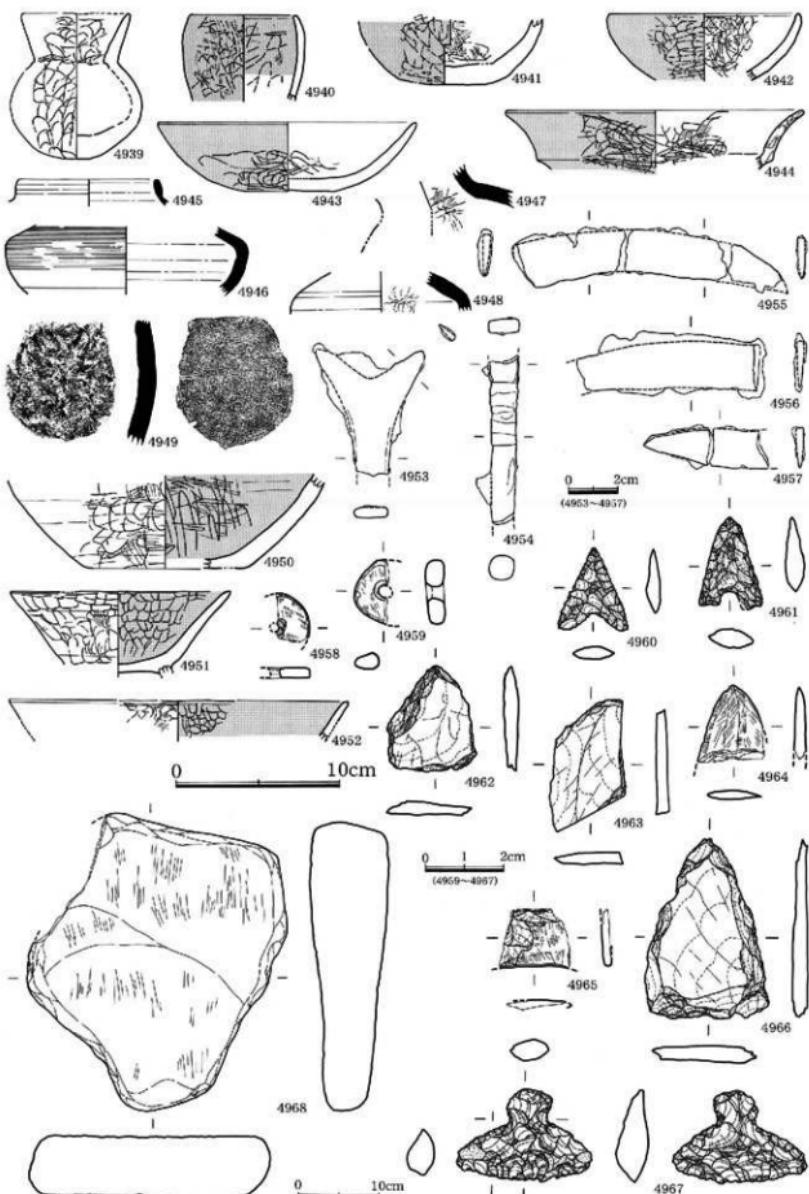
XIV区188号住居の北3m、189号住居の北西5.2m、190号住居の南東3.2mに位置した、長径1.4m・短径1.12~1.21mの不整梢円形を呈し、深さは15~29cmを測る。土層的には、15cm程の削失が推定



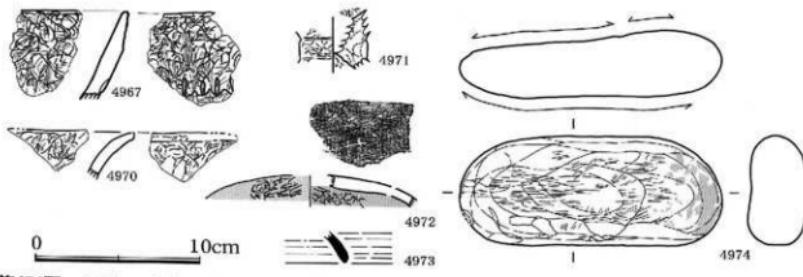
第471図 XIV区 IIIc層ほか出土遺物実測図



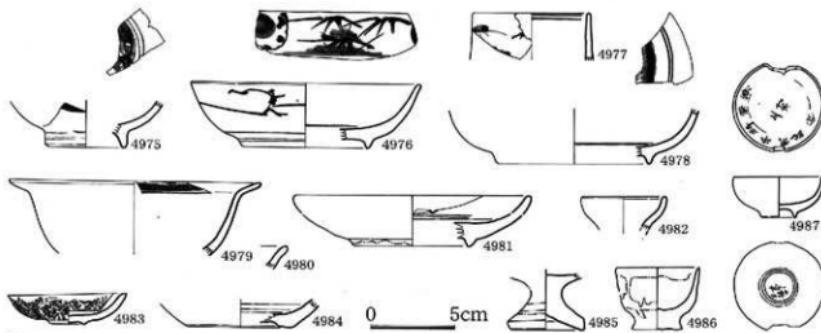
第472図 XI区 IIIc層出土遺物実測図(1)



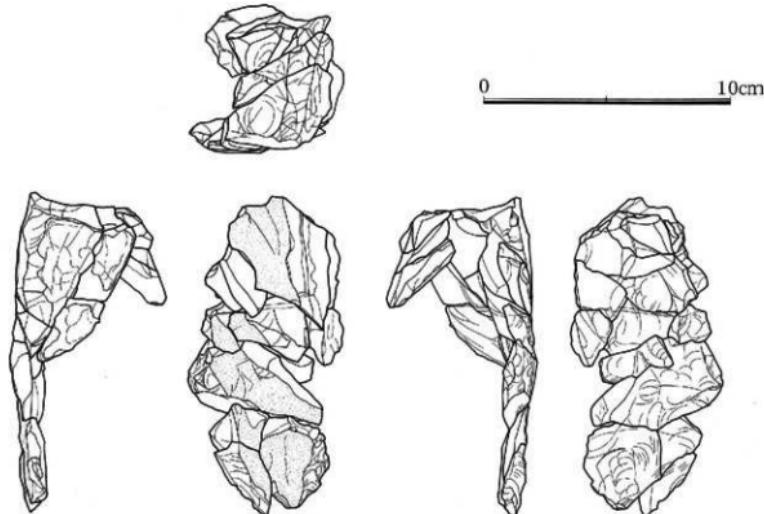
第473図 XI区 IIIc層出土遺物実測図(2)



第474図 XIII区 III層ほか出土遺物実測図



第475図 XII～XIII区出土 輸入陶磁器・近世以降国産陶磁器 実測図



第476図 S L-01 出土剥片 接合資料1